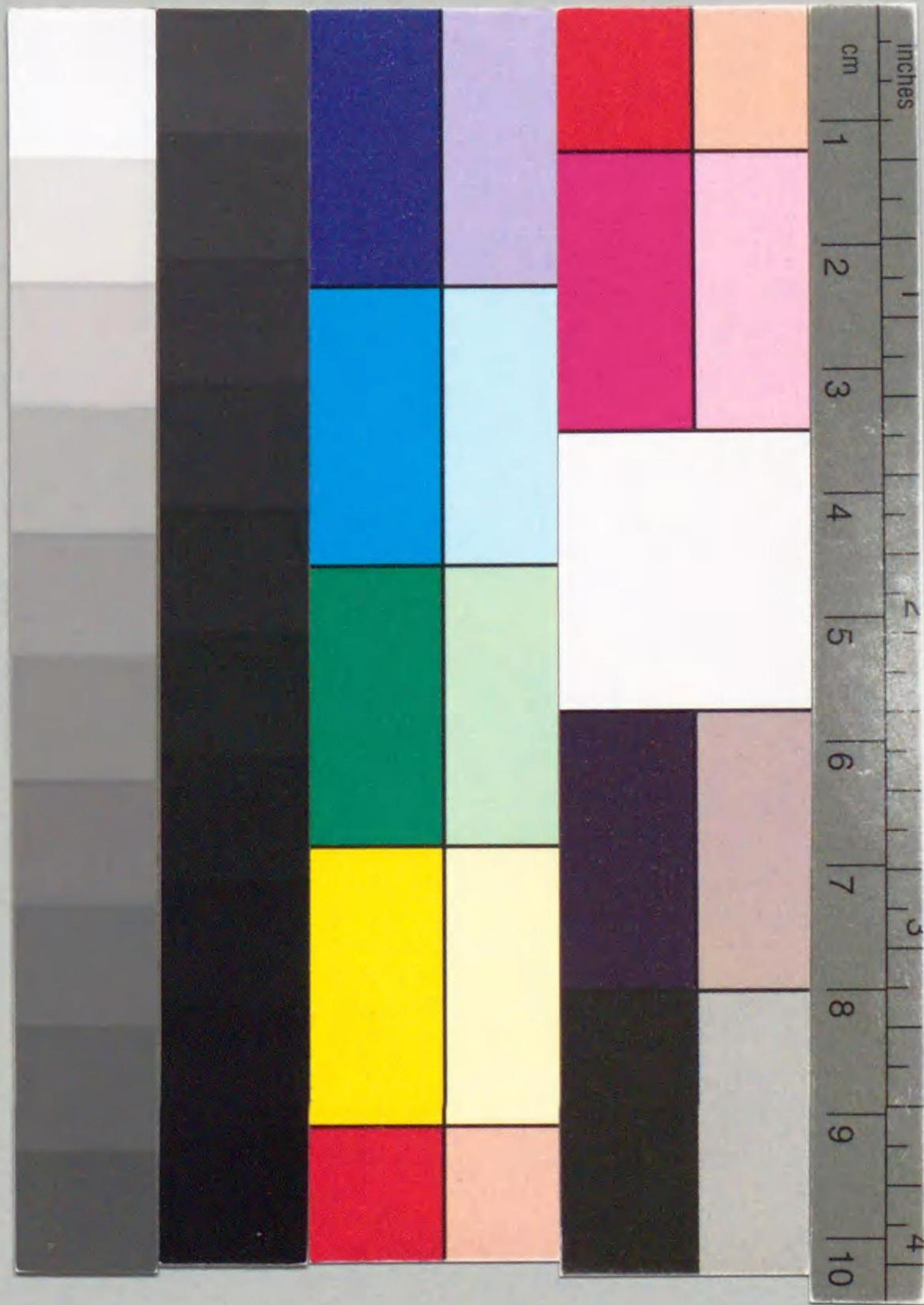
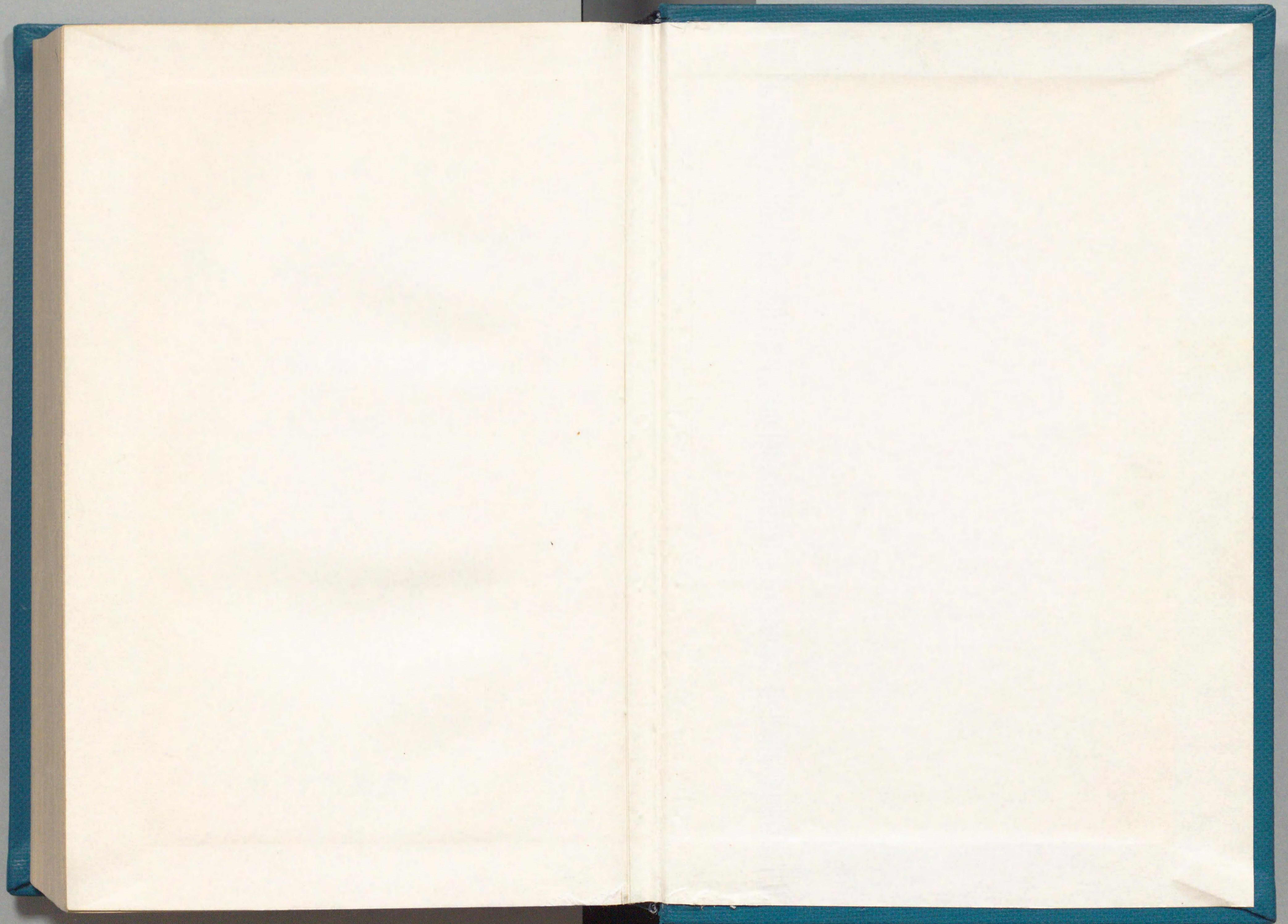


918.6
Ta977k



00298637





IL9E75

著 袋 花 山 田

集 全 袋 花

卷 五 十 第

集 想 感

會 行 刊 集 全 袋 花



(年一十四治明) 著者の頃たい書を「壺キンイ」

918.6
Ta977k



295637

序 文

田山君と私とは随分久しい間の同僚であつたが、其の最初に相知つたときの記念としては、明治三十二年九月九日附にて、博文館の大橋乙羽君から、當時牛込區矢來町に住んだ私宛の左の親展書を保存して居る。

拜啓 今夜十時の汽車にて發途仕候。明朝静岡にて要事を濟まし、それより伊勢へ参り可申候。又田山花袋の事は、大兄より館主へ御注意被下度、その前大兄の宅へ田山を呼び寄せ、大體の方針を御話有之度奉願候。同人へも大兄より不日御招き有之由申通じ置候。

留守中宜敷御助勢願上候 敬具

九月九日

大橋乙羽

坪谷大兄

序 文

之に依ると、當時の田山君は、まだ一個の青年文士で、其名は餘り世に知られて居なかつたことが分かる。尤も明治四年十二月十二日に、群馬縣館林町に生れ、當年二十九歳の田舎出の青年にて、其の天稟の偉材は、未だ世に發揮する機會が無かつたのだから無理も無い。

然るに博文館へ入て先づ中學世界の編輯を主宰して居る間に、メキ／＼と其の手腕を現はし、遂に明治三十六年から、博文館にて出版に着手したる山崎直方、佐藤傳藏兩氏著作の大日本地誌編輯主任となり、同館の出版としては、前後に曾て其例なき、番町なる大橋家本邸の一室を其の編輯室とし、當時多數の同僚から羨まれ、更に翌明治三十七年の春、日露戦役の起るや、また拔擢せられて出征第二軍司令部に屬する從軍寫眞班主任として、數

人の寫眞技師を率ゐ、遼東半島の敵前上陸から、南山、得利寺、大石橋等の轉戰に従ひ、其頃未だ他の新聞雜誌各社の從軍記者の許可なき間に、縦横の健筆を以て戦況を報道し、其れに依て忽ち文壇の鬼才と目せられた。

斯くて同年九月戦地から凱旋以來、文章世界に従事し、創作に、紀行に、非常なる盛名を博した中にも、明治四十年の「蒲團」四十一年の「一兵卒」生、妻、四十二年の「田舎教師」などの傑作を公にし、一編出る毎に帝都の紙價を高からしむるほどの好評を博した。

私は君が博文館入館の當初から、大日本地誌の編輯にも、滿洲への從軍にも、又は文章世界の主任となるにも、常に其議に参加し、大正元年君が獨立して著作に従ふまで十三年餘の間の同僚であつたから、入館當時未だ無名の田舎出の一青年が、斯く一世

の文豪となるまでの経歴を知るが故に、尊敬の念が殊に深いのである。

遺憾な事は當初に田山君を博文館に推薦したる大橋乙羽君が、明治三十四年に歿し、田山君の此の大成功を見るに至らなかつたことである。然れども私は乙羽君が田山君に望を屬して、推薦したる鑑識を誤らなかつた事に敬服して居る。

昭和十一年十二月

坪 谷 水 哉

花袋全集 第十五卷 目次

序 文(坪谷水哉)

イン キ 壺.....

- 印象派(三) 短篇(九) 本能(九) 自然力の去來(二〇) モウバツサンの憂愁(二)
- 藝術家の心(二) 歌集一卷(三) 『徒勞』の作者(六) 泡鳴氏の耽溺(七)
- フレツシといふ(二) 神經家の言(二) ブルジエエの短篇(九) ルウド
- ウイツヒ、ガクホーヘル(二) オシツプ・シユビン(三) 人生のための藝術(三)
- イギリスの短篇(三) 一國の首都(五) 充實した文章(五) ボスサン!
- 西鶴(二) 男と女(五) 新聞の批評家(〇) 『マダム・ボワリーの故郷』(三) 心持と書き方(三) 情緒(五) 一葉亭四迷君を思ふ(三七) 偏奇怪僻の人物(四) 象徴派(四) ブルジエエの心理描寫(四) 新茶のかほり(四) 都會の夏と田舎の夏(四) 最も感興を惹いた山水(五) 書くときと見ると(五六) 田中喜一氏の『泡鳴論』(五) 現實(五) 欲望と理想(五六) エミール・ゾラ(五) 『田舎教師』の日記(五) 踏査(六) 描寫と説明(六) ホルツ、シユラア
- フの『死』(六) フロオベルとモウバツサン(六) 主觀の色彩(六) イブセン
- 西鶴について(六) 『耽溺』と『一夜』と『強者』(七) フランスとロシア

(六二)——實行と藝術(六三)——メツキ(六四)——個性と類性(六七)——現代作家の苦悶(六九)
——ブルジェエの『弟子』(九〇)——事件の筋(九二)——素材(九三)——字義の解釋(九三)——
分析(九三)——バザンの小説(九四)——國木田獨歩(九五)——梅雨日記(一〇四)

描 寫 論……………二二七

文 章 新 語……………二四五

説明の文章(四四)——状態描寫(四四)——印象的描寫(四七)——離れた氣分と情調(四九)

——ノートと寫生(五〇)——「筋」(五二)——文章と對話(五三)——新しき紀行文(五四)——

——文章の調子(五七)——自然の描寫(六二)——手紙の景圍氣(六二)——日記の種類(六四)

——新しき情緒(六六)——新傾向の俳句(六六)——模倣と創意(七三)——文字の選擇と

辭句の排列(七五)——觸れるといふ事(七六)——自然と不自然(八〇)——再現といふこ

と(八二)——文章と型(八五)

小 説 新 論……………二八八

尾崎紅葉とその作品……………二四三

西 鶴 小 論……………二五七

フロオベルとゴンクール……………二七七

アルフォンス・ドオデエ……………二九〇

『方丈記』に現れたる源平の盛衰……………二九七

『浦のしほ貝』に見出したる『自然』……………三〇四

卓 上 語……………三二五

剪裁(三五)——剪裁と度数(三六)——雑多紛々(三六)——新しき理解(三七)——タイプと

バアソナリチイ(三七)——新傾向の俳句(三〇)——説明と描寫(三〇)——自然に似た主

観(三〇)——逸し易き印象(三三)——人生批判(三三)——筋書評(三三)——新聞記事と藝

術(三三)——フロオベル(三五)——「ホルラ」(三六)——皮剥の苦痛(三七)——残酷(三八)——

——トルストイ(三六)——トルストイとモウパッサン(三三)——「夜の宿」(三三)——爾人

間よ(三三)——子供と旅(三三)——想像と作品(三五)——眼の藝術(三六)——洪水(三七)——

——平凡の痛苦(三八)——「をんな」(三九)——全責任(四〇)——俳人一茶(四〇)——田園の

子弟(四二)——強弱(四二)——田舎の人への手紙(四三)——横と縦(四四)——心理描寫

(四五)——チェホフの『決闘』(四五)——理解(四七)——選擇(四七)——再び作者の批判

(四八)——事件(四九)——印象主義(四九)——印象に惹んだ書(四九)——微かなる句ひ

(五〇)——人情(五二)——人情の撲滅(五二)——支離(五三)——涙(五三)——「出發前半時

間(三五) 『生田川』(三五) 細かい心理(三五) 平行線(五六) 覺醒(五七) 肯定
 『寄生木』を書いた理由(五七) 夢の道(五八) 寂々(六〇) 肯定
 ? 否定?(六一) 作品の價值(六二) 逼真(六三) 背面(六四) 雨(六四) 友
 (六五) 感激のライフ(六六) 南の窓(六六) 自然物(六七) 眞劍(六八) 此頃
 の脚本(六八) 新しき刺戟(六九) 生效(七〇) 現實(七〇) 誤解(七一) 弱者
 の文藝(七二) 上と下と(七三) イブセン(七四) 背面の主觀(七四) アルツエ
 バアセフの『妻』(七五) 享樂(七六) ある對話(七七) ライフ(七八) 一葉(七九)
 獨歩(八〇) 西鶴の『置土産』(八一) アンドレーエフ(八二) 客觀といふ
 こと(八三) 完全と矛盾(八三) 現今の文壇(八三) デカダンの群(八四)

泉

扉に向つた心……………三八九
 ある友に寄する手紙……………三九六
 痕 跡……………四〇四
 廣い 空間……………四二二
 人生の一宿驛……………四三〇
 ある小説の中から……………四三五

僧房にわかるゝとて……………四三三

東京の三十年

その時分……………四四五
 川ぞひの家……………四五五
 讀書の聲……………四五八
 再び東京へ……………四六〇
 憲法發布の日の雪……………四六六
 明治二十年頃……………四六八
 新しい文學の急先鋒……………四七二
 ゴラの小説……………四七六
 紅葉と露伴……………四七八
 紅葉山人を訪ふ……………四八三
 上野の圖書館……………四八八
 川ぞひの路……………四九二
 私の最初の翻譯……………四九四
 出發の軍隊(日清戰爭)……………四九七

『かくれんぼ』の作者……………五〇〇
 最初の原稿料……………五〇三
 神田の大火事……………五〇六
 九段の公園……………五〇九
 山の手の空気が……………五一三
 卯の花の垣……………五二三
 その時分の文壇……………五二六
 當時の大家連……………五三二
 日書店の應接間……………五三四
 市區改正……………五三八
 私達のグループ……………五四一
 丘の上の家……………五四四
 新しい思想の芽……………五五五
 紅葉の病死……………五五八
 丸善の二階……………五六一
 郊外の一小屋……………五六七
 陣中の鷗外漁史……………五七〇

小諸の古城址……………五七六
 作家短評……………五八一
 電車以前の東京……………五八七
 若い人達の群……………五八九
 上田敏氏……………五九三
 二階の間……………五九六
 私のアンナ・マアル……………五九九
 龍土會……………六〇五
 獨歩の死……………六〇八
 眉山の死……………六一八
 『生』を書いた時分……………六二五
 私と旅……………六二九
 地理の編纂……………六三四
 机……………六三九
 プログラム……………六四二
 『田舎教師』……………六四七
 イブセン・ソサイチイ……………六五五

東京の發展……………六五七

昔の 人……………六六一

二葉亭の死……………六六二

文學者の交遊……………六六六

ある 寫 眞……………六七二

白鳥氏と秋江氏……………六七五

アスハルトの路……………六八〇

明治天皇の崩御……………六八四

四十の 峠……………六八八

廢寺の半年……………六九三

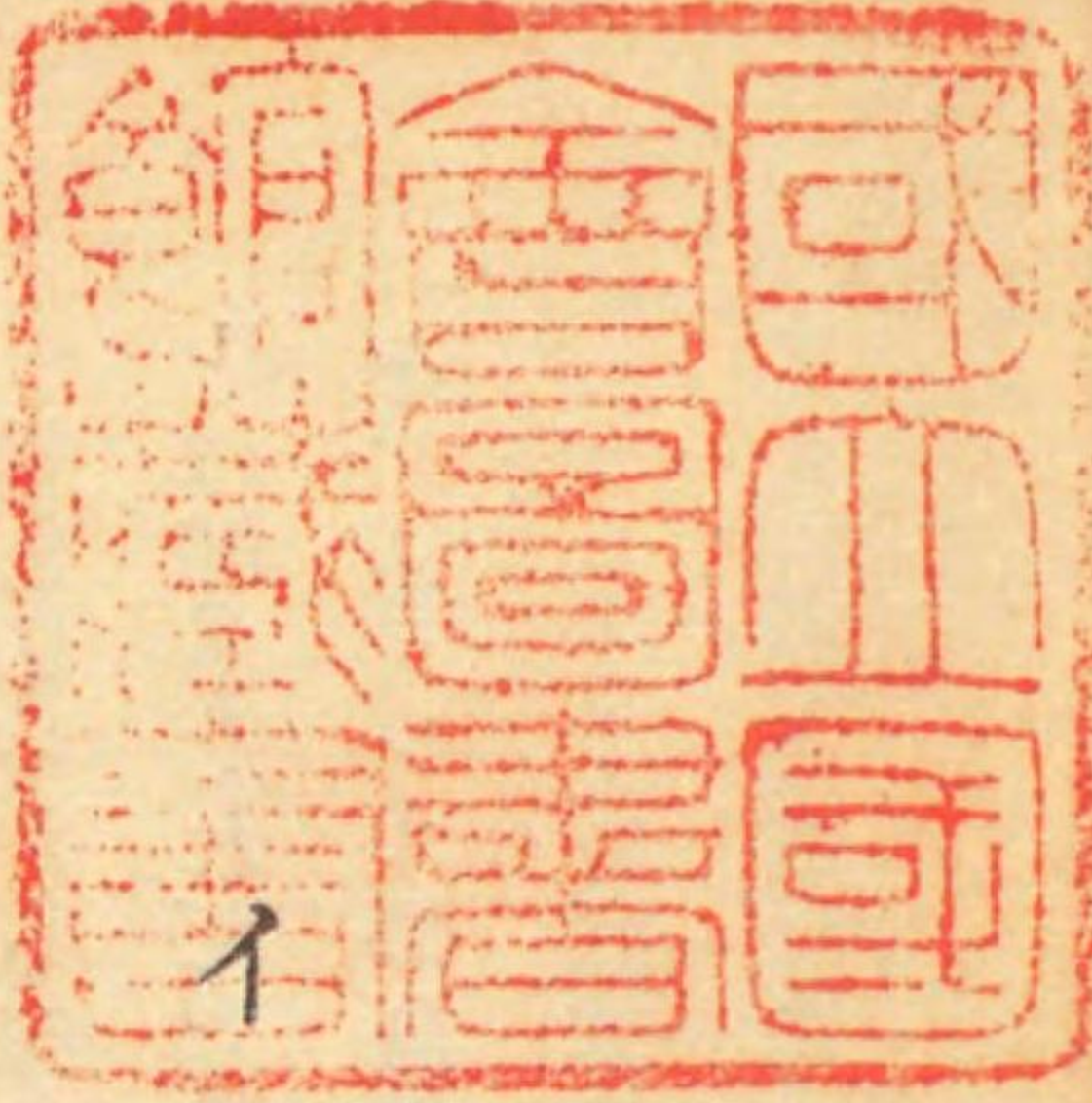
ゴンクウルの『陷穽』……………六九五

あ る 墓……………七〇一

飛行 機……………七〇五

解 說 (中村武羅夫)

イ
ン
キ
壺



印象派

印象派のことを言ふに當つて、私は單に印象的だとか、印象風の味がするとかいふ風に話したくない。印象派の文藝は起るべき理由があつて起り、發展すべき理由があつて發展したのだ。唯、處々書き方に印象風の處が出て居たからとてそれを印象派の作品だとは言はれない。

印象主義は客觀の文藝である。主觀を要することが客觀を要するやうに重要であるにも拘らず、猶且つ客觀の文藝であると私は言ひ度い。印象主義に於ては、主觀は裏面であり、背景であり、透明なるレズでなければならぬ。主觀の露はに表面に出た印象派の作品は、作品としてすぐれたものではないと私は思ふ。

物を現象的に見るといふ態度、人間をも自然の一部分として見るといふ態度——かうした態度が新しい文藝を産んだ重要な心持である。「マダム、ボワリー」の作者は實にその祖であつた。人間の空虚と

自己の寂寞とに堪へて、飽まで人間の心理を見やうとした努力は今猶ほ人をして感嘆の聲を放たしめる。かれの虚無思想と厭世思想、穢土を脱離して藝術三昧に入つたと稱せられるかれの性質、それ等の種の心持は、數多からぬかれの作品の背景となつて明かに窺はれる。

けれどもかれの作には、まだ自己ならぬ他人の心理の解剖が或る處まで空想を使役して書かれてある。ドストイフスキーの『罪と罰』のやうにあゝ極端に使役しては居ないが、それでもまだ餘程構へた處がある。嚴密に謂ふ『現象視』からは目的に伴つて居ないところがある。

眼に見えるものは、行爲である。行爲だけである。心理は行爲を歸納して得來つた結果である。心理は眼を経て互に相通するが、眼に映つたものゝ如くしかく明確ではない。人間は立體ではあるが、平面だけで相觸れて居て、立體の内部には容易に觸れしめない。寧ろ觸れ得ないやうに出來て居ると言つた方が好い位だ。

複雑の中から來た單純といふ言葉で、藤村君は印象派の特色を説明した。私の言ふ立體を備へた平面とは即ちそれだ。眼に領略したものだけを描いて、そして心理に觸れしめやうとする努力——この努力を、フランスの自然主義の作家の中では、ゴンクール兄弟が一番多く遣つた。

ゴンクールは其日記の中に、暗に自己の藝術が一番純の純なるものなることを誇つて居る。實際誇つても好いと私は思つた。單純なる事件、單純なる筋、單純なる描寫、單純なる筆致の中に複雑な人間の心理を見せやうとしたのは豪い。

かれは最も純なる印象派だ。單に印象的な匂ひとか書き方とか謂ふやうなものではなく、事象を見る眼からして既に印象派の見方をして居る。事件の連絡とか結構とか言ふものは、かれに取つて何の意味もない。又事件の大小とか、思想の深淺とか、さうしたことに區別を置かない。

繪畫の方では、印象派はよく省略するさうだが、ゴンクールの小説の省略に富んで居るのは有名である。眼に領略した處だけを、點でも打つやうに、ボツボツ書いてある。主人公のボンヤリ歩いて居る所などを十行ばかり書いて、それで一章になつて居るところなどもある。かと思ふと、ある行爲を一寸刷毛で塗つたやうに粗く書いて濟まして置くこともある。

自然派の作者の中で、かれが一番評判がわるかつた。零細、偏僻、無意味などとの批評を多く受けた。『ゼルミニー・ラセルトゥ』はかれの一代の傑作である。『マダム・ボワリー』と共に自然派の代表作である。けれどその出た時は、餘り評判にならなかつた。かれの名聲はフローベルのやうに一躍して大家になつたのとは甚だ趣を異にして居た。ゾラが大名を成すころに至つても、一般讀者にはさう大きく見えなかつた。

ゾラは自作の序文に、『自分はキャラクターを描かない、テンペラメントを描く』といふ意味を書いて居る。流石は不遇文人會の影響を受けて居ると思ふ。ゾラのやうな現實的な、執着的な、半ロマンチック

な頭腦にも、其友人の印象的の感化はあつた。

獨逸の徹底自然主義の群が、矢張この印象主義を發足點にしてゐるのは、面白いことだと思ふ。この徹底自然派のまだ世に現はれない以前、ドイツの文壇に外國人の作物が多く歓迎せられた。中でもイブセンとゴンクールが最も迎へられたといふことである。ハウプトマンの『織匠』は小説と戯曲との別はあるが、ゴンクールのゆき方に甚だ似てゐるところがある。

さて、この印象派の作品に就いて考へて見るに、其主義から起つた色々の特色がある。其作に大きな作がなくて短幅が多いといふことが一つ。所謂戯曲的葛藤がなく飽まで平氣で現象的に描いて行くといふのが一つ。露西亞などでいふ心理小説と正反對な行き方をしてゐることが一つ。省略の多いことが一つ。其傾向が段々藝術と言つたやうな形になつて行くことが一つ。先づ鳥渡擧げて見ても此位はある。現象的に見るから自然に連絡がない。従つて長い作でも短篇に短篇を重ねると言つたやうな形になる。すべて無解決で、始めも終もないといふ行方になる。

『春』はすべてさうした書方で行つて居る。『心理的券證が無いから物足らぬ』と徳田秋江君が評したがかうした印象的作品に、さういふ批評をするのは餘り當を得たとは言へない。現象だけ書いて心理を示さうとして居る作に、露西亞の作家の群——ゴンチャロフとかトルストイとかドストイフスキーとか——

の遣つたやうな心理的描寫の缺乏を言つて見た處で、それは射やうとする的が外れて居るといふものである。

インプレッショニズムといふことは、露西亞には餘り發達して居ないと私はいつも思ふ。トルストイの作に印象的な處はある。けれどもそれは自覺した印象主義から來たものでは決してない。作全般の上でさうした感は何處にも見出すことは出来ない。ゴルキーなども印象的の筆致はあるが、矢張さうだ。一體露西亞といふ國はフランスなどと違つて、根本が藝術からでなく實際から來て居る。だから新しい傾向も主義から來たのでなくて實際を本にしてゐる。従つて作品に實際的臭氣がいつも附いて廻つてゐる。人を動かす力は、大抵實感から來るやうである。ツルゲネーフがフランス風の筆致を抱いて、冷かに、落附いて描寫したのが、祖國に容れられなかつたのは面白いことだ。ドストイフスキーなどと氷炭相容れなかつたのも意味がある。

蒲原君の言つたやうに、印象主義は主義としては餘り發達しなかつた。ドイツの徹底自然主義も其聲の大きかつたに似ず、處々に個人を獨立せしむるに終つて了つた。これは何故であるか。此處に至ると餘程むづかしい。文藝の理想としては、當然其處に行かなければならないのであるけれど、其處まで行くといふと、いろいろな不便や不自由が出て來て、作者を束縛するやうな意味がある。藝術の爲めの藝術に後戻りするやうな處が何だか嫌らない。理想ではあるが、何うも其處まで行き度くない。

詩の方でも近頃殊にこの印象といふ事が口にするやうだ。詩としては當然踏むべき経路であるに相違ない。けれどこの傾向を主観的傾向、内容的傾向とはしたくない。漸く情緒から出て来て、また情緒に入るのは少しく物足らない。矢張小説で行つたやうに、主観を背景にした行方で遣つて見た方が好いではないかと思ふ。其場所の空氣、色、調子、それは作者の眼を通して出て來るのであるから、其作者の見方に價値を附けて、個人の特色と言ふことに重きを置くのもよい。けれどそれでは折角出て來た以前の畏に再び陥る恐れがあるから、作者の眼は裏にして置いて、それよりも暫し現象に價値を重くして見るといふ方が効果が多くないかと思ふ。

永井荷風君などは、確にかういふ場合に引出されて批評されて好い作家である『アメリカ物語』の印象的筆致に富んで居ることは、曩に蒲原君も言つた。私も至極同感である。けれど其態度は主観詩人の態度である。主観が——小さい主観がドシドシ出て居る。現象を立場にした印象主義を遠く離れて、そして唯印象的手法を用ひて居る。同じインプレッシブな書き方でも、正宗君の『新藥師寺』などは大變に違つて居る。此間の差別を考へて見る必要がある。唯個性の相違ばかりではない。

チエホフはゴルキーに比べると餘程フランス風の印象的な感化を受けて居るやうに見える。重苦しい中にも何處か明快な調子があつて、藝術的な好い匂ひがする。『キス』などといふ短篇は殊にさうした感が深かつた。

短 篇

短篇にはコツと謂つたやうなものがある。感じを短幅の中に集中する力——或はこれをコンポジションと言ふ。

つまり散漫な人生から作者が捉へて來た一角、それが散漫でありながら散漫でないやうに見えるやうな處に、短篇の面白味があり、力がある。

實生活から捉へ來つた一角、それが如何に作者に取扱はれて居るか、いかに作者に見られて居るか、趣味を以つて見られてあるか、本能の底深く入つて見られてあるか、其處に作者の人格、修養、技倆、傾向の總てを見る。

本 能

本能は人間の如何ともすべからざるものである。人は本能の衝動に逢へば、必ずする／＼と引摺られて行つて了ふ。本能と戦ふは痛快な事業ではあるが、しかも愚かなる行爲たるを免れない。本能に同化した處に平和があり、樂天生活がある。本能に反抗した處に、皮肉があり、悲壯がある。

自然力の去來

自然力の來るさまは、容易に端倪すべからざるものがある。今、其處にあつたかと思ふと、いつかもう何處かに行つてゐる。これで事件が終結になつて、跳踉を極め、自然力も落附いたと思ふと、また思ひも懸けぬ處から凄じい波を擧げて來る。最も多く自然力の發展を見るのは戀である。戀のなやみにある人は、其力の一步は一步より強く、一步は一步より高く驚くべき發展を爲して來るのを感じるであらう、心臓の破裂するやうな烈しい高い鼓動を感じるであらう。しかも戀は忽ちにして消え去る……自然力もまた忽ち水平に歸し去る……。

傑作を讀んで居ると、此自然力の消長を明かに感ずる。結構ならざる結構に、轉變極りなき發展を見る。エンマのさびしき心に萌した自然力が、戀を得戀を失つて、遂に最後の悲劇に至る間の心臓の鼓動は、實に微を極め細を極めた描寫である。また、最後の悲劇の後、自然力の水平に歸し去る淋しさ、——その淋しさは『世界の淋しみ』と言つたやうな深さがある。

自然力は淋しい處から來て、淋しい處に消えて行く。
自然力は常にさびしき胸にその巢をつくり始める。

モウパッサンの憂愁

モウパッサンの憂愁は *Welt schmerz* であると思ふ。其の神経の擺動せるところ、其の感覺の鋭敏なる處、其の本能の衝動に悩まざるゝところ。

腹の蟲といふ言葉が日本にもある。満足して居て好いことを満足が出来ぬ。不満が満たされれば、又其上に不満が出て來る。常に暗い心を抱いて、頭腦が動搖して居る。モウパッサンの眼には、常に空虚な淋しい單調な空が映つて居た。

藝術家の心

藝術家の心は普通の人には『理解されざる心』であると思ふ。『冷かなる心』『残忍なる心』『眞心なき心』普通の人には屹度さう見えるに違ひない。

藝術家の心は少くとも戀の出來ぬ心である。

『冷酷なる天才』といふ言葉がある。けれど藝術家の心ならざる心が、この『冷酷』の皮を冠つて、實際の人間生活に對するほど、罪惡なことはあるまい。藝術家にして、始めてこの『冷酷』が默認せられる。

藝術家は自由を欲する。そしてその自由は絶対の自由である。絶対の自由を欲して、絶対の自由を行ひ、猶且つ他の人間の爲めに撲滅せられざるもの普通の人間の中にありや。唯、藝術家なるが故に許さる。唯心理に通じ、本能に通ぜざる藝術家なるが故に、この自由を得ることを許さる。

藝術家と家庭の問題は常に難かしい。何故かと言ふに、其場合多くは妻が普通の人間であるからである。一家の妻として、其夫の『理解せられざる心』『冷たき心』『残酷なる心』『眞心なき心』に耐へることが出来やう筈がない。又其夫の絶対なる自由に服従して居られやう筈がない。

いかなる場合に於ても、實際生活の上に於ては、藝術家は劣敗者である。妻に對し、子に對し、忠實なる夫、慈愛なる親となることが出来ぬ。出来ぬだけそれだけ、妻子から受くる愛情は薄く乏しい。絶対の自由を欲するものは、其自由を許されたゞけでも既に大なる讓歩である。其上に普通の實生活から束縛から生ずる愛を求めるとは、矛盾の上に矛盾を重ねるやうなものである。

物質上に於いて劣敗者たるは、今更言ふに及ばぬことである。肉をそぎ骨を削つて生活のたつきにするといふ職業が藝術家を除いて何處にある。職業としては、藝術家は最も劣等なる職業である。それなら名譽？ 眞の藝術家が名譽を悦ばぬことは誰れも知つて居る。幸に世に認められて、月の桂を冠にすることがあつたとしても、こは『理解せられざる心』に酬いられたあはれむべき無意味の報酬である。

メレジコウスキーは『トルストイの研究』の中に、人間としてのトルストイと、藝術家としてのトル

ストイとを併せ論じた。人間としての藝術家、藝術家としての人間、此處に矛盾した深い煩悶がある。

名妓にして猶且つ人の妻たるを望み、名僧にして猶且つ家庭の人たらんことを思ふ。一にして二たる、眞に難し。

歌集 一卷

師松浦辰男先生から、其門下の歌を集めたる松楓集一卷を贈られた。

歌の數三百二十五。其中から心に留つたものを抜いて見る。

いつとなくもとの田舎になりけり花ちり果てし小金井の里

冬枯の頃にはそれと知らざりし松の木の花ぞ咲きたる

花もなき松の林の中までも來てなく春のもゝ千鳥かな

山川の底にうもれし埋れ木も世にながれゆく五月雨のころ

すゞみ舟いつしかたえてはざくらのこほるるきしに秋風ぞふく

夜をふかみつひにまくらは取りたれど月ゆゑまどはさゝれざりけり

ゆめの如すぎしむかしをさやかに思ひ出でよと月のてるらん

ねさめても猶ねさめても長月の有明の月ぞまどにさしたる

なつかしきわがふるさとの奈良晒おりてさらして今か打つらん
秋ふけて昔の花ちる沼川の人なき舟にゆふ風ぞふく

住みなれてあればこそあれわたつ海のはなれ小島の秋の夕暮

くれなるにほふ火桶のさくら炭こぼる霜夜をはるになしたり

利根川の夜舟の中にあひ見つるかとりをとめはいかにしつらん

乗艦のくだけんばかりゆすれてもかへる波路はうれしかりけり

今の新しい歌から見れば、境も心も感興も全く異つて居て、甚だ陳腐のやうに見えるかも知れぬが、しかし私は此等の歌に深い思を寄せることが出来た。かうした短い詩形にも理窟や説明や技巧よりも、描寫の貴いといふことをつくづく感じた。描いたものは永久に新しい。幾年経つても、其境、其季節に逢ふと、新しく其心を味ふことが出来る。いかに巧に言ひ廻したもので、いかに面白く詠んだもので、真でなければ駄目であると言はれた師の言葉が今更の如く繰返された。

住みなれてあればこそあれ云々の歌の作者は、私の若い頃、神田の下宿屋の二階でよく一緒に歌を詠んだ友人である。今は鹿児島縣の大島群島の中の、一小島の村長をして居る。絶海の孤島、さらぬだに堪へ難き秋の夕暮に、渺々たる波を見て、かうした歌を詠まれたかと思ふと、其眞情に心を動かされずには居られなかつた。都に居ては、功名心、虚榮心、競争心、心も體も塵にまみれて、電車の響、汽車の

音、工場の笛の音、退屈な、勞れた、しかしイライラした思を起さぬ日は一日とてもない。それを遠く絶海に離れて、自然に近い民を相手に日を送るのは眞に羨むべきかなである。この友人は名を土持綱安君と呼ばれた。背は低かつたが、眉の濃い、髪黒い、眼のやさしい人であつた。明日歸るといふ日、神田の下宿を訪ねて行くと、君はさくら餅を買つて御馳走をして呉れて、『來年は屹度出て來るから』と微笑を含んで言つた。明日新橋まで送つて行かうと言つたら、時間が夜だからそんな心配は要らない、『それに來年は又すぐ逢ふんだから』と言つた。その來年が今年で十八年になる。今更ながら人間遭逢の測るべからざるを私は感ぜずには居られない。柳田國男君は矢張其時分一緒に歌をよんだ仲間の一人である。昨年氏が九州に遊んだ時、何うかして逢ひたいと思つて、電報を打つたさうだが、舟の都合やら用事やらで遂に逢はれなかつたさうである。其時、柳田君は、『山川の五百枝八十隈こえくれど猶遙かなり君がすむ島』とよんで、遙かに絶海の孤島に思を寄せたといふことである。

ねざめても云々の歌を詠んだ人は、宮崎湖處子の細君で既に故人になつたむつ子の君である。いかにも女などの感じにありさうな歌で、秋の夜長の月の光が眼の前に見えるやうな氣がする。『歸省』の中にモデルになつた人で、従順な、心の正しい、端麗な姿をした細君であつた。湖處子君が市ヶ谷の監獄署の裏に住んで居られる頃、よく行つては莢豌豆を混ぜた飯を御馳走になつたものだ。亡くなつたのは確か明治三十五年頃、湖處子君が赤坂靈南坂に居たところと記憶してゐる。其葬式は午後の日影を受けて、

麻布の暗い場末の町を通つて、青山に行つた。青山の墓前では、西洋人が基督教式の祭文を讀んだ。追憶の多い歌集であつた。

『徒勞』の作者

こゝまで書いて來ると、刺を通じた人がある。見ると、小さな字で、『服部てい』と書いてある。服部てい、聞いたやうな名だと思つたが、思ひ出せない。用事は何だ？ と聞かせた。別に用事と言ふこともないが、唯お目にかゝり度いといふことである。不圖思ひ附いた。さうだ、水野仙子である。『暗い家』や『徒勞』を書いた作者である。

筆を擱いて逢つた。

かうした娘があつたやうな作を書いたのかと思ふ程年が若かつた。田舎言葉もまだ除れて居なかつた。作家となるのは辛い辛いことだ。辛い辛いことを忍んで私達は遣つて來た。男性ですらさうである。まして女性の身——生理上作者たるに不適當である女性の身で、果してさうした忍耐が續け得られやうか。私は水野仙子のごとき才を見たことはない。『暗い家』や『徒勞』などは容易に出来る作ではない。が其一生の上の幸福から考へて見たなら、作者などにはならぬ方が好いかも知れない。けれどまた翻つて考へた。いかにしても其才が惜しい。私はこのことを隠さず話した。

『暗い家』や『徒勞』を書き得たのは、其心が眞率であるからである。虚榮虚飾の念が其心を曇らすやうな女には、『徒勞』に書いたやうなあのやうな大膽な描寫が出来るものではない。『そんなことを書いては餘りはしたくない』とか、『そんな思切つたことを言つては品格が下る』とか言ふやうな氣がするに相違ない。けれど眞率な心には、さうしたことも、暗い影を帯びずに明かに映ることが出来るに相違ない。私は其の眞率な、まことな心を永久に失はざらんことを勧めた。

泡鳴氏の『耽溺』

いかなる事象をも——口に言ふに忍びざるほどの悲惨、残忍、冷酷のことをも、明かに其心に映し得るやうに、作者は常に眞率な無邪氣な心を持つて居なければならぬ。『耽溺』の事象を、泡鳴君があつたやうに明かに自己の心に映し得たのは、まことに敬服に値ひする。又泡鳴君は、讀賣の日曜附録で『耽溺』の主人公は古來の英雄豪傑と同じである。それが解らぬやうでは新文藝を談ずる資格がないといふやうな意味を言はれたが、これも面白い言葉であると思ふ。道德に支配されず、習俗に動かされず、人間としての本性を縦横に發揮することの出来る態度——其處に英雄豪傑の眞面目がある。

フレツシといふこと

永井荷風君の『監獄署の裏』、そのセンチメントの新しいのに私は感服した。六七年を外國に過し、歸つて來て眼に映つた日本のさまがよく出て居る。

フレツシに感ずるといふこと、これが作者の頭腦の第一の修養である。眼に映るものがフレツシに感じられさへすれば、其作者は常に新しい作を出すことが出来る。日常の平凡なる生活の中にも新しい意味を発見することが出来る。國木田獨歩は常に宇宙の事象に驚嘆するやうな頭腦で居たいと言つて居た。即ちこの意味である。

作者の頭腦は常に古くなり勝である。汚れ易い、型に入り易い。それを洗濯して常に新しく綺麗にして置くのが作者の努力であると思ふ。これは容易なことでは出來ぬ努力ではあるが、しかしこの努力は必ずしなければならぬ。

汚れたら、初めから始める、下等八級から出直すといふ心を常に持つて居たいと私は思ふ。

神經家の言

新世紀に出た正宗白鳥君の『古手帳』の中に、『蟲歯が痛んで苦んだ。琺瑯質が壊れて神經が現はれるのださうだ。心の琺瑯質が壊れて、露出した外界の熱さ寒さに觸れたら、どんなに痛いだらう。』といふ句があつた。新人の言、神經家の言。

ブルジエエの短篇

ブルジエエの短篇には、何うも感情——長たらしい感情が多い。それに叙述が何だかだくしい。文章も餘り飾り過ぎて居るやうなところがある。さうした作風で止むを得ないかも知れぬが、本能とか自然とか言つたものにテキバキ觸れたやうなところが無い。『Antigone』でも『La Pia』でも『Odie』でも何うも形がくだ／＼しくつて厭だ。説明を長く遣つてるのも餘りぞつとしない。かれは旅行家だから、天然の風景や土地の風俗は中々よく書いてあるが、モウバツサンなら一二行で書いて了ふ處を、二頁も三頁も書いてゐる。人間を書く筆も餘り複雑してない。『La Pia』などは冒險談好きな英國の讀者には受けるかも知れぬが、私などは讀み了つて、狐につまゝれたやうな氣がした。

『Neptuneyale』はそれでも一番面白かつた。モウバツサンの『Happiness』を逆に行つたやうなもので、アイルランドの西海岸に世を離れて戀の生活を送つた人々のことを書いたものである。エドモンド・ゴツスは、佛蘭西人の作者が一寸來て見たゞけでアイルランドの邊僻な特色をよくもかう分明と書いたものだと感心して居るほどであつて、其叙景の筆は中々好い。作者は戀の生活に世を棄てたといふ女より

も、馬車に乗つて見に行く新時代の女を書いたかと思はれるが、その對照の上に甚だ面白い深い意味がある。

ルウドウイツヒ、ガンクホーヘル、

ドイツの『郷土藝術』の群の中に、ルウドウイツヒ・ガンクホーヘルと言ふ人がある。"Das Schweigen im walde"、といふ作がある。アルプの森林生活を書いたもので、描寫は甚だ詳しい。生れは貴族で、中賢澤な生活をしてゐる。アルプの山中にはかれの立派な別墅があつて、夏は屹度此處に來て筆を執る。秋から冬にかけては、自から銃を携へて獵に出かける。中々理想的の生活を遣つてゐるといふことである。此間わが國に來遊した地理學の泰斗ベンク博士は、此人の妹婿で、この妹も文學の嗜好が中々深いと聞いた。山崎直方君が獨逸に留學してゐた時分、夏休暇にベンク博士が、その妹婿の別墅に居るのを訪ねて行くと、丁度其の詩人も其處に居ていろく、款待を受けた相だが、立派な人で、談話も趣味に富んで居て、忘れられない一夕を其處に過したといふことだ。其處には金蘭簿といふやうなものがあつて、其別墅を訪問した客は皆な其名を署したり、詩を書いたりしてゐる。詩人は山崎君にも書けといふ。獨逸語で名を署さうとすると、君は東洋の珍客だから日本字でなければいけぬと言ふ。山崎君は只名を書くのも風情がないと思つて、七五調の今様風の短かい句を考へてそれに書いた。すると、ベンク博士は傍からそれをドイツ語に翻譯して、上に並べて書いて呉れたといふ。

"Schweigen im walde" を半分程讀んで見たが、アルプ山と中のことは流石によく書いてあつた。

オツシフ・シユビン

オツシフ・シユビンの名を文壇の人は大抵は知つて居る。鷗外先生の譯した埋木的一篇、薄倖なるゲザの生涯は、當時人々の頭にどれほど深い印象を與へたか知れなかつた。此女作者は本名をロラ・キルシネルと言つて、若い時から外國地方を旅行して、世界的の知識に富んで居た。最初書いたものに、殊にすぐれた作品が多く、將來有望な作家として文壇から認められて居た。年若く、素養は充分でなかつたが、天性の才能は甚だ卓れて、殊に觀察の凡ならざるのを以て聞えた。貴族社會と農民社會と、双方によく、通じて居たので、材料も中々すぐれたのが多く、將來いかに發展すべきかと、人々から驚嘆の目を以て見られたことも一度や二度ではない。十六歳で既に名を文壇に馳せてゐたと聞いただけでもいふ位である。處が段々年が経つに従つて、其の有望な名聲は次第に衰へ、其の才に富んだ筆は次第に光彩を失ひ、今では二流三流の下に落ちて了つた。其原因は主として藝術的修養をおろそかにした爲めだと傳へられてある。けれど女流作者の中では、まだ多少は望をかけられて居るので、これから好い作

を出さぬとは限らない。傾向はリアリスチックであるが、どうも全體に於て自然主義とは離れて居る。ゲザが稚い時、ステルニーに『シメール』とは何ぞと聞くに、そんなことはお前には解るものか、字書を引いたってありやしないとステルニーは言つた。ボウドレールの散文小詩に『シメール』といふ字がある。蒲原君がそれを今日讀賣新聞の文學百方面に譯したので、ゲザのことを思出し、續いてオシツプ・シユビンのことを思ひ出した。

人生の爲めの藝術

人生の爲めの藝術を後藤宙外君は本誌の前號で説いて居る。そして文學の爲めの文學を排して居るけれど、私等のいふ人生に觸れるといふことと、宙外君の人生に觸れるといふこととは甚だ意味が違ふやうに思ふ。宙外君はダルキンの研究を學問の爲めの學問と言つて排し去るだらうか。學問の爲めの學問を遣つたので、ダルキンは却つて應用學者の觸れ得ざる、解し得ざる、人間の根本に入ることが出來たのではなからうか。

イギリスの短篇

イギリスの短篇の振はないのは甚だしい。殆ど短篇の體裁を備へたものは無いと言つても好い位である。比較的モダンであるといふジョージ・ムーアの短篇集を讀んで見たが、ねつから面白くなかつた。ヨセフ・コンラットの『Tales of Unrest』といふのがある。例の熱帯地方のことを書いたものが多く、天然は中々よく描いてあるが、人間の行爲の描寫は甚だ乏しい。心理などは全く閑却されてあると言つて宜しい。『Idiot』といふ短篇などフランスの作者が書いたなら、さぞ面白い心理的のものが出來やうと思はるゝ材料であるが、それが極めて拙い。それから『Return』といふのがあるが、これも鏡に影の映るところなど、何だか場當のやうな氣がして面白くない。昨年のフォートナイト・井イウに出た論文の中に、『短篇小説の發達』とかいふ題があつたが、其中にもイギリス文壇に於ける短篇の不振といふことが書いてあつたのを見ると、イギリス人もそれを認めて居るらしい。其中に、短篇の祖は何うしてもフランスで、其源はバルザックから出て居ると言つて居る。バルザック、コッペ、ドオデエ、モウバッサンといふ順序で、モウバッサンは古今獨歩の短篇作家だと言つて居たと思ふ。

バルザックの短篇はさう澤山は知らぬが、概してシヨッキンゲ、ストライキングのものが多かつたやうだ。罪惡を犯した子を海の唯中に沈めるといふ話、姦夫を戸の中に押込めて干乾にするといふ話などを今も覚えて居る。巴里風と言つたやうな氣の利いた、文章のスッキリした、コンボジシヨンのよく整つた短篇はコッペ、ドオデエなどから始まつて居るやうである。コッペのでは織子が花の中で死ぬ話、役者の話、詩人の自殺の話、不慮の出來事といつたやうな話、皆な意氣な氣の利いた筆でサツと達者に

書いてある。ドオデエのは“Monday tales” “Letter from my mill” “Artist wives”などに立派な短篇が

澤山ある。“Robert Hermon”といふのも面白い短篇だ。諾威のアレキサンデル・キーランドはなんでも此時分のフランスの短篇の影響を受けたやうなところがある。けれど概して此頃の短篇はまだ外部の事件とか、色彩とか、コントラストとか、さういふものを捉へてそこに興味を以て書いて居るやうなものが多い。深い心理に入つて、思ふさま判つて見たと言つた風の短篇は餘り多くは見當らない。戀などの取扱方もまださう大して大膽でなかつた。ゾラの短篇には突込んだものがあるが、概して描寫が冗漫で、長編作者の短篇と言つたやうな處がある。其處に行くと、モウバッサンは、スタイルの上に、文章の上に新味を與へたばかりでなく、外面から深く内面に入つて居る。

獨逸ではケルレルといふ人がある。瑞西の詩人である。時代が早いだけに、ユーモアでなければセンチメンタルに落ちて居るが、其文章がいかにも明快で讀んで心地が好いので、ドイツ人は好んで讀む。次に、バウル・ハイゼ。この人は非常に澤山な短篇を書いた。しかし短篇としては比較的長いものが多かつた。何でも数が百五六十篇ある。“L'ARRABBIATA”といふのが、かれの出世作として殊に名高い。此の人は婦人に崇拜者が多かつた。と言ふのは、婦人に於ける不倫の戀といふものに同情して書いた作が多いからである。かれの意見に従ふと、本能は重大なものである。尊崇すべきものである。本能に反くものは必ず亡び、本能に従ふものは必ず榮える。本能は人間の思議すべきものではない。本能の衝動より

起る罪惡はすべて宥恕すべきものであるといふ風に思つて居る。従つて本能の完全といふものの上に、一種理想と言つたやうなものを持つて居る。そしてこれを描くのに、材を多く婦人の戀に求めた。婦人に愛讀者の多いのはこの爲めである。又、新しく起つた自然主義の作者の群から舊いと言はれるのもその爲めである。自然主義の新しい群の中では、ハインツ・トフォオテといふ人がある。非常にモウバッサンの感化を受けた作者で、手法、取材、着眼すべてよく似てゐる。

一國の首都

『一國の主都』と言ふ大きな繪人の書籍を十年前にある處で見たことがある。都府の寫眞が幾つとなぐ入つて居て、立派な帝王の宮室の寫眞もあつた。そして其各國の都府の光景を當時有名なる作者が書いた。巴里をフランソア・コツペが書き、東京をピエル・ロチが書いて居た。横濱東京間の汽車を、かうした國にも汽車がある！と罵倒して居たのを覚えてゐる。コツペが巴里を書いたのも、この巴里風の純粹のフランス文で、美術の都を描いたのが面白いと思つたので覚えてゐる。

充實した文章

私は思ふ、調子の悪い文章は書いても、無駄の多い文章は書き度くない、と。調子といふものを庇ふ

と、兎角無意味な文字を使ひたくなる。無意味の文字を使ふと、何うも感じが空疎になつて困る。ゴックールは勉めて文法を排し、アカデミイ派の文章の整一を蛇蝎のごとく憎んださうだが、私も何うか名文は書きたくない、充實した文章を書きたいと心懸けて居る。それと言ふのも、自分の文章がよく調子に捉へられたり、型にはまつて了つたりするのを豫ねて知つてゐるからであらう。

ボスサン！

獨歩集第二が傍にあつたので、手に取つて展けて見た。『都の友へB生より』の中の一頁がそれとなく明いた。ボスサン！

『ボスサン！』と僕は思はず聲を擧げて呼んだ。』と書いてある。『君、狂氣の眞似をすると云ひ給ふな、僕は實に滿眼の涙の落つるに任せた。』と書いてある。湯ヶ原の奥の谷、降頻る雨の中に思出されたボスサンよりも、ボスサン！』と呼んだ不仕合せな友人が歴然と私の眼の前に浮んで來た。

私は其友の心のさびしさを思ひ遣つた。私がかれを其湯ヶ原の温泉宿に訪れたのは、この短篇を書いた翌日であつた。友人は喜んで私を迎へた。酒も飲んだ。元氣に話も爲た。階下の湯槽につかつて、後腦を其の一端に載せて、一端に爪先をかけて、ふうわりと身を浮べて眼を閉ぢても見た。『かうして居る心地は實に忘れられないねえ』と友は言つた。此言葉は其前にも一度聞いたことがある。それは忘れも

せぬ明治三十年、春の初めに、日光の山奥の温泉場に行つた時であつて、友はかうして温泉に温るのが好きであつた。湯から上つてから、帳場にあるはかりで、體量を計つた。友は九貫七百目、私は十八貫二百目あつた。『君の半分きり無いんだな、僕は。』と云つて、友は笑つた。其時のことが流るるやうに胸に集つて來た。

ボスサン！

と私も洋燈の白い笠に向つて呼んで見た。涙が原稿紙の上にほろ／＼落ちた。

其日は晴れた日であつた。

松を越して波の音が聞えた。松と松との間にはブランコの繩が懸けられてあつた。砂はキラ／＼と日に光つた。

座敷には北枕にしてかれが横へられてあつた。白い手拭で顔が掩つてあつた。私はソツと取つて見た。瘦せこけて冷たくなつたかれの死顔！

北窓から、涼しい午前の風が流るゝやうに入つて來る。麥は既に赤くなつて、蛙の聲も老いた。

前の茅葺屋根の家の中がすつかり見える。娘と母親とは土爐に鍋をかけて、頻りに繭を煮て糸を繰つて居た。

屋の上に白い繭！

『僕は君、今日つくづく死といふことを考へたよ。僕の死ばかりぢやない。君達の死といふことも考へたよ。これから十年二十年、三十年と生きてるものは誰も居ないんだ。其頃には、僕と同じやうに皆な死んで了ふんだね。それを考へると、僕はつくづく人間といふものが悲しくなつた——』

大久保の家でかう言つたことがあつたのを思出した。

私は獨歩集第二を伏せて見えない處に押し遣つた。

西 鶴

西鶴を有するのは日本の誇であると思ふ。かれが明治の世に生れたならば、今少し詳しく其時の状態を描寫したであらうといふ人がある。私はあれで澤山だと思ふ。かれの文章は輪廓ばかりを書いたやうで、實はさうでない。複雑した筆致の中に、非常な細かい心理が顯はれて居る。讀者に由ると、其の無遠慮な筆に度膽を抜かれて、不道德な作者のやうに簡單に言つて了ふが、これは偶々其人が小さい道徳に支配されて居ることを證明するやうなもので西鶴の價値は決して減じない。かれは普通に着目せずして特殊に注意した。特殊を通じた普遍でなければ、事物の真相は現はれないことを知つて居た。かれは自

己の眼に映つたまゝを餘り多くの取捨を加へずして描いた。だからかれの文章は非常に難かしい。元祿の風俗史に通じたものでなければ充分に理解することが出来ないやうな處が往々にしてある。かれの作はゴンクールの所謂『小説は曾て存在せる歴史なり』といふ旨に適つて居る。元祿を研究する歴史家はかれの作を不徳の書として除き去つて了ふことが出来ない。近松の心中物ではまだ知ることの出来ない當時の人心の機微を知り得るのは西鶴の書である。

一代男の中に、地方のことがよく出て来る。敦賀、酒田、室津など、例の鋭い簡潔な筆で塗つたやうに描いてある。私は初めさうも思はなかつたが、段々旅行して實地に當つて見ると、かれの地方の記述は決して空想で書いたものでないといふことが解つた。何うしても其地を踏んだものでなければ書けないやうな記事がある。私は佐々醒雪君に、『何うも西鶴は中々の旅行家のやうに思はれますが、そんな傳記は傳はつて居りませんか？』と訊いたことがある。

西鶴の文章を翻譯するのは難かしいが、せめて其書いた事だけでも翻譯して、西洋人に見せて遣り度いと思ふ。

男 と 女

與謝野晶子女史は藤井環離婚問題を二六新聞紙上に論じて、めづらしい氣焔を吐いて居た。詳しいこ

とは言ふ必要もないが、男と女とは要するに相和合して互に扶け合つて行かなければならないといふことに歸して居たやうだ。今更そんな平凡な理想家がかつた教訓でもあるまいと思ふ。男と女との相和合して扶け合つて行くなぞといふことを、お互に考へたのは、もう餘程以前のことだ。終局は空虚だ、人生は刹那だ、性と性とは互に唾み合つて居るのだ。快樂と争闘とはいつても機能的に附いて廻つて、所謂『共食』を遣つて居るのだ。喧嘩して、倦きて、疲れて、離縁をしたいと思ふ頃には、もう動くことも離れることも出来ないやうに靈肉で縛られて居るのが、所謂『夫婦』なるものの状態だ。自然は大きい、戀人や夫婦がまだ目が覺めない中に、ちやんとさうした良の中に入れて出られないやうにして置いて呉れる。

新聞の批評家

新聞紙上に、其月々の小説の批評が載つて居る。國民の霹靂火、二六の有秋生、時事の安倍村羊氏。それから大阪新報に青山と號する人が居る。毎日新聞でも時々服部嘉香君がやるやうである。忙しい中で讀んだり批評したりするのも随分大變だと思ふ。

霹靂火は時々思ひ切つて好いことを言ふが、何だか徹底しないやうな處がある。何う解釋して好いか鳥渡解らぬやうなことををり／＼言ふ。有秋生のは批評の標準が實感(美しいものを書けば其作の出來

榮の如何に關せず、唯美しいと思ふといふ風)に傾き過ぎて居るやうに思ふ。安倍氏は新文藝といふことに就いてまだ餘り多くの知識がなく、矢張センチメンタルな趣味がお好きのやうに見受けられる。青山といふ人は、鳥渡解つたやうな批評をすることがあるが、悪い癖には、文壇のつまらぬ内幕などに重きを置いて絶えず標準がぐらついて居る。昨年の後半期から今年の始めに出た二六新聞の『雜誌總まくり』の評者は、今の有秋生とは確かに違つて居ると思ふが、此人の批評はテキバキと突込んで行くといふ風で面白かつた。

『マダム・ボワリーの故郷』

マダム・マアテルリンクがこの頃『マダム・ボワリーの故郷』といふ文を書いた。これは、フロオベールが其大作『マダム・ボワリー』の舞臺を訪ねて、其のモデルに使用された實際の人物のことを詳しく探つて書たものだといふ。エムマもボワリーも、レオンも、藥劑師も皆な實在の人間で、誰は何うした、彼は何うした、誰れは死んだ、彼は生きてると言つた風に面白く書いてある。エムマのモデルは數年前に死んで、其墓に行つて見ると、其墓石に、『貞節温良なる細君として、慈愛ある母として、かの女は其一生を送つた。』と書いてあつたさうだ。モデル問題も年月を経た後で見ると、中々趣味があるものだ。

心持と書き方

心持と書き方といふことを考へて見た。同じ自然派の作者でも、いろ／＼異つた心持を抱き、違つた書き方をして居る。例へば自然とか本能とか言ふものに對しても、或者は同化し或者は反抗して居る。同化と反抗では、同じ思想に養はれた作者でも、非常に趣が違つて来る。苟くも小説を讀む人は、さうした作者の心持と書方の傾向を詳しく見る必要がある。

其作品の陰に塗られた色は灰色であるか、綠色であるか。それとも明かな單純な色であるかを觀取しなければならぬ。又、其作者は單に外形の面白い事件に捉はれて筆を動かして居る作者であるか、性格の描寫に全力を傾けて居る作者であるか、更に進んで深い人間の心理に眼を注いで居る作者であるかを見なければならぬ。

本能と謂ふものを、重く見て、本能に達すれば、もう道德問題などでは議せられない。人間は本能を完全に行ひ得た時が一番幸福であり、健全であり、理想的であるといふ考へ（パウル・バイセ）と、本能と謂ふものは人間の自由にならぬものだ、いくらもがいたつて、人間なんて小さなものだ。遁れられない畏に入つて居るやうなものだといふ考（モウバツサン）とでは、本能を重く見て居る點に於ては同じであるが、其考へ方は全て違つて居る。そして其違ひが“Kinder der Welt”と“Bel Ami”との違ひとなつて居る。

つて居る。

そして此考の違ひが千種萬別である爲めに千種萬別の作者と作品とが顯はれて来る。だから作者の心持と謂ふことは批評家の最も綿密に觀察し解剖しなければならぬことである。

實行と藝術とを區別して議論をすると、實行と藝術とは全て關係のないやうに考へて駁撃を加へたり何かする人がある。又、自然主義の運動が從來の没理想論に比べて考へて見て面白いと言ふと、その主義なら賛成だといふ論者が反對側から出たり、今の自然主義と没理想論と同じやうに見るから駄目だといふ論者が賛成側から出たりする。つまり、此議論も一から千まで千から萬まで度數階數のある細かい心理状態だから、議論で決めて了ふ譯には行かず、何うしてもさういふことになつて了ふのであらうが、獨斷的に自分で他人の議論を決めて懸るのは好いことではない。

今の文藝の背景が灰色で塗られてあることは明かなことである。作者の心持から無論今の文藝は出立して居る。没理想論の當時にあつては、其の形式は或は今の客觀描寫に似た處があつたかも知れぬが、この作者の心持と謂ふことは閑却されてあつた。大主觀といふやうな得體の分らぬもので大切に保存されてあつた。其大主觀は完全無缺で所謂神と言つたやうな者であつた。其大主觀に達するには大なる天才でなければならぬやうに思はれて居た。少くとも私は當時さう信じて居た。つまり心持——主觀方面（作品の背景となるべき）が全く耕されずに、寧ろ耕すのを好まぬといふ風があつた。その結果として

天才論が唱へられ、背景のない寫生的作品が多く出た。自然主義は之と全く行き方を異にした文藝である。心持を先づ耕して、そして徐々として出て行つた文藝である。天才に頼らず完全無缺と言ふ様な大主觀を頭に置かず、不完全でも何でも構はない、自己の見、考へ、意味ありとしたところを表現して見た文藝である。だから、客觀描寫と言つても、心持をおろそかにした以前の客觀描寫とは甚だ意味も形も違ふ。折角樋口君に賛成して貰つても何の甲斐もないといふことになる。矢張作者の心持は無理想無解決でなければならぬからである。前の客觀描寫のやうに、理想的な茫漠たる考へはないからである。

泡鳴君の靈肉一致、無理想無解決、殊に利那主義は甚だ賛成である。私も主觀と客觀とを分けて論じたことはない。けれど私は其作者の心持を實行する處に至つて泡鳴君と少し考へが違つて居る。泡鳴君に言はすれば實行しなければ其作者の心持が充分に出て来ないと言ふに相違ない。それは事實だ。けれど其の實行の巴渦の中に身を没入して、普通の人々が遣つて居るやうに、眼も開かず其實行の中に居ては、其實際の真相が解らないのもまた事實である。吾々は鋭敏な感覺を持つて居つても、猶ほ且つある時日を経過するか、ある説明を待たなければ、其時の心的状態乃至外面事實を即座に明かに知り得ることの出来ないものである。自然は知識よりは常に一步を先んじて發展して行く。

次に本能の上から言つても、人には誰でもかうありたい、あゝありたいといふ希望（理想と言つても好からうが）ある。この希望は生存慾と謂つても宜しい。此の世の中に生存して行くに就いて、損なこ

と、自己の生存を危くすることはツツとして置くといふ性が必ずある。それから押して、知識のより多く發達した人ならばそれだけ、實行に就いて注意力が加はつて来る。普通の人のやうに無闇な實行はせずに、靜かに見て味ふといふ形になる。泡鳴君の『耽溺』が成功したのは作者が事件其物の巴渦に没入せずに、離れて見る知識の力がすぐれて居た爲めである。

要するに、私の考へでは、作者が其心持を實行すると否とは、自然主義といふ上からは（虚無主義社會主義などでは大に違ふが）枝葉論であつて、實行しようが爲まいが、さういふことは作者の個人性にまかせて置いて好いことだと思ふ。

兎に角心持——書方。これの合一した處に新しい文藝が生れた。

情 緒

情緒を排するといふことは、情緒を排するのではなくて、情緒を情緒として取扱ふのを排するのである。情緒は人々皆なある處のものである。情緒を排して了つては文藝は成立たない。

今までは情緒を唯披瀝した。自己の感じたことにまたは自己のセンチメントに、些の客觀を加へずに歌つた。それ故に作者はその自己の情緒に同化し讚嘆し、それが總べての人に共通のものやうに取扱つて居る。かういふ情緒を起す人もある、かういふ情緒もあるといふ風ではなくて、かういふ情緒は美

である、完全であると言つた風に書いてある。文藝には、——殊に新しい文藝には、これは美であるぞ、醜であるぞ、完全であるぞ、不完全であるぞといふ断定表現は禁物である。表面の顯はれを單純なら單純、複雑なら複雑に描いて、そして其内面を窺はせるやうにするのが必要である。

今此處に情緒に富んだ人物を描くとする。其人物に作者が同化して其感情の中に没頭して了へば、其作は甚だ取るに足らぬが、其人物を離れて、情緒を描けば、作中一人物一個性の表現として、決して排し去ることが出来るものではない。『春』に情緒的分子が多いと謂つて排する人があつたら、それは其情緒的人物に對する好悪で、作品そのものに對する批判とは言ひ難い。

勿論、情緒といふことを、數年前に起つたセンチメンタリズムと同じ意味で言ふのであるならば、それは排することに私も賛成である。時代は絶えず變遷する。今のセンチメントは、數年前に起つたセンチメンタリズムとは甚しく違ふ。けれど私から見ると今の作家にも随分甘いセンチメンタリズムがあるやうに思はれる。誇張したデカダン、誇張した皮肉、誇張した反抗、これ皆な往年のセンチメンタリズムの變形である。

只それが神秘主義とか象徴主義とかいふ假面を被つて、新しいやうな恰好をして顯はれて來たばかりである。センチメントを離れて描くといふやうな態度の作品はまだ餘り多く見當らないやうだ。兎に角情緒の取扱ひ方に就いて、今少し研究を加へなければならぬと思ふ。

二葉亭四迷君を思ふ

二葉亭四迷君は明治文壇の恩人であるのは言ふまでもない。私などは明治二十二年、『浮雲』の出た頃から、常にその偉才に驚かされて居た。高瀬文淵君には、私は二十五年頃いろいろお世話になつたが、その文淵君の口から私は二葉亭氏の偉い人格であるといふことを常に聞いた。『君、長谷川君には是非一度逢つて置きたまへ、日本には實にめづらしい人物だ。』かう言つて、文淵君は、『浮雲』第三編の『都の花』に載せられたあたりを、節のついたおもしろい調子で讀んで聞かせて呉れた。三馬一九、でなければ春水近松などを讀んでゐた私の耳に、ロシアのゴンチャロフ張の細かい心理描寫がいかにも奇異にひいて聞えたか、それは今更言はないでも分ると思ふ。

『あひびき』の翻譯は二十二年の『國民の友』に二號にわたつて出た。あの細かい天然の描寫、私等は解らずなりに、かうした新しい文章があるかと思つて胸を躍らした。『あゝ秋だ！ 誰だか向うを通ると見えて、空車の音が虚空にひびき渡つた……』其一節が故郷の田舎の檜林の多い野に、或は東京近郊の榛の木と並んだ丘の上に、幾度思ひ出されたことか知れなかつた。明治文壇に於ける天然の新しい見方は實に此『あひびき』の翻譯に負ふところが多いと思ふ。

私は二葉亭氏の名のついた作品は、いかなるものも讀まぬものはなかつた。ゴーゴリの『肖像畫』無名氏の『酒袋』『親心』ツルゲネーフの『くされ縁』などといふものまで讀んだ。中でも一番感化を受けたのは、太陽に連載した『うき草』であつた。其頃、私は喜久井町に居た。前の丘を越して、柳田君や國木田君がよく遊びに來た。ある時國木田君が、太陽から一冊にまとめた私の『うき草』を持つて行つたが、それを返して來た時、二人で夢中になつて、それから受けた感化を語り合つたことを覚えてゐる。

『頭が冷かで心の暖かい人』といふ言葉が其中にあつたが、それが非常に氣に入つて、何ぞと言つては、よくそれを持出した。ルウヂンが別れる前に、ワルレンソーフに斷りを言ひに行く處がある。あそこが非常に私等に物を思はせた。ルウヂンの手紙も常に話の種となつた。

『何うだ、一つ杯を合せやうぢやないか。もう我々青年の残つて居るものも少い。』

レジネフとルウヂンとの會合の言葉を真似て、ビールの盃を合はしたことも一度や二度ではない。

『かた戀』を始めて讀んだ時のことも忘れない一つだ。それは丁度國木田君が澁谷に居る頃で、秋の十月から十二月に懸けて、私等はよく出かけて行つた。其家は六疊と四疊で、低い斜阪の上にあつた。斜阪は綠草地で、雨の降る日などは、紅葉が際立つて鮮かに見えた。隣に牛乳屋の牧場があつて、牛がをりをりモーと鳴いた。ある日行くと、主人は居ない。遠い處を遣つて來たので一休みして行かうと思つて、座敷に上ると、机の上に買立の『かた戀』が載つて居る。私は餓ゑた獸のやうに、何を忘れて、い

きなりそれに讀耽つた。私は一氣にそれを讀み了るまで、腹の減るのを忘れて居た。秋雨がザツと降つて通つた。硝子障子からは庭の紅葉が燃えるやうに見えた。

『長谷川君といふ人は、君、豪い人だよ。人生觀などといふものは、それは立派なものだ。文藝では駄目だと謂ふので、ダルキンを此頃研究してるよ。』

高瀬文淵君がかう言つて私に話した。

私は幾度紹介して貰ひたいと思つたか知れない。

始めてお目に懸つたのは、昨年、ダンチエンコが來た時で、その歡迎會を開くといふ打合をした時である。私は其計を聞いた時、何うして、あの體格の好い丈夫さうな人が、そのやうな病氣に罹つたかと怪んだ。

二葉亭氏は文學が嫌ひだと言つた。眞劍で文學を遣る氣にはなれないと言つた。それだけ文學を重く見たと言ふよりも、それだけ文學に眞劍であつたと私は言ひたい。

實生活と藝術との問題は、常に難かしい問題である。或はトルストイに行き、或はフロオベルに行く。私は氏が『到底實感を描くことが出來ない。』と語つたのを覚えて居る。『私は懷疑派たらざるを得ない。』と言つたのを覚えて居る。『其面影』『平凡』が竟に氏の本領を出さなかつたのは、誰も皆な言ふところで

あるが、しかし其本領を出さなかつた處に却つて氏の本領が見えるやうに私は思ふ。

『浮雲』のやうな作品が、明治文壇の初期に顯はれたといふことは、奇蹟以上の奇蹟である。

また二葉亭氏が其最初開きかけた道を開拓せず、或る時は却つて紅葉露伴の文藝に従つて行くやうな態度を見せたのは不思議な現象である。

其の潜勢力が常に識者の間にのみ認められ、或は隠れ、或は顯れ、觸れやうとして觸れず、離れやうとして離れず、二十餘年を端倪すべからざる文壇の位置に送つたのも面白い現象である。

偏奇怪僻の人物

此頃偏奇怪僻の人物ばかりを書くといふ批難が随分批評壇に喧しいやうだ。これは面白いことだと思ふ。日本の自然派も當然受くべき批難を受け始めたと思ふと喜ばしくなる。

西洋でも自然派の作者は批難を到る處で受けた。平凡だとか、偏奇怪僻だとか、極端な描寫だとか、さういふ攻撃が雨霰と自然派の頭上に落ちたのは、道理な話で、在來の道德思想や習俗慣例に拘泥した人からはさう見られたのは當然のことである。

自然主義を奉ずる作者は、少くともそんなことを眼中に置いて居るものは一人もあるまい。渠等は在來の空想文藝に嫌らないで起つた群である。何うかして人間の總てを具備した、在來の作家の書いたやうな幽霊でない血も肉も靈もある人間を書き度いと思つて居るばかりである。それが在來の道德習俗——習慣や便利やらで出来上つた社會道德を奉ずる人々や、美とか文章とか感情とかに憧れて、快感を享受することが出来なければ文藝でないと思つて居る人々の小さい膽を破つたからとて仕方が無い。唯、お氣の毒だと言つて置くより方法が無い。

されど偏奇怪僻なる人物、少くとも偏奇怪僻と見える人物を書くやうに赴いて行つた自然派の自然の傾向は研究するに充分の價值がある。自然主義を奉ずる作者は自然の傾向として偶存特徴を書いた。個性を活躍させる爲めに自然の中の不自然を隠すところなく披瀝した。其人物の靈を表現する爲めには血と肉とをも充分に描かなければならぬと言つて、官能の力と變化とを描寫した。これが作中人物の偏奇怪僻に見える第一の原因である。ラスコリニコフは、偏奇怪僻に見える人物である。けれど、『罪と罰』を讀んで、かれの性格及び心理状態に自己を發見せぬものはあるか。ロマンチック派の作品中の人物に比較して、何れが最も痛切に自己を發見し得るか。先づ此邊の處を明かに答へて貰ふ必要がある。

自然主義は始めは純客觀であつた。今の日本の寫生寫實などに類した作品もあつた。一時は平凡主義に傾いて、平凡なることを平凡に賦して了ふといふ傾向もあつた。其他種々複雑した傾向と流派とを擧げたなら、随分多いことであらう。年毎に、新しい作家が出て、多少の改良と變化とを與へた。そして

其結果として主觀的傾向が夥しく其勢力を加へたのである。そして又第二の結果として、作中の人物が一種極端な色を帯ぶるに至つたのは事實である。獨逸のブライプトロオやアルベルチや瑞典のガルボルクやストリンドベルヒなどの描いた人物を見せたなら、今の評家はどんな顔を爲るだらうか。恐らく氣死するであらうと思ふ。

イヤ、そればかりではない、其極端な色は一層極端になつて、所謂空想、神秘、象徴などの作品が出た。此等作品と自然派初期の作品と比較すると、其相違は殆ど同じ派の作品と思はれぬほどであるが、しかもそれは一轉化であつて、其骨髓は同じであるといふことは泰西批評家の通論である。

であるから、偏奇怪僻の人物が多くつて今の小説は駄目だなどといふのは、自然派の何物たるかをも知らぬ人の言葉で、さういふ人は昔のロマンチック派の作品を読んで引込んで居るが宜い。

又今の自然派の作品を平凡でつまらぬといふ評家もあるやうだ。これも平凡主義に當然至るべき自然派の傾向を知らぬ人の言で、顧るに足らぬ。要するに、自然派攻撃の多くの批評がまだ自然派の立場の何處にあつて、何ういふ風にして、何ういふことを爲て居るかを知つて居るもの無いのは憐らぬ。自然派を攻撃するなら、今少し自然主義の消長位は吞込んでから遣つて貰ひ度いものだ。

けれど自分は泰西の思潮を鵜呑にして、日本の生活の状態なども眼中に置かぬ遣り方は反對だ。新しきを趁ふの結果、ゴルキーやチエホフや其他自然派の尖つた作中の人物を眞似て、日本に存在もせぬ

人間を描くことはつまらぬことでもあり、且つ自然派の旨に適つて居らぬと思ふ。自然主義が、日本の思潮に入つて、それがうまくこなれて、日本の自然主義の作品が出来上らなければ、駄目だ。

象 徴 派

象徴派の運動は將來わが小説界に、何ういふ影響を來すかといふのは大問題である。自然派中の主觀派が段々其情操とか心理とかを誇張して、自然に煩渴し自然に朧願し、直ちに神秘なる内性を曝露せんと煩悶した結果、『非自然』といふやうなところに思ひもかけず到達したのは面白い。

此の間死んだ佛蘭西のユイスマンス、それからモリスバレスなど、皆此の派の勇將である。自然の極り切つた變遷は實に平凡の極でつまらん。いや、かうした空氣の下に、かうした平凡な四季の變遷の下に五六十と定つた年壽を得て、つまらなく自然律に従つて居るのは到底吾々神經過敏の徒の堪へ忍ぶ所でない。いつそ自然と没交渉の生活を送る方が増した。とかういふ極端な思想で、社會を離れた寺院の一室に脱れて、強ひて世を知らずに勝手な世を送る人物とか、又は戀人を他に嫁せしめて、自分は時其れを訪うて、わざと嫉妬や煩悶を起してそれを樂みにして居るといふやうな人物を選んで描いた。

此傾向——自然に煩渴し、朧願し、そしてその羈絆に堪へなくなつたといふ傾向は、心理的から言つて、實に面白い傾向だと思ふ。唯自然の現象をのみめざして進んで行つて、思ひも懸けず、かういふも

のに邂逅して、そして多少行當つたといふ姿である。

自分は自然派の作家が幾十年間の苦悶悪闘をつけて、かういふ處に象徴のまことの意義を發見したのを意味深いと思ふ。象徴、神秘と謂ふことを、單に自然派の傾向に慊らずして起つたものとか、自然主義と丸で交渉の無いものとか言ふものは、今の新興の文藝の外形を見て内部を知らぬと言つて決して差支ない。

ハウプトマンが寫實風の作品から象徴風の作品に移つたのを評して、ハウプトマンは偉い、偉い作者は主義主張などに束縛されないと言つた評家がある。此の評家は曾てニイチエを鼓吹した人だ。新思想、自由思想、自然思想、の張本人とも謂ふべきニイチエの鼓吹者がさういふことを言ふとは實に思ひも懸けぬ。ハウプトマンの象徴風の作品に、自然主義の影響が無いだらうか。沈鐘の主人公の苦悶は自然思想、自由思想、即ち人間の根本に横はれる苦悶苦闘ではないだらうか。私の考へでは平和祭や日出前や寂しき人々等の寫實風の戯曲を書いたハウプトマンだからこそ、沈鐘のやうな新しい象徴の意味をこめた戯曲をも作ることが出来たのだらうと思ふ。象徴派は自然派の反抗運動ではなくつて、自然派の苦戦悪闘の怒濤の中から産れ出た眞珠のやうなものである。

ニイチエは狂死した。モウパッサンも狂死した。エルレーヌも餘り其末路を好くしなかつた。無理想、無解決の自然思想を極端に追うた人は狂死にあらすば醉漢といふ末路を得る。人間は自然の一部であ

りながら、自然の姿を其儘實現することが出来ぬとは情けないことだ。メエテルリンクなどが此の苦悶に堪へず、沈黙とか寂寞とか言ふ殻の中に入つて、一種の主張を持したのは、寧ろ勇氣に乏しいと思ふ。

何はともあれ、大陸の新派の思潮には、研究すべき種々の面白い現象が多い。日本の文壇の一部には、二三十年も前に彼地に流行つた自然主義を今更事々しく鼓吹しないでも好いだらうなどといふ論者もあるが、さういふ人に限つて、この面白い現象を多くは度外視して居るのは譯がわからぬ。よく其真相の研究も出来て居ぬのに、もう舊いなどとは不眞面目も甚しいではないか。況んや舊いどころか、其運動は益々新しい方向に向つて進みつゝあるに於てをや。

ブルジエエの心理描寫

パウル・ブルジエエは小説家で且つ批評家である。其批評には随分面白い議論もあるさうだ。

此人は心理的描寫といふことを以て著名である。私は始め其人の短篇集を二三冊讀んだが、何うも心理的描寫といふ顯著なる趣が見えぬ。寧ろ文章の美を以て事件の詩的なるを選んで書いて居るやうな處があつて甚だ慊らぬ。何ういふのだらうと疑つて居たが、『コスモポリ』『離婚』などいふ長篇を讀むに及んで、少なからず其疑惑が解けた。ブルジエエの心理的描寫と謂ふのは、露西亞のドストイェフスキーやゴンチャロフの遣つたやうな心理的描寫でなくて、一句毎の、一章毎の心理的描寫であるといふこと

が解つた。題材は寧ろ心理的小説と謂ふよりも、問題小説に傾いて居るが——いや、今少し明かに言ふと、社會小説とか家庭小説とか謂ふ風なものだが、それが在來の小説家の遣つたやうに、叙述が唯の叙述でない、叙述の間に巧に作中人物の心理を細かに解剖して居る。巧みに説明法を用ゐて心理の波瀾の起伏を描いて居る。だから、讀んで居ると何だかかうごちなくつて、技巧の痕が餘りに明かに出て居るやうな心地がするが、仔細に見ると左様でない。矢張新しい努力であるといふことが解つた。新しい文章を書くといふ人には、無論参考になることと思ふ。

新茶のかをり

樹々の若葉の美しいのが殊に嬉しい。一番早く芽を出し始めるのは梅、櫻、杏などであるが、常磐木が芽を出すさまも何となく心を惹く。

古葉が凋落して、新しい葉がすぐ其後から出るといふことは何となく佗しいやうな氣がするものである。椿、珊瑚樹、柚子、ハツ手など皆さうだ。檜、樅は古葉の上に、唯新しい色を着けるばかりだ。

竹は筍の出る頃、其葉の色は際立つて醜い。竹が美しい若葉を着けるのは、子が既に若竹になつてからである。生殖を營んで居る間の衰へといふことをある時つくづく感じたことがあつた。

花曇り、それが濟んで、花を散らす風が吹く。その後には晩春の雨が降る。この雨は多く南風を伴つて

来る。昨日の花、この爲めに凋落し盡すといふ恨はあるが、何となく思を収めて感じが深い。硝子窓の外は風雨吹暴れて、山吹の花の徒らに濡れたるなど、歌にでもしたいと思ふ。

躑躅は晩春の花といふよりも初夏の花である。赤いのも白いのも好い。ある寺の裏庭に、大きな白躑躅があつて、それが爲めに暗い室が明るく感じられたのを思ひ出す。

僕の大きくなつた土族町からは昔の城跡が近かつた。不明門といふ處があつた。昔、其處に閉ぢたまゝの城門があつたので、それで名に呼ばれて居るのであるが、其頃は門などはもうなく、石垣の間からトカゲがその體を日に光らせて居た。濠の土手に淡竹の藪があつて、筍が澤山出た。僕等は袋を母親に拵へて貰つて、よく出懸けて行つては、それを取つて來たものだ。其頃は屹度空が深い碧で、沼には蘆の新芽が風に吹かれて、對岸の丘には躑躅が赤く咲いて居た。

初夏の空の碧！ それに、櫛の若芽の黄に近い色が捺すやうに印せられてゐるさまは實に感じが好い。何となく心が浮き立つて、思はず詩でも低誦したくなる。物が總て光つて輝いて明るい。

向島の長い土手は、花の頃は塵埃と風と雑沓とで行つて見やうといふ氣にはなれないが、花が散つて、若葉が深くなつて、茶店の毛布が際立つて赤く見えるころになると、何だか一日の閑を得て、暢氣に歩いて見たいやうな心地がする。

散歩には此頃は好時節である。初夏の武藏野は櫟林、樽の林、その若葉が日に光つて、下草の中には

ボケやシドメが赤い花をちら／＼見せて居る。林を縁取つた畑には、もう丈高くなつた麥が浪を打つて、處々に白い波頭を靡かして居る。麥の畑でない處には、蠶豆、さや豌豆、午夢の樹になつたものに、丸い棘のある實が生つて居るのを、前に歩いて行つた友に、人知れず探つて打付けて遣つたり何かすると、友は振返つて、それと知つて、負けぬ氣になつて、暫く互に打付けこをするのも一興である。路はやがて穉樹の林に入つて、うねうねと曲つて行く。と、思ひも懸けず、林の外れに、おいちに／＼と呼んで歩く藥賣の男が、例の金ピカの服を日に光らせながら、さも／＼疲れ果てたといふやうに草の上に腰をかけて休んで居る。モウバツサンのノルマンディを舞臺にした短篇がそれとはなしに思ひ出される。

府中から百草園に行くのも面白い。玉川鐵道で二子に行つて若鮎を食ふのも興がある。國府臺に行つて、利根を渡つて、東郊をそゞろあるきするのも好い。

端午の節句——要垣の赤い新芽の出た細い巷路を行くと、ハタ／＼と五月鯉の風に動く音がする。これを聞くと、始めて初夏といふ感を深く感ずる。雨の降頻る中に、さまざまの色をした緑を抜いて、金の玉のついた長い職竿のさびしく高く立つてゐるのは何となく心を惹く。

新茶のかをり、これも初夏の感じを深くさせるものの一つだ。雨が庭の若葉に降濺ぐ日に、一つまみの新茶を得て、友と初夏の感じを味つたこともあつた。若い妻と裏にあつた茶の新芽を摘んで、急こしらへの火爐を拵へて、長火鉢で、終日かゝつて、團子の多い手製の新茶をつくつて飲んだこともあつた。

田舎の茶島に、笠を被つた田舎娘の白い顔や雨に濡れた茶の芽を貫目にかけて筵にあける男の顔や、火爐に凭りかゝつて、終日好い聲で歌をうたふ茶師のさまなどが切々に思ひ出されて来る。母親は其頃茶摘に行つては、よく歸りに淡竹の筍を澤山探つて来た。

楓の若葉は赤いのよりも緑なのが好いと私は思ふ。

都會の夏と田舎の夏

私は一體都會の夏が好きだ。金を鑠したやうな暑い中でせつせと労働して居るのは、何だか勇ましいやうな氣がする。私は決して海水浴に出かける贅澤な避暑客を羨まない。

現に、私は夏出かけたことは餘りない。大抵家に居る。夏の旅と謂ふものは何うも殺風景である。何處に行つても汗臭い臭ひがしたり人間の倦んだ状態が眼に入つたりする。旅店にとまつても、春や秋の旅のやうに好い心地がしない。それに天然の色彩の方から言つても夏は單調だ。

都會に居ると 寒暖計が九十二三度にも上つて、往來にも人の影が途切れるやうな暑い日に都會に居ると、一種自然の力が烈しく身内に迫つて来るやうな感じがする。人間といふものは不思議なもので、極端な自然の壓迫を受けると、それに對して、それに相應した抵抗力が出て来る。抵抗力には必ず萬斛の涼氣が伴ふ。

町の灯——都會の夏でなければ町の灯と言つたやうな涼しい趣は見られない。近所に縁日でもあつて、浴衣一枚になつて、ぞろ／＼出かけて行く。氷屋の店では客が一杯で、亭主が裸になつてせつせと氷をかいてゐる。カンテラの下には植木屋の店が並んで、いろ／＼の草花が出て居る。えぞ菊、石竹、朝顔、それに蘇鐵などもある。別段買ふ氣もないが唯無意味にひやかして値段をつけさせて見などする。時にはまけられて、大きな鉢を持たせられて、大汗をかいて歸つて來ることなどもある。

夜見世の店もひやかして見ると面白いものだ。日中日のカン／＼照る處で見れば三文の價値もないやうなものだが、夜の灯に照されると、何だかそこに新しい色が出たやうな氣がして、埃のついた古雑誌や古鋸や古金槌などを手に取つて見る氣になる。それと同じやうに、通る女が矢張夜に鍍されて、誰も彼も美しく見える。

月があれば一層好い。都會の夏の月、まことに水の如しと言つて好いと思ふ。庭樹の間から見る人もあらうし、竹藪の間から眺める人もあらうが、ことに下町に特色がある。物干臺——晝間は浴衣や腰巻や其他の洗濯物で一杯になつて居て、檜や楓や樺などの鉢物がカン／＼照る日影と白い暑い埃とに照されたり塗れたりして、見る影もなくなつて居るが、夜になると、終日暑い壁と壁との間に蒸されて苦んで居た一家の人々が蘇つたやうに其處に出て來て、はた／＼と團扇を使ひながら新しい涼しい夜の空氣を吸ふ。月は一家團樂のさまを繪のやうに上から照らす。色の白い島田の娘が軽い調子で芝居や役者の話をする。——これを田舎の葡萄棚か何かの下で、垣になく蟲の聲を聞きながら藪蚊にさゝれて夕涼みする一家と比べて見るのも面白い。

朝顔は都會の夏の花だ。

朝顔の花の趣は都會でなければ十分に味ふことが出來ない。朝寢をして、納豆賣の聲を聞いたことがない人々も朝顔があるが爲めに夏は早起きをする。屋敷町なら、垣に其のさま／＼の色を這はせる。下町なら、鉢に變り種を仕立て、朝毎の花を楽しむ。朝早くかなめ垣建仁寺垣の連つた小路を行くと、夜の霧がまだ晴れずに残つて居て、庭木の梢が其中から微かに見える。路傍の小さい家の一枚明けた戸の間からは、蚊帳の青く靡くのが涼しさうに見える。かなかな蟬が其處にも此處にも鳴く。かうした朝の散歩に、朝顔の新しい色を見出した時には、心から夏といふ感じがする。

朝顔を賣つて歩く爺の車も、午頃になると、大道の白い埃に塗れて、種々の花の色も大方は萎れて了ふ。不忍の池の蓮よりも、入谷の里の朝顔を私は好む。

郊外の瀧——王子だとか十二社だとかいふ處も面白い。贅澤な海山の避暑などの出來ない人々が一日

の涼を得んが爲めに出かけて行く。小さな池、小さな瀧に僅かなかけの涼しさを求めて、少時世を離れた放縦な眞似をして暮す。電車から小半里、平生は里の人しか通らないやうな處を白地の單衣や麥稈帽や小さい蝙蝠傘がぞろ／＼と通る。百姓の鼻が町娘の美しいが通るのを見て、その後姿の見えなくなるまで見送つて居る。松や杉の青い翠の中に入ると、やがて瀧の音が急雨のやうに聞える。池を取巻いた涼しさうな掛茶屋——裸の男が赤い褌をしめて居る。

田舎の夏はそれに比べると、趣味に乏しい。色彩がない。對照がない。言ひ更へれば繪になるやうな處がない。私は幼い時、縁側で蚊遣火をいぶしながら、天の川の空に横つて居るのを見たことを覚えてゐる。草の野から、大きい月が昇つたのも覚えてゐる。それに、私が大きくなつた町は、七夕を賑かに祭る處で、其夜は兩側からいろ／＼な燈籠を懸けつらねて、近在から百姓達がぞろ／＼見に来た。燈籠の形にも、いろ／＼なのがあつて、町家では各自意匠を凝して、其特色を誇つて見せた。町の角には玉蜀黍をばち／＼音させて焼いて居る男もある。桃の實などは、一錢も買ふと、兩方の袂に入れ切れぬほどあつた。夏になると私はいつでも其頃のことを想起す。

田舎に夏を送る人は、散漫な暢氣な生活の中に、おのづから世を忘れて天然に近づき、都會に夏を送る人は、烈しい苦しい餘裕のない生活の中に、僅かに天然の涼意を求めて暑さを忘れる。

最も感興を惹いた山水

私の最も感興を惹いた山水、海では志摩の安乗崎の燈臺の上からの矢灣の湧き返る怒濤を見た時である。けれど安乗崎が日本で屈指の勝地であるといふのではない。もつと好い處はいくらもある。日向の鵜戸岬、伊豆の石廊崎、下總の犬吠岬、三河の伊良湖岬、出雲の日の御崎、皆な安乗崎よりは勝れて居るとも劣つては居ない。では、何故安乗崎が最も感興を惹いたかと謂ふと、それには譯がある。私は磯部から安乗に舟で渡る途中、俄に、東風の烈しいのに邂逅して殆ど矢灣の鬼にならうとした。小さな舟は木の葉のやうに舞ふ。いくら櫓を操つても舟が自由にならぬ。船頭は蒼青な顔をして居る。時は四月上旬で天氣は好かつたが、風がいかにも強いので灣には一艘も舟が見えない。波は鼎の沸くが如くに立つて居て、舟の中までドン／＼打込んで来る。私も船頭もこれはとても駄目だと思つた。それを何うやらかうやら向う岸の、船着でも何でもない木のこんもりと茂つた處に着けた時の嬉しさ。——ありもせぬ財布から五十錢餘計に船頭に酒代として遣つたのを見てもその嬉しさが解る。

其の昂奮した心の状態が少なからずこの安乗崎の風景を深く私の心に刻み込んだに相違なかつた。崖の上の畠には菜の花が黄く咲いて居て、低い松が風に鳴つて居た。漁村は徒崖と磯との間にあつて其中頃から岬の絶端——即ち燈臺のある處に行く路が通じて居る。少し行つた處に岬の絶端でなくつては見

られぬやうな椿やクロモジで圍まれた小さい宮があつて、それから路が段々面白い松の中に入つて行く。右には太平洋の波が凄じく怒濤を卷く。

燈臺守は三十位の男だつた。かういふ處では糸經に草鞋がけと言つたやうな書生は特に歓迎されぬものだが、其男は自分が東京のものだといふのを知つて、歓迎して、燈臺の中を詳しく見せて呉れた。

『かういふ處は晝でもさびしくつて仕方がないですよ。』

こんなことを言つてゐた。

燈臺の上から、今少し前自分が溺れやうとした的矢灣が怒濤を卷いて居るのが見えた。三河の伊良湖岬の上に大きな鳥の翼のやうな黒い雲が蔽ひ懸つた。私は其時の感じを終に忘れることが出来ない。

シエンキウキツチの『アスピノウオルの燈臺守』を讀んだ時にも安乗崎を思ひ出した。老いて世に疲れ、てその海角を唯一の安息所とした燈臺守と、燃ゆる心を抱いてさびしく怒濤の音と千鳥の聲とを友としてゐる若い燈臺守とを比べて考へて見た。また、それから一二年経つた後に、三河の伊良湖岬の鼻からその安乗の燈臺の火光の旋回するのを望んで、其時のことを追想したこともあつた。燈臺守とか望樓とか言ふものは、餘り盛んなところは駄目だが、人氣の遠いさびしい處では面白いものである。私は千島の國尻島に設けられた日露戦役當時の望樓の話を聞いて、『島の望樓』といふ短篇を書いたことがある。

山では矢張日光の奥だ。

栗山十三郷、鬼怒川の上流に沿つた部落、それが今でも分明と頭腦に印象されてある。湯西川の綺麗な溪流の岸に湧き出づる温泉、毎日々々行つても行つても山ばかり林ばかりの深山窮谷、をり／＼見える溪流の閃き——川俣の温泉場は其溪流の細く細くなつた狭い谷の底にあつた。其處には浴舎が一軒あつて、欄干から前の山の紅葉が鮮かに降り頻る雨の中に見えた。蒲團の襟には垢がついて冷めたかつた。階段を下りて下に来ると、其處には圍爐裏があつて、野門から浴期中だけ上つて来て居るかみさんが櫓をくべて無駄話を續けてゐる。禿頭の爺は、狂歌をよむのが得意で、よく戯談を言つて人を笑はせたが、ある時輿に乗つて、猪狩の話や鹿狩の話や山小屋の話などをした。維新の亂に、會津の兵に驅逐されて、今市まで出かけて行つて其處で一戦争して、怖くなつて山越しに遁けて歸つた時の話もして聞かせた。傍には、此の温泉場に二軒しか無い樵夫の家の若い細君が坐つて居て、私などと一緒に其話を聞いたりいろいろな話をしたりして居た。此細君は年の頃二十位で、眉を剃り齒を染めて居たが色の白い輪廓の正しい眼付の好い女で、こんな深山にかうした美人があるかと思はれた。それに言葉が鄙びて居なかつた。聞くと、此春、山向ひの南會津の檜枝岐から嫁して來たのださうで、駄馬に乗つて、丈に餘る雜草を分けて、路のない山路を越えて遣つて來たといふ。私は萬葉時代の事を考へずには居られなかつた。それから南會津地方の言葉が他に異つて上方風な處があることを其女から聞いた。檜枝岐と尾瀬沼との間に

は、曾て藤原なにがしの隠遁した跡があるといふことを思ひ出した。

『私は山に行く時はいつも鎌をさして行きますよ、何んな魔に逢はないとも限りませんから。』

かう言つて其女は笑つた。モウバツサンの短篇にアルプ山中の温泉のことを書いたものがある。其時はまだ読んで居なかつたが、今なら屹度それを思ひ出したに違ひない。山の民の山を恐るゝと言ふやうなやさしい心を私は考へた。

谷川の向う岸に温泉が湧いてゐた。私は獨木橋を渡つて行つた。温泉は湯壺の形をなしてゐるばかりで屋根も何もなかつた。其上には紅葉が一杯に散つて居た。

私は其の紅葉をかきわけて、谷川から透徹るやうな綺麗な水を汲んで来てうめて、其中に體をつけた。

川は白く碎けて凄じい音を立て、流れて居る。私は連日沿つて來た溪の上流と下流とを思つて見た。世を離れたやうな澄んだ心になつた。

懸崖の上の紅葉がばらばらと落ちた。

書くことを見ること

書くといふことよりも見るといふことが肝要である。筆の修練よりは心の修練。但し茲に言ふ心の修練は、普通人の所謂心の修練とは甚だしく違ふ。理想とか向上心とかいふものではない。寧ろ理想に衝突

し、向上心の内容に失望した處に起つて來た一種の心の状態の修練に似て居る。

見るといふことにも、無数の度数がある。實際あるやうにこの人生が見えるのは容易なことではない。藝術家の主観——むしろ氣分といふやうな微細な空氣でも、其レンズが或は分明したり或は曇つたりする。實際社會にあつて、實際にのみ没頭して居る人間は、多くは實際の社會を知らないものである。つまり見るといふよりも實行するといふ心地である。

見るといふ處から、新しい藝術は生れて來た。

田中喜一氏の『泡鳴論』

現實を重んずるといふ言葉は大分彼方此方に聞えるやうだが、實際に現實を重んじて、現實に生存して居る人は尠いやうである。議論は先づ措け、主張は先づやめよ。しかして現實を見よ。

田中喜一氏の岩野泡鳴論をよむと、さういふ風に考へられる。泡鳴君は少くとももうあゝいふ所は通り越して居る。現實といふものに觸れて、寒熱の往來する境を詳しく味つてからの議論である。處が田中氏は現實の内容に就ては、何等の知る所もなく、何等の研究し得たところもなく、唯漫然現實を重んずることだけを言つて、しかも其の結論は非常な空想に墮ちて居る。私はあの論文を讀んで、學者が心理を研究しないことの甚しいのを嘆ぜずには居られなかつた。

私共はさうした空想から一步退いて現實に歸つて、現實の状態を観察して、そしてそれを（たとへ不
完全な現實觀察であるにしても）議論なり作品なりに顯はさうとして居るのである。氏の空想でこしら
へ上げた人生や現實とは全く没交渉である。

現 實

お互に粗い感情や粗い理窟で喧嘩したり議論したりしても仕方がない。現實は複雑で、細微で、機能
的で、いつも深い心理がついて廻つて居る。

欲望と理想

深い心理に入つて見るのが第一だ。

欲望と理想——これは生存には無論必要であるが、それが實際に當つて、如何に破壊されて行くかを
細心に研究して見るが好い。欲望は即ち破壊ではないか。

エミール・ゾラ

ゾラがナナを書いて居る時分、不健全と不道德を以て非常に攻撃された。社會に害毒を流すといふ批評も

随分あつた。其時ゾラが答へて曰く、『さういふ見地から見れば、私の作品などよりも、ヴィクトル・
ユーゴオやジョルジ・サンドの方がどれほど世間に害毒を流すか知れない。』

ゾラがナナを書く時には、非常な反響で、毀譽褒貶の聲が絶えず耳に入つた。流石の彼も心の動搖を
禁じ得なかつたと見えて、最後の筆を擱いた時には、ほつと呼吸をつくといふ風で、『まア、兎に角これ
で此作の最後の一行を書き終つた！ これで自由になつた！ これからは新しい世界に翔けることが出
来る！』と書いて友に遣つた。

『田舎教師』の日記

『田舎教師』の主人公の書いた日記の中から天候と草花を記した處を抜いて見る。

七月二十九日 朝横様に降る雨にぬれて出勤、終日曇りつ晴れつ、時々大雨到る。△兒童違約し
て白百合の花を持来らず。蓮の花咲きたりといへど未だ見ず。徑七分ほどの青き柚子二つ貰ふ。日記
書き居れば、かみきり蟲羽音高く飛び来る。△今朝うす色の朝顔二つ咲きぬ。

三十日 晴れて暑く八十五度、きんみつびきの花初めて見る。△歸りに植木店を見る。ちだりさう、
ぢやこーなでしこありたれど價高ければ買はず。

卅一日 醫師の庭に百合朝顔咲きたり。△晴れて八十四度、蒸暑し、午後一時驟雨來る。今朝朝顔

の鉢を洗ふ。美しきが二輪、白きさぎ草も初めて咲きぬ。優なるかよわき花や、小さし小さし。

八月一日 二階の窓によれば野の朝の雲に清けきかゝやき見えて、勇しき夏の光は又榮え行かんとす、濃き緑のときはあけびの葉に露心地よし。△稻葉伸びて二尺、朝顔の美しきは五つ、さぎ草の白きが三つ。△午後細雨、夕風涼し、心地よきかな金色もゆる夕日の雲。

三日 鐵道線路の西の森に散歩して野花を探る。えりころ、おひしば、ひよどりそー、こもつなぎ、なでしこ其他名の知れぬ草など。ひあふぎ、ききよふ、秋海棠を見る。

四日 朝より雨、午後に至りて全く晴れず、きんかんの花白う、秋風が、そよく肌にはさる。

五日 今朝早くより晴れて、秋風ふくらし木の葉の動きに見ゆ。日光の座敷に射し入る方向より考ふれば、太陽は少しく南に廻りたるやうなり、舊六月二十四日、日出午前四時五十一分、日入午後六時四十二分。

六日 此頃稻の葉伸びて、朝の野緑すがくしうなりぬ。久しく朝日に接せず、西窓の夕雲と涼風とに親しくなりぬ。人病めど花を忘れず、花瓶の水時々換へらる。毎朝朝顔の花一つ二つ、ばら咲きたれど小さし。さぎ草眞白きが咲く、優しいかな此花。△ぶだう、なし、ほゞづき出づ。昨夜くさかけろー飛び来る。夕暮かはほり出づるあまた。

八日 立秋、土用明け。晴れて暑し。秋海棠今年は花多くつかず、朝顔ははづれたれど、明朝

は六輪ほど咲くべし。稻の穂また出づ。今朝よめな、ひめむかしもよもぎ貰ふ。朝夕座敷のみの運動にて野に遠ざかれれば、野花の盛り惜む。彌勒野、才塚野いかに。なたまめ貰ふ。△昨夜初めて鈴蟲の音を聞き、今宵又始めてきりくすの聲を耳にす、井の端にうまおひ鳴く。

此日記は九月一日までで終つて居る。七日には此筆者はもう此の世に居なかつた。私はこの一『田舎教師』の歩いた道、住んだ處、勤めた學校にも行つて見た。そして此日記につけてある頃、矢張同じやうにして野の花を採集したことがある。日の光と野の花と夕の雲と、それが何だか私とかれとの間に深い關係があるやうに思はれた。野の道を歩いて居ると、かれが袴をつけ麥稈帽子を被つて其處に居るやうな氣がする。利根川の土手、寺の本堂、私は四邊の光景を見る度に、かれのことを思つた。心理を外物で顯はすといふ氣になつたのは此頃からである。

踏 査

街道がある。其處に日が照る。人が通つて居る。向うには山の翠が見える。それは年々歳々同じである。秋が來れば稻が熟つて、里川に澄んだ水に雑魚の泳ぐのが鮮かに見える。稻を満載した車がガラガラと音を立て、通つて行く。私は其處に一『田舎教師』の歩いて行く姿を明かに見得た。

踏査——私はこの踏査といふことを地理學から學んだ。

日記よりも手紙、手紙よりも踏査の肝要なのを私は感じた。

歴史地理といふ學問は面白い學問である。私は小説地理といふことを『田舎教師』に由つて考へた。

私が小説製作上實在を尊ぶのは、決して消極的ではない、積極的である。史家が古城址をさぐり、地理學者が山嶽を踏査するのと同じ位に思つてゐる。

描寫と説明

何うか説明でなしに、描寫で總ての感じを顯はしたいと思ふ。

けれど説明もまた時としては一種の描寫になることがある。そして説明的描寫が手に入ると、作者の心がけた主觀が割合に有效に出て來る場合が多い。描寫では何うしても出ない奴がテキパキ出て來る。

例を擧げて見れば、トルストイの『クロイツェルソナタ』などがさうだ。けれどあれをあゝ書かずに、描寫一方で行つて、そしてあの強い主觀が出るやうに出來ないだらうか。

何うも難かしいやうにも思はれる。

かれはかう思つて居るとかあゝ思つてゐるとかいふ風に書きたくない。作者が作中の人物を人形つかひが人形をつかふやうにつかつて動かして居るのを見ると、興味が索然として了ふ。作者は説明しても好いが、少くとも其説明は作者の説明であつてはならない。

ホルツ、シユラアフの『死』

ホルツ、シユラアフの『死』を本號に載せた。唯單にめづらしい形式といふ以上に面白味があると思ふ。平面描寫——極端なる平面描寫から必然に起つて來る一種の省略といふことが點頭される。かうした試みにあつては、性格といふこと、事件といふこと、背景といふこと、さういふことにはさして重きを置いて居ない。作者の目的はそれ以外にある。

最後に……を連續させて『お母さん』と結んだ處など殊に複雑した種々の印象を讀者の胸に與へる。心理を説明せずに、周圍から集つて來る現象の上に價值を見せやうとしたのは面白い。けれど、かういふ風な遣り方では、小さいものは描けるが、大きなものは難かしい。徹底自然主義が充分なる發達を遂げなかつたのも、原因が其邊にあると思ふ。

フロオベルとモウパッサン

『予は (Boule de Suif) (脂肪の塊) をまた讀みたり。予は其作の傑作なることを思ふ。かくの如き作を一ダズンも書かば、汝は名を成すを得ん。』

千八百八十年、かれの死のまさに來らうとする頃、フロオベルはモウパッサンにかういふ意味の手紙

を遣つた。『脂肪の塊』は例のゾラのメダンの團欒に載せたもので、文壇これに由つて始めてモウパッサンの名を知つたといふ作である。あはれなる師は其門弟の名を成すを見るに及ばずして死んだ。一ダズンに代ゆるに二百餘篇のすぐれたる短篇！

主観の色彩

作者の主観から来る色彩は成たけ没し去りたいといふのが私の願ひである。

作者の特色は無論保存しなければならぬ。ある種の作品にあつては、それがその大部を占める必要があるものがある。

小説にあつてはさうした色彩が多ければ多い程、出てゐれば出て居るほど其正しい目的は達せられな
いと思ふ。色彩なき色彩——主観を没せる主観、私はそれに向つて進みたい。

すると、背景が餘りバツとして不得要領に終るからつまらないといふ人がある。しかし要するに不得要領なのがこの自然である。時とすると進化だか退化だか解らないやうなことにすらあるのがこの人生である。其自然と人生とを描くには何うしても斷定を避けなければならぬ。斷定を避ければ、何うしても背景がバツとなる。

イブセン

人間の本能には隠すといふ性もある、覆ふといふ情もある。成たけ世間體が悪いからソツとして置かうといふ卑怯な考へもある。義理で氣の毒だから自分は不愉快だが黙過しやうといふこともある。又一步進めると自分の存在よりも義理の方が貴い、其爲めに犠牲となつても苦しくないといふものもある。社會はまた社會で、餘り人間が本能を振廻しては——我儘となつては此の社會が成り立たんから、學者やら賢人やらが出て、社會を破滅するやうなことはお互に爲まい、社會も亦人間の眞價値を没却するやうなことは免めてせぬやうにしやうと、それで此の人間と社會とが好い鹽梅に釣合を取つて居る。けれど或時代には社會の方の錘が重くなつて、人間の實價値といふことが甚しく軽くなる、輕蔑される、形式的にされる。何うでも好いやうに取扱はれると、人間も亦一種の便利からそれに馴れて、自から價値を軽くして敢て咎めない。甚しきに至ると、其本性を没却して了ふのが人間の豪い處であると言ふものさへ出る。かうなると、人間が造花か枯れた木の葉のやうになつて、力といふものがなくなつて、小さい感情でこね廻した小さい藝術が一番すぐれた藝術だなどと言ひ囃す。従つて自己の本性などと言ふことは忘れて——實際の血と肉とで生存して居るのではなくて、外形と形式で如才なくお茶を濁して居るといふことになる。かういふ時代には、其外形が醜ければ其根本はいかに力強いことでも醜として排斥して了ふ

し、其發展が悪であれば、いかに其底に人間の眞價値が顯はれて居ても不道徳として唾棄して了ふ。かういふ時代に生れて、新生命を文學の上に吹込んだイブセンは實に豪い。

それが爲めにイブセンは、必ず剛健で、必ず皮肉で、必ず積極的厭世で、つまりぬものはどしく破壞して了へといふやうな人物を好んで描く。其人の生立、其人の社會上の位置、其人の履歴、其人の富、そんなものを眞を得る爲めの犠牲、新しい生命を得る爲めの犠牲として棄て、了ふのは何でもないといふ強い意思を一頁毎に顯はして居る。イブセンの個人主義はニイツエの個人主義とは餘程違つて居るかは知れぬが、其向ふ所は一つであらうと思ふ。

メレジコウスキーは言つた『死の苦痛、即ち生の苦痛』と、イブセンの主人公は皆な死の苦痛即ち生の苦痛の境の空氣を吸収して居る。何うかしてこの虚榮の衣をぬぎ捨てたい、何うかして新生命の産聲を擧げたいと叫んで居る。そしてイブセンは此の間の消息を或は表から或は裏から、或は横から、或は縦から、縦横無盡に描いて居る。ボルクマンの苦悶、「幽霊」の主人公の最後、「人形の家」の女主人公の決心、ロスマルスホルムの男主人公女主人公の死、「海の夫人」の女主人公の復活、これ等皆な其苦痛の聲をこの天と地とに捧げて居る。

そしてこの悲劇の根柢を造つて居るものが、決して感情でないのは注意すべきことだと思ふ。大詩人と言はれる沙翁の戯曲でも、多くは感情本位で、ハムレットのやうな烈しい強い煩悶でも、感情的のところが多くない。だから我國の近松の戯曲などは無論のこと、いくら悲劇でも其根柢は全く感情から來て居る。小春治兵衛の情死が悲壯と言ふ感を引き起さないのも蓋しこれが爲めであらう。然るにイブセンは悲劇を構成するに、感情ならざる智の方面に近い思想で一貫させて居る。一度かうと根柢から動けば、その身が滅びても、天地が崩れても、びくともせぬ、人間はいかに悲痛の眼に逢つても、行く處までは行かなければならぬといふ面白い活躍を示して居る。メレジコウスキーはこの感情ならざる智に近い思想を *Passionate thought* と名づけて、かういふ境を開いたのは今人の力で、これに由つて新生命が得られるであらうと言つて居る。イブセンの戯曲などは無論これに與るのであらう。

かういふ風であるから、イブセンの戯曲を始めて讀んだ時には、非常に新しいものを一方に感ずると共に、一方に非常に不自然と言ふやうな氣がした。何故ノラはあのやうに落付拂つて夫と別れたであらう。「幽霊」は何故あのやうな悲惨な結果を見るに至つたのであらう。ロスマルスホルムのロスマルは何故あのやうな女とあのやうな道行になつて行つたであらうと思つた。けれどこれが即ちイブセンの烈しい強い處で、一度本性を發展した以上、右顧左盼する餘裕はない、それが即ち眞であると言ふのである。

イブセンは自然派の作家である。自然派の作家であるといふ點から、これをゾラや、ゴンクールや其

他自然派初期の作家の作品に比較して見る必要がある。ゾラは其材料を視察することや、其結構をつとめて自然にするといふことや其他の方法に就いて、無論ロマンチック派の手法と丸で趣を異にしては居るが、其根柢には——後年の作物を除く——イブセンの遣つたやうな主觀的の色は無い。否、勉めて其色を消さうとして居る。ゴンクールも無論其通りで、成べく弱いものは弱いものとして強い者は強い者として、濃いのも淡いのも皆なそのまゝの色を出さうとして居る。どうもイブセンのやうな主觀的の色は出さなかつた。處がモウバツサンになるとそれが全く變つた。今までの純描寫、純客觀では飽足らぬ、自分も自然の一員である、自分を描いて何故自然を示すことが出来ぬといふやうな思想を顯はして來た。露西亞の文學は此以前既にゴンチャロフあたりから自然派の旗幟を示し、ドストエフスキーは既に主觀の色を着けて居つた。即ちイブセンは其の社會戯曲に於てその後自然主義の前驅を爲したと言つて差支なからうと思ふ。

であるからゾラやゴンクールなどの自然派から比べると其人物、其取材、其觀察に、甚だ誇張したところがあるかも知れん。そしてこの誇張の色が象徴的になつた來て居る。「野鴨」の鴨などはことに面白い。「名匠ソルネス」の女主人公なども象徴的人物で鳥渡難かしい。

「名匠ソルネス」と「ロスマルスホルム」と「海の夫人」とはことに自分は傑作と思ふ。「名匠ソルネス」の新時代の人物の爲めに舊時代の人物の壓せられて行く具合など、人の胸を打つことが多い。最後に塔から落ちて死ぬところなど、其思想と其感情とを巧に象徴的にして居ると思ふ。「ロスマルスホルム」は思想と戀愛との衝突を書いたもので、ハウプトマンの「寂き人々」はこの作の感化を非常に受けて居る。ロスマルの細君が身を水に没して死んでから、ロスマルと女主人公と一緒に生活して居るさまなど實によく描いてある。段々其間の戀が高まつて來て、二人の間は思想上の友である、戀ではないと互に押へて居りながら遂に負けて戀となつて死ぬまでの順序が、ハウプトマンの作と比べると、強い點に於て事件と性格の複雑して居る點に於てすぐれて居る。

女性を持ち上げて居ることも、イブセンの戯曲の特色であらう。イブセンの作中には、何れを見ても強い男々しい女性ばかり、佛蘭西や獨逸の戯曲小説に顯はれて居るやうな弱い意氣地の無い女性は一人として無い。又た其の書き方に於ても、女性を見くびつて卑しめて居るやうな傾向が見えぬ。さうかと言つて、敢て殊更に同情を女性に持つて居るのではない、只男性同様の地位に引上げて役を演じさせて居るばかりである。けれど此女性を男性同様の地位に置いて居ると言ふことは、北方女性の實際の狀況から來たので、或は別に不思議はないのかも知れぬ。

西鶴について

西鶴の明治に復活したのは、二十三年頃だと思ふ。淡島寒月氏がこれを愛讀して居つたのを、幸田

露伴、尾崎紅葉の二氏が聞いて、研究し、爾來國文學の復興と共に、西鶴の名は世人に知らるゝに至り、其著書は一目玉鐙のやうなものまで活字本になった。

明治の文壇で、西鶴を愛讀し、西鶴の影響を受けた作家は随分多い。先づ第一に紅葉露伴、この二家を中心にする門下生諸作家、次に一葉女史が最も深い感化を受けた。紅葉山人の伽羅枕、三人妻などの著作は全く西鶴の一代女、一代男などの模倣と言つても差支ない。

紅葉、露伴、一葉と謂へば明治文學史上の大立物である。明治の文壇の作品と思潮とを説くには此三家を除くことは到底出来ぬ。この大立物が悉く西鶴の影響と感化とを被むつたとすれば、西鶴も亦墓場から引張出された甲斐があるといふものだ。

けれど私が感じて居ることは、其時代に傳へられた西鶴は、單に其皮相に留つて居て、その真相は今日まで決して傳へられてないと思ふ。傳へられたものは文章の妙とか、句法の簡勁とか、觀察の奇警とかのみで、其眞意は全く閑却されて居たと思ふ。何故さういふかと言ふに、西鶴の人生に觸れた態度、底のない一種の悟を持つて居た態度、人間性慾の力の大なるを認識して居た態度、心理の描寫を重んじて、勉めて自然ならんとした態度、其生れた元祿時代を出來得る限り活寫しやうとした態度、殊に浮華驕奢なる時代に生れて其時代に反抗的批評を試みた態度——これ等の態度を更に少しも紹介して居らぬからである。もし其時これ等の諸態度を其紹介者が充分呑込んで居たとすれば、其點を論議したことも

あらうし、其作品にも今少し眞摯な影響を受けなければならぬ。

其時代に西鶴と共に近松を紹介した。西鶴を紹介した人が同時に近松をも紹介したやうに記憶して居る。近松は西鶴とは全く趣を異にして居る、態度を異にして居る、觀察を異にして居る、主觀の悟といふやうなものを異にして居る。近松が雪なら西鶴は墨だ。この異つた兩作者を同じ人が紹介したといふことが既に其紹介の無意味を表白して居る。國文學復興といふ一時の潮流に乗じて、盲目的に傳へたものであるといふことが解る。

近松をシエクスピーアに似て居ると言つた。それは思想は似て居る。人情を中心にして居る處などは確かに似て居る。けれど西鶴を沙翁に似て居ると言つた人があつた。これは實に酷い、其無學、無識を表白して居るやうなものだ。

私は其時分——西鶴が始めて復活された時分から其著書を読んで居た。其頃は矢張其時分の諸大家のやうに、文章の妙をたゞへて居た。句法の簡勁に舌を卷いて居た。けれど要するに只それだけで、何故あのやうに性慾を求めて書くかといふことを怪んで居た。そしてそれを、紅葉山人に正したことがあつた。

山人が其時曰ふのには、あれは鶴の弱點だ。好奇心に任せて、唯あゝいふ風に書いたのであらうが、あれがある爲め、其價值が餘程下る、と、かう言つた。私は成程左様かと思つて居た。其後、私は西鶴

の著書を久しく讀まなかつた。それから何でも三十四五年頃だと思ふ、少し歐洲大陸の文學を研究する氣になつて、種々の自然派の作品を讀んだ。モウバツサンの短篇集を讀んで居ると、不圖、西鶴のことを考へ出した。何うもモウバツサンの作意が文章こそ違ふが、誰かに似て居る、誰だらうと考へたら、それは西鶴であると思ひ附いた。それから西鶴全集を出して又讀んで見た。なるほど似て居る。性慾に一種の悟を持つて居る處、實際を鍍せず書いて居る處、反抗的批評的態度を持つて居る處、似てる。非常に似てると思つた。そしてこれを近松の作意と態度とに比べて見た。近松の作意は人情中心で、主觀的で、作者の同情が鼻につく程出て居る。心中を寫すにしても、其の態度が千篇一律で、其刹那に於ける心理的などころなどは丸で閑却してある。西鶴と比べると、大變な相違だと思つた。で、私は大陸文學で言ふ舊派と新派といふことに就いて大に考へた。獨逸のハイゼやケルレルが事實を人生に取りながら、それを作するに當つて一種主觀の色を加へる態度とハウプトマンやブライブトロオやトフォオテが人生の事實を人生の事實として書くといふ態度とを比較して得る處が尠くなかつた。それからゲエテのエルテルなどに就いても考へた。あれはゲエテが實際の事實を材料にして書いたものであるが、今の自然派の作者ならば、あゝ色彩多く、誇張多く、結構を構へて、ロマンチック風に書きはしまいと思つた。それからゲエテの自傳を讀んだ時のことを思ひ出して、その誇張と修飾とに厭氣がさした。成程、新派舊派の別はかういふ處にあるのだ。西鶴と近松との態度の相違、これにも其意味があると思つた。勿論、

西鶴にも時代の影響の爲めに、強ひて作つたやうな處は無いではない。それから戀を書くにしても、若い時の戀と中年の戀と晩年の戀とを分明書き分けて居るやうな新しい處はない。けれど西鶴をして佛國に生れしめたなら、無論、モウバツサンの地位に居るに相違ないと思つた。そしてふとまた曲亭馬琴が西鶴について言つた批評——西鶴には結構なければ小説家にあらず——を思出して、微笑せずには居られなかつた。成程、馬琴のやうな結構と作意とを主にした作者から見たら、さう見えるに相違ない。面白いことだ。

紅葉山人が言つた言葉——好奇心で西鶴が性慾を書いたといふ言葉もまた胸に上つた。そして西鶴が墓場の蔭から其無意味を笑つて居るだらうと思ふと、徒らに文章の妙をたゞへた昔が耻しくなつた。

性慾は人生で最も共通のものであるから、西鶴の好色本が其全集に異彩を放つて居るのは、言ふまでもないが、西鶴は單に色慾を書くのを目的として居たのではなく、それより寧ろ元祿の時代を活寫しやうとしたらしい。日本の文學家の中で、西鶴ほど其時代を精寫して居るものはない。西鶴物が當時の風俗人情を知るに適するといふ意味で歴史家に重要視されて居るのも、其文辭中に其時代の細かい描寫があつて、讀むのに難かしいのも皆なその爲めである。我國唯一の古典、源氏物語なども、其點に於ては、西鶴物に及ばぬこと遠い。馬琴などが其一生中に西鶴に十倍する文章を綴りながら、其時代の些の面影を傳ふことが出來ず、纔かに武士道と謂つたやうな抽象した觀念を傳ふるに留つたのは、寧ろ憫笑す

るに足れりと言つて好い。

(咄! 結構が無いから小説家でないさうだ。)

西鶴は讀めば讀むほど、其觀察力の鋭いのに敬服する。何うしてまアかう其時代のこと精通して居たかと思はれる位だ。西鶴の傳記については墓が大阪の誓願寺に残つて居るばかり、詳細は知ることが出来ぬが、思ふに餘程洒脱で、細心で、経験すべきことは進んで経験した人に相違ない。そして一面元祿時代の驕奢な社會に興味を多く持つて居たと共に、その弱點をもよく知つて、これを批評しようといふやうな考へがあつたらしい。モウバッサンの著作の背景になつて居る其の主觀の態度と西鶴の主觀の態度とを比べて見ると、其處にいくらかの相違がある。西鶴は其呼吸した空氣が日本のロマンチックの空氣であり、浮華な時代の子であるから、中にはいくらか輕快洒脱に過ぎて輕薄に陥つたやうな處は無いではない。又、結構もないのに、強ひて結構らしく見せやうとしたところはある。けれど要するに小疵であつて、其眞なる性格は没せられぬ。

『日本永代藏』『本朝二十不孝』『胸算用』などにも、すぐれた短篇が多い。永代藏中の『二代目に破れ扇の風』などは殊に好い。吝嗇なる主人公が親の墓參りの歸りに一步三百の錢を拾ひて、それを島原の花川といふ遊女に渡さんと思ひて、訪ひ行きて、いつの間にか墮落する心理の道行、自然にて面白い。モウバッサンの短篇中を捜さばこれに似たるものがあらうと思はる。

『本朝二十不孝』は其着眼が既に面白い。獨逸のフォルケルトの言つた言葉に、『今の新派の詩人の群は、皆道德上に人を叫び醒まし、搖り起し、又威し懲さではならぬやうになつた。趣向を立て、人物事蹟を弄び、高き理想の影に低き實世の影を寫して、微笑みつゝ指し示すことなどは今人の輕んじ侮るところとなつて了つた。今の詩人は現社會の中から卑怯にして自からは是とする状や、陽に慈にして陰に忍べる様や、無思想の状や、腐敗の状やを抜き出してこれを寫し、讀者をして憤慨し、慨嘆し、古來依頼する所の制裁の頼むべからざるを悟り、別に清淨なる人道を求むるの念を起さしめなければ承知せぬ。』といふことがある。『本朝二十不孝』は尠くとも今の歐洲詩人の目的として居る處に似通つた點がある。私は思ふ。當時の讀者も必ず『二十不孝』を讀んで、フォルケルトが今の詩人に對して起したやうな感起したであらうと思ふ。篇中收むるところは、多くは是れ不徳敗倫、人間の陋劣なる状態、墮落の状態、無慈悲の状態、陰忍残酷等の状態を描いてゐる。今の泰西の詩人に比べると、道德上に人を呼び醒ますといふ點が少し明瞭に過ぎて居るが、それでも佳作に富んで居て、今の西洋の自然派の短篇を讀むやうな氣がすることは争はれぬ。『跡の剝けたる嫁入長持』『娘盛の散櫻』『旅行の暮の僧にて候』など殊に傑作である。

馬琴の稗史亡び、近松の人情物すたれ、一九、三馬の滑稽物は顧る者の無い今の時に當つて、西鶴の作品に、自然派の面影を發見するのは、意味の深いことでは無いであらうか。西鶴は日本のモウバッサ

ンだとは断言しないが、モウバツサンの短篇集に得た同じ感を西鶴の短篇に味ふことが出来るとは言つて置く。

『耽溺』と『一夜』と『強者』

新年になつてから『耽溺』と『一夜』と『強者』とを田舎に行く汽車の中で讀んだ。『耽溺』は餘程骨折つて書いてある。文章などは流石に及び難いところがあつた。けれどこれを讀んで、作者のいつもの缺點——只巧に書き表したといふだけで、他に何等の意味を發見することの出来ないのを口惜しく感じた。作者は自から耽溺だと謂つて居るけれど、實は耽溺ではないかと考へて見た。近代人の所謂耽溺は今少し捨身な處、皮肉な處、反抗な處がある。唯、酒と女とに沈湎してることではないと思ふ。けれどそれは一朝一夕に干ぬ議論だから止めるとして、態度の上から見て客觀の足りぬのが一番の缺點だ。客觀して自己を描いた積りで居ても、餘り深く客觀されて居ないのが此作及び此作者の常の缺點である。

見出す作家、見出さぬ作家、この二つに分けて作家を觀察して見たことがある。また、ペインター、サイコロジストの二種に分けて考へて見たことがある。見出す作家は説明と抒情と小主觀に陥る弊がある。見出さない作家は平凡と無意味と惡寫生に捉はれる弊がある。ペインターは描寫に委曲を盡し、筆に

一種の體と型とを有し、叙事抒情に多く長けて居るが、心理には兎角その筆が觸れることが出来ない。フランスでいふと、ドオデエだのロチだのフランスだの皆なさうだ。サイコロジストになると、描寫叙述などに餘り重きを置いて居ない。先に心理をつかむ。性格を了解する。日本でいふと、國木田君などにさうした處がある。正宗君もさういふ方の質の人だと思ふ。西洋で言ふと、モウバツサンがさうだ。チエホフがさうだ。ツルゲネーフはサイコロジストにペインターを兼ねた處がある。フロオベルになると、流石に一代の天才、此兩面を兼ねてまことに及び難い。

風葉君はペインターだ。何うしてもサイコロジストではない。また見出す作家よりも見出さない作家に屬して居る。『青春』を見てもすぐ解るが、性格を了解し心理をつかむことはごく下手だ。心理になると、筆端が甚しく窘束されて了ふ。また、『青春』の中心に何も無いことは誰れも知つて居る。風葉君の長所は寧ろ叙述にある。

『一夜』は『壁』『收穫』などと連続して、作者の近時の傾向を窺ふことが出来る。象徴的な處を覘つて居ると『壁』が出た時世間では言つた。自分は『壁』ではさうは思はなかつたが、『收穫』から『一夜』に至つて、成程さうした傾向かと點頭かれた。

象徴的傾向は内部の苦悶から入るロシア式と、藝術上の考へから入つて行くフランス式とがある。ロシア式は作者が別に象徴しやうと思はぬのに、いつか作品がさうなつて居る。フランス式は作者が意識

してわざとさういふ色を着ける。誇張しないでも好いのに誇張したり何かする。『一夜』は今少しロシア式であつたら猶好かつたと思つた。女の性格などは書き足らぬのでなくて、わざと作者があゝいふ風に書いたのだらうが、何うも其邊がちと物足らぬやうな氣がした。わざとほんやりと浮かしたやうにした處が、作者苦心の存する處かも知れぬが、その苦心が却つて不結果を來して居はしないかと思はれる。

西洋の小説は象徴主義に入つて、餘程窮した形がある。平凡、冗漫に倦きたのは好いが、もとの憧憬に立戻つたやうな處があるのは厭だ。フランスに自然主義以後の反動が起つて、大分さうした試をやつた人が少くないやうだが、其結果は自然主義の齎らしたやうな大きな効果ではなかつた。ブルジエにしる、バザンにしる、バレスにしる、フロオベル、ゾラ、ツルゲネーフ、モウバツサンに比べると、末流文壇と謂はれても仕方がない。バレスの抒情的個人的象徴主義も憐むべきものであるし、ブルジエの心理解剖や道徳を題にした長い小説もダルな冗漫な光彩のない作物だ。誰だつたか忘れたが、モウバツサンやゾラばかりを日本文壇に紹介するのは本流を捨て、支流を傳へるやうなものだと謂つた。成程ユーゴーあたりから系統的に見て來たならさうかも知れない。けれど自分はさうは思はない。ロマンチズムも、ナチュラリズムも文藝上の主義であつて、何うでも作品が好くさへあれば好いといふ人には賛成が出來かねる。ナチュラリズムは支流どころか近代文藝のメインカレントである。

象徴といふこと、神秘といふことは餘程難かしいことだ。明治の文壇が象徴に入るにしても、フランスの末流文壇の二の舞をしたくはないと思ふ。『一夜』を讀んで、こんなことが胸に浮んだ。

『强者』は强者でなくつて弱者を書いたものだ。强者の假面を被つた弱者だ。こゝに作者の面目を自分認めた。『春』に出たやうなセンチメンタリズムからかうした青年を産むやうに至つた日本の思想界を何となく面白く感じた。

弱者だから壓迫を感じる人が多い。自然力に對して號泣したり反抗したり悲憤したりする。自覺しては、前世紀の人々のやうに成たけその壓迫をソツとしてごまかして置くことが出來ない。實行者の群に入つて狂奔することが出來ない。此處に冷笑が起る、反抗が起る、否定が起る。それが一つになつて傍觀的皮肉となる。

正宗君の作品に新しい處があるとすれば、さうした意味での新しさである。センチメンタリズムの一變した弱者の青年の叫び聲である。正宗君に、情味が無いとか、戀をしたことが無いからあゝだとか、いろんなことを言ふ人があるが、あれは大間違の真中だ。

自分は正宗君の一昨年から昨年にわたる傾向を黙つて見て居た。單に弱者の青年の叫び聲では自分には物足らない。小さな弱者の反抗では更に物足らない。處が、果然一轉化をした。『新藥師寺』『明日』『閑日

月』これ等はもう單に弱者の反抗ではない。センチメンタリズムの變形ではない。其處にまことの自然主義の大きな流を見た。

けれどもこの流は急ではないが、汪洋として彼岸が見えない位だ。正宗君が何うこれに乗切るかは今後の見物だ。

水野葉舟君に新味のあるのは僕も知つてゐる。けれど正宗君のやうに中心が動いて居ないやうに自分は思ふ。まだ反抗否定以前ではないかと思ふ。いや或はロマンチストぢやないかと思ふこともある。今の新代の青年の心持を描いたが爲めばかりで、その作が新しく見えるのでは心細い。自然主義の根本は態度にあるのだ。單に描寫ばかりではない。

昨年の批評壇では描寫といふことが非常に言はれた。描寫の進歩をのみたゝへた人もある。けれど實際昨年の創作界を見渡して、描寫が進んだ上に更に何物か、無かつたゝらうか。作者の側から言ふと決してさうではなかつた。單に描寫の進歩のみではないと思ふ。

寫生文一點張の高濱君も描寫一方では駄目だといふことに眼を着けて來たらしい。今年のホト、ギスに出た『三疊と四疊半』は佳作である。けれど矢張まだ態度が振つて居ない。日本在來の型で、低徊趣味だ。『明日』の平淡で意味があるのとは甚だ違ふ。

しかし繰返していふ。『強者』は單に弱者の青年の叫び聲であつた。

フランスとロシア

自然主義といふことに就いて、フランスとロシアとの相違を考へて見るのは、意味の多いことだ。フランスでは自然主義が藝術上の主張として始めて顯はれた丈あつて、總て學問的である。ロシアはそれに引かへて飽まで實行的である。誰だか忘れたが、ロシアにはゾラがフランスで其主張を述べた以前から寫實主義自然主義があつたと謂つた。實際さうだ。ロシア文學は、社會の組織上文藝と實際との密接な關係から、實際的材料が常に作者にも讀者にも重んぜられて居た。處が、フランスは社會狀態から作者を促して其處に至らしめたといふよりも、文學上から作者が其方面に進んだといふ形である。従つてフランスには餘裕がある。學問として、自然主義が研究されてある。

實行上と藝術上と自然主義に區別はないといふ説が大分多いやうだ。例としてロシアの文藝がよく引き合ひに出される。トルストイなどは確かにさうした處がある。けれど自分は實行上の自然主義といふものは意味を成さぬと思ふ。自然主義の傍觀的態度は既に始めから藝術的學問的である。また自然主義はさうした處にそのまことの意義を有して居るのである。その餘所に外れて冷かに見るといふ處から基礎が發して居るのである。巴渦の中に熱中して居るやうな態度は自然主義の態度でない。

實行と藝術

實行上自然主義と藝術上自然主義とに就いて、大分前號の『評論の評論』が物議を醸したやうだ。けれどもこれは難かしい問題だ。それを追究すると、例の『己は己、君は君、勝手にさう考へてゐるより他仕方がない』といふことになる。現に、さうした議論を口でも随分詳しく遣つて見たことがあつたが矢張駄目だつた。抱月君は流石學者だけに、其問題に就いて随分細かな處まで入つて、可也よく分析して居たやうだが、それでも大分誤解されて、其本當の趣旨は酌取られなかつたやうに私は思つた。

空氣とか心持とか此頃はよく言ふ。その空氣とか心持とかとは口では鳥渡言へない。言ひ顯はされない。この議論は鳥渡さうした風だ。藝術と實行とに分けたらと謂つて、誰が實行を基礎にせず居るものがあるものか。實際に觸れないで、實際の生々した事實に觸れないで、何うして自然主義などいふことが考へられるものか。無論、實際より得來つたストルムウンドドラングである。私の前に言つたのは、只單に文藝の上で言つたばかりだ。西洋でもナチュラリズムといふ字は箇人主義とか虚無主義とかいふ所謂實行上の主義とは全く區別されて使はれてあつて、文藝上の意味なしに單に實行上のみ使用されたといふ例を餘り多く聞かない。いや全く聞かないと言つて好い。

つまり言はずとも解つたこと、虚無、箇人、社會、其他種々雜多の現代思想が文藝に入り來る處にナチュラリズムといふ字が生じて來たのである。だから作者の實際上の苦闘暗闘は無論必要、苦闘暗闘が多ければ多いだけ、暗い辛い經驗に自己が堪へ得られれば得らる、だけ、其文藝上の作品は深い價值と深い意味を持つて來るのは當前である。だから私はその實際上實行上の苦闘暗闘を無意味だなどと言つたのでは無論ない。私の言つてるのは其處ぢやない。此間何かで讀んだが、フロオベルもモウバツサンも自分の實行上のことは人にも言はず、書いたものも残さず、フロオベルの書簡集を後人が公にしたのをすらモウバツサンが、先師を羞しめたものだと言つたさうだ。面白いと私は思つた。文藝に入つては、實際を言ふ必要はない。作者は自己のことを書いて居ても、それは歴史家が傳記を書くのとは全く違ふのだから、そんなことば吹聴するのも間違つて居るし、穿鑿するのも間違つて居る。

だから、私を例にして見ても、實行上私が何んなことをするか、それを私の作品を讀むものが、兎や角言ふ必要がないのである。私はよくある人がある人を評するのを聞くことがある。『あいつはまだ習俗を脱しない』『あいつはまだ臆病だ』『あいつはまだ實行上回顧していけない』これが其人の作品の上での評言ならば、私はそれは勝手にさういふのに任して置いてもいいが、作品から其人の實行上のことを推してさう言ふのなら私にも大分異見がある。

作者と作品との即不即、離不離。これにもさうした細かい關係が常に附いて廻る。實行と文藝(作者)と即いて居る作者の作品は其度數が加はれば加はるほど其作品は主觀になる。實行と文藝と離れて居る作

者の作品は、其度数が加はれば加はるほど其作品は客観になる。そして主観の増盛も客観の増盛も其極に達すると遂に文藝を離れて了ふ。

小主観と言ひ、誇張と言ひ、月並といふ。それは皆なその主客観の増盛の極、無價値に達した文藝の弊を言つてゐることであつて、この間に無限の度数が常に上つたり下つたりして、作者の態度ともなり批評家の態度ともなつてゐるのだ。

メ ツ キ

昔の學問は其度数の中心を求めて、抽象的の標準を拵へ、今の學問は箇々の度数を度数として其處に敢て標準を置かないやうにした。そしてこの無限の度数が無限の作者の本體と相聯關する。従つて實行と文藝との問題が起る。此點は抱月君が詳しく説いて居たと思ふ。私は多く言はぬ。

眞とは何ぞや。眞を描くとは何ぞや。この問題も近頃大分見懸ける。私は別にむづかしい意味でなく、簡単に私の考へて居ることを言つて見る。

偏僻奇怪、——自然にも随分不自然があり、眞にも随分不眞があるとかういふ人がある。紅葉山人が、『事實ならざることも事實らしければ取つて材とせよ。事實なることも事實らしからざれば捨てよ。』と言つたことを私は一昨年文章世界の文章講壇の中で書いた。つまり此議論だ。選擇論、鍍論だ。私は

これには反對だ。

事實であれば、どんな偏僻な奇怪な人物でも事件でも考へなければならぬ。研究して見なければならぬと思ふ。事實を経験して不自然だと思ふことはそれはよくある。けれど考へて見ると、それは多くは不自然でない不眞でないといふことを發見する。経験を充分に胸をひらいて容れる餘裕があればあるほど其不自然が不自然でなくなる。つまり自然は何物をも容れる。

鍍論をやる人は、純客観描寫が不可能だといふ議論を持したり何かする。又可能にしても、純客観描寫を寫眞と同じやうにいふ。かういふ人は屹度唯物と唯心とを分け、主我と主物とを分けて見る。純客観描寫と謂つたつて、何も單に寫生のことではない。作者の心が基礎にならぬ作品は誰にだつて無い。自然主義以前と以後とは、唯其作者の心の持方、眼の見方が違ふといふだけだ。ゾラは純客観の張本人だ。けれどゾラの小説の寫眞でないことは言はずとも知れて居る。

其心の持方、眼の見方、——それが實際上のことや道德上のことや審美上の意見や、さういふことに支配されて、其一部乃至全部が曇らないやうになつて欲しいといふことである。だから自然主義の作者は趣味などといふことにも、その捉へられるのを恐れて重きを置いて居ないのだ。

昔の文藝だつて、それは矢張自然をお手本にして居た。理想派だつて多くはさうだ。全く自然を手本にしない文學などはいくら荒唐無稽の世にも好い文學としては存在してゐない。けれど實際上、道德

上、審美上個人の好尚趣味などに支配されて、小さな主観で選擇を遣つて、鍍をした。従つて自然でなく、自然の一部分の『美の表現』だけを目的とした。だから道徳や審美學や趣味などに支配されて、それを最上だと信じて居た人には満足されたが、段々實際に觸れて來た時代の人間にはさうした物では駄目になつて來た。迫實といふ事は此處から起つた。事實經驗に重きを置くといふ事は此處から始まつた。だから、私の事實全眞は消極的ではなく積極的である。何んな奇怪な不自然なことでも實際事實ならそれで好い。選擇を遣つたり鍍をやつたりすると以前の文學に後戻をすることになる。

だから讀者に呑込めないやうな事實を書くにしても鍍を遣らぬ。何うかして呑込めるやうに工夫して書いて見る。その書き顯はす工夫が技巧といふならそれは承認する。誰だつたか國木田君の『運命論者』や『酒中日記』を不自然だと言つたことがあるが、私はさうは思はぬ、矢張自然だと思つてゐる。また誰だつたか『運命論者』を『其不自然なことを自然らしく書いたのが筆の力だ』と言つて賞めたのを私は記憶してゐるが、それも私は違ふ。『運命論者』は『不自然に思はれることも事實であるが爲めに書け』といふ獨歩の平生の意見を充分に顯はしてゐるのだ。私には今の芝居は少しも興味を惹かない。いや劇と謂ふものは私の頭脳には入らないのかも知れない。イブセンなども其曲中人物の生々とした處と自己の經驗によつて書いたらしい處は好きだが、その形式とコンポジションは大嫌ひだ。つまりエフエクトを強くする爲めに臺詞を結晶的にしたり、意味を誇張したりする處が厭だ。

個性と類性

個性と類性——作者が人物を取扱ふ時に當つて、作者の嗜好趣味乃至同情が加はれば加はるだけ、其人物の深い複雑した個性が出なくなる。人生に對する作者の理想（實行者が多く抱いて居るやうな、社會がかうありたいとか自分がかうありたいとかいふ）が加はれば加はるだけ、一層描寫の目的が達せられなくなる。藝術家と實行者との相違が此處に横はつて居る。哲學上の議論と文學上の議論との相違も此處にある。哲學とか社會學とかいふ方面から文藝を論ずるものゝ多く肯綮を得ぬのも此の爲であらう。

近松と西鶴の論を徳田秋江君が『現代』でして居る。氏は西鶴と近松とを比べて、前者は人間の殉私性を顯はし、後者は人間の殉他性を顯はすといひ、それから續いて、近松を道學者だと言つた小山内氏の説に不同意を表して居るが、何故に『西鶴に於て最も多く自己を發見し、本能慾の跳梁、信仰の蔑視を認める』かといふことに就いては、多く言ひ及んで居ない。唯ブレークの古臭い言葉を引いて、『天才は常にその時代の上に居る』などと言つて居る。私は今少し細かく解剖して見たい。近松は何故當時の理想的道徳たる武士道、儒道、町人道をのみ描いたであらうか。何故義理人情の美といふものゝみに心を傾けたであらうか。何故西鶴のやうに個性の細微、本能の複雑なる發展に入らなかつたらうか。單に天才は其時代の上に居る爲めだらうか。西鶴の主観が近松の主観に比べて、實行者的（道學者的）であつた爲

ではないだらうか。近松には實際社會の爲めといふやうな處があり、少くとも實生活の中からさういふ材料を選んだといふ自己の趣味から出た傾きがあり、西鶴にはそれがなかつた爲ではなからうか。近松は自己の嗜好理想に捉へられて、充分なる客観化を行ふことが出来なかつた爲ではなからうか。『耽溺』『枝』が有りのまゝを書いたのは事實であらう。然し私は、『事實を書くといふことに就いても私などの考と甚だ違つてゐるのを發見した』と言つたのは、つまり此客観化の不完全を言つたのである。作者の實際の利害（實行者的）などに累はされて、充分其の個性を出すことが出来なかつたことを言つたのである。近松が西鶴に比して、同じ時代に生れ、同じ空気を吸ひ同じ人物を見ながら、今日から見ると餘り深く其時代と其人間とを描いて居ず、何だか附焼刃のやうな氣がするのと同じである。私の考では此心持、即ち充分なる客観化といふことは、自然主義の全部を蔽ふほどの非常な大切なことであつて、此處が即ち自然主義以前の文學と第一に違ふ所であると思ふ。

ゾラが極端な自然主義を主張した時、其先輩を矢張さういふ意味で攻撃した。ありのまゝの事實と謂つても、底の底まで客観化を行つたものでなければ、それは事實とは謂はれない。メリメ、フィイエなどは何方かと言へばモデレートな寫實主義である。矢張社會の事實を基礎にして多くの小説を書いた。けれど道德問題や實行問題に支配されるやうな哀むべき『事實ありのまゝ』では駄目だ。充分なる客観化が無くては駄目だ。充分なる客観化には作者の充分なる主觀の修養が必要なことは前に既に言つた。

『天の網島のおさんが夫治兵衛に對して盡したる貞節は、元祿の女房氣質の偽らざる精神にして同時に徳川時代の道德の精神に他ならず候。かれ等が實世間の矛盾に際して屢々口にする「世間の義理は缺かさねぬ」といふは、かれ等の時代を支配したる道德の精神に他ならず候。かれ等は此道德の故を以て違背すべからざる違背と信じたり。近松もまた此意味に於て自然界に生起せる事實をありのまゝに描きたるものに候。』と、かう秋江君は言つて居る。成程近松の主觀では、それに違ひあるまい。けれど近松は義理人情、乃至、實行的同情に即して、本能のあることを忘れた。天才は時代の上に超越して居ると言ふやうなことは私は言はぬが、本能は少くとも一時代を限るものではない。人間の始めから最後まで無限の活動をつゞけて居る。近松はおさんを描くに當つて、此の本能を描くことを屑しとしなかつた。従つておさんそのもの、ありのまゝの事實を描いたとは謂はれない。要するに近松の道學者的詩眼に映つた元祿社會の一女性（類型に近い）である。本能を剔抉して物とも思はなかつた西鶴の主觀の眼とは餘程趣が違ふ。

現代作家の苦悶

實行が全力的であるだけそれだけ、觀照が難かしくなる。實行と觀照とを同時にしてゐることは殆ど不可能のことであつて、人間業では出来ない。だから、何うしても觀照は實行の手を留めて、回顧的に

ならなければならぬ。かういふ意味を抱月君が讀賣の日曜附録で言はれた。これは確かにさうであるが、私は其實行と觀照との距離に就いて考へて見た。距離が遠くなればなるほど、藝術は生氣を失つて來ないかと思つた。私は成だけこの距離の近い處に居たいものだと思ふ。

此距離の近い處に、まことの意味のアナライズといふことがある。現代作家の苦悶は此の苦悶である。

ブルジェエの『弟子』

ブルジェエの『弟子』といふ作に、この心的分析を實行した一青年の苦悶史が書いてあつた。全力を擧げて、戀の巴渦に身を投じて置きながら、心理研究のスコラーとして、かれは其戀の發展して行く心理状態を詳しくノートに書きつけた。或る時は、試験的な會話を女に試みて、戀の心理状態のいかなる反應作用を起すかを見ようとしたことすらあつた。流石はフランスだけに、青年にもさうしたものが多く見える。この作の目的は、かゝる青年の弊を書いたもので、人間は到底アナリスチックな状態にばかり生きて居ることが出来るものでない。最後は要するに神祕だといふ趣旨が明かに見えるが、私はそれには感心しない。けれど其青年はよく描けて居た。

その中に、「Indifference of Nature」といふことを言つて居る。つまり自然は空虚だ、背景は冷々淡淡だといふ思想である。今、此處に蛇が叢から出たとする。折あしく其處に兒童が二三人居た。蛇は殺された。蛇には殺されたことは大事件であるが、實は唯折あしく頑童が居たゞけで殺されたので、自然には何の影響もない。何の動搖もない。人間だつて矢張その通りだ。理想が何うの、運命が何うの、死が何うの、同情が何うのと喧しいことを言ふが、要するに自然にはそんなことはなんでもない、自然は平氣である。「Indifference of Nature」。

實行のすぐそばまで行つて、それをアナライズして居る心！ 普通の人間から見たら、これほど冷酷なことはあるまい。女の兄の武官（普通人の好模型）がこの態度に奮激して、不眞面目なる行爲としてこれに拳銃を向けたのは、理由あることである。私はこれを讀んで、モデル問題などのことも考へて見た。

事件の筋

事件の筋と言ふものを考へて見た。小説に於ても、十年前と今とでは筋といふ意味が甚しく違つて來た。筋が人生にあるところの實際の筋と近寄つて來た。昔の小説は筋が小さい結構と淺露なる思索とに由つて組立てられたが爲めに、賢明なる讀者に逢ふと、忽ち其内容を看破されて了つたが、今はその恐れがない。ロシアの作家の群の中には、作者の描いた筋よりも内容の自然に發達して行く事件の進行に興味を持つて讀まれるやうな作家もあるさうだが、日本でも段々さういふことになると思ふ。筋を重ん

じた時代には却つて立派な筋が出来ず、筋を捨て去つたところに却つて自然な複雑した筋が出た。人生は箇々の對立ではあるが、また一面に於ては箇々の争闘と融和とである。自然派の作家が境遇を重んじて性格描寫を其中に没し去つたのも意味があると思ふ。單なる性格、單なる概念めいた事件を描くことを屑しとしなかつたのも意味があると思ふ。

素 材

素材が桐たり杉たり朴の木たるに由つて其作品に別あるは論がない。又價値的高下があると言つても或は好いかも知れぬ。けれども桐はわが好むところにあらずといふ理由を以て——むしろ其箇人の經驗修養が偶々その桐の美所妙所を解するに適せざるが爲めに、其作品を排し或は其素材をすら嫌ふものがあつたら、それは甚だ不合理なこと、言はなければならぬ。

私共は敢て素材の如何を問はないとは言はない。すぐれた素材を用ゐた傑品は傑品たるに於て一層の光彩を有するは勿論である。けれど素材のみに由つて、其作品の價値を判断するほど幼稚であつてはならぬ。

字 義 の 解 釋

論議をするに當つて、字義の解釋の一致しないほど不便で不利益なことはあるまい。時としては同じ意見を反對のやうに思はせることがあり、又時としては其燒點が益々遠ざかつて、目的が遂に達せられずに終ることがある。

分 析

此頃の天氣は鬱陶しくつて、何だか氣ばかり苛々する。物を考へる張合もなければ、物を書く心持にもなれない。雨が無限に降つて晴れる時がないやうな氣がする。天の底が抜けたなどよく子供の頃は言つたものである。机に向つて居ると、梧桐の大きな葉から雨滴がポタポタ落ちて、軒には小雨が絲のやうに降つて居る。

實行と觀照といふ問題は面白い問題だ。『即かす離れず』とか『即かんが爲めの離れ』とか兎角禪坊主の言ひさうなことを言はなければならぬほど有機的にこの問題は互に觸れ合つて居る。『それは實行的で藝術的でない』とか、『さういふのは藝術の爲めの藝術だ』とか言ふのは、或は其人の實行的に傾き藝術的に傾いた其折々の顯はれに對して言ふのであつて、苟くも藝術家ならば、箇人にして既に此の兩面を備へ

て居るのである。寧ろ肉體精神共にさうした機能を具備して居るのである。

私共は何うかすると、藝術家の不眞面目といふことを考へることがある。世の中の人のやうに實行に熱心して活動して行かれぬのを情なく感ずることがある。分析に分析を重ね、觀照に觀照を重ねて、一行爲一動作にも其の冷かな分析が加はらぬことはない。分析が加はれば加はるだけ、其事業と物體との眞相は明かになるが、またそれだけ世の中の人の無意識状態が受ける十分なる受用を受け入れることが出来ない。勿論、本能はさうした分析などといふものよりも大きく且つ有力であるから、さうは言ひながら、矢張其勢力は離れることが出来ずにそれ相應の受用を受けては居るが、しかし意識状態と無意識状態とは、其受け方に於て甚しく違つて来る。

分析に分析を重ねて——つまり意識状態に居て、そして無意識状態より受ける盲目的威力を恣にする力！ その力に常に接觸するを得れば、藝術家は至幸である。しかしこれは大抵あだなる望みに終る。

バザンの小説

バザンの田園小説を二三冊讀んだ。描寫などに稍々新しい匂ひのする處がないでもないが、何うも全體の上の感じは餘りよくなかつた。"This, my son" など親と子といふ深い關係を材料にして居りながら、其中心にはねつから觸れたところはなく、其親に背いて巴里に出た息子の末路なども、作者に豫

め成心があつて、さうした運命を得させたやうな氣がした。殊に息子の戀に就ての描寫が淺薄で、いかにも斧鑿の痕が歴々と見え透いて居るのは拙いと思ふ。それに、強いて誇大な事件をつくり出すのが、一番厭である。

國木田獨歩

僕は明治二十九年の十一月、澁谷の渠の寓で始めて獨歩と逢つた。僕自らの知つて居る獨歩は此時以後の獨歩である、日光では同じ寺の一室を借りて、二人一緒に半僧生活をした。二十九年以前の獨歩は遺稿出版に就て今度始めて見た『欺かざるの記』(二十六年より二十九年に至る)に依て僅かに窺ひ得るのである。

さて僕の始めて逢つた時の獨歩、引續いて日光に棲遅した頃の獨歩は、年齢は僕と同じ二六七であつたが、餘程ませて居た。其頃の僕と云ふものは至極センチメンタルで、偏へに夢ばかり見る、空想國の住民であつたが、獨歩は既に一たびは妻を持つて、しかも其妻と別れたと云ふやうな痛切な經驗から、社會とか異性とかに對する思想感情が、偏しては居つたらうが、至極冷靜であつた。僕はもう極端に色色な事を思ひ詰めては、其揚句が、死にたいと云つて居た。すると獨歩は『死にたか死ね！』と云つた。死にたか死ね、斯う云ふ調子は獨歩の生涯を通じてある特色であるが、此時の獨歩は藝術家であ

つてまた實行家であつたと思ふ。茲に藝術家と云ふのは今の僕等が云ふ意味の藝術家で、言葉を換へて云はゞ人生の従軍記者傍觀者と云ふ態度で行く人を指すので、實行家は云ふまでもなく實世間の奮闘者である。

『欺かざるの記』に現はれたる獨歩、即ちまだ僕と逢はぬ前の獨歩は立派な實行家であつたと思はれる。實行家もそれに瞑想の色を加へた宗教家である。人生を離れずに人生に頭を突込んで、なほ深く、自然と人生の干繋を窮めやうとまでつとめた。つまり結婚前の獨歩の内部生活は、たとへ空想に流るゝとしてもそれは藝術家としてゝなくて實行家としての空想や瞑想であつた。だから突き詰めた姿がある、熱がある、力がある。客觀的でなくて主觀的であつた。それは作品の内にも其頃の心狀を寫したと思はれるのがあるが、つまり、一種のクリスチアンライフを送り來つたもので、靈と肉との對立を感じて、其相剋するに堪へなかつたやうである。自分の前後左右、また自分自身の内にも惡魔が居る、是非之れに打勝たねばならぬと云ふやうに考へて居たらしい。無論始めは酒も飲まなかつた。然るに前述の通り日光時代は既に、單なる實行家ではなかつた。戀愛や生活の様々な經驗は渠をして失望せしめた。社會は冷酷である、女の胸中には十露盤がある、其所へ夢中になつて頭を突込んでるのは馬鹿だ、と云ふ風に冷かに離れて他を批評すると同時に自分自らをも是非する程の、僕等の所謂藝術家の態度になつて居た。それからと云つて然し純然たる藝術家ではなかつた。矢張刻々に移る内部生活はた外界の境遇事

情と戦ひ行く實行家でもあつた。

さて茲に實行家としての獨歩を論ずる場合となつた。獨歩の特色はすべての人に對し物に對してまづ自家の真情直情を推す。所謂習俗や道徳には累はされまいとした。誠に負け嫌ひの男であつた。それでは努力精進を説いたにも拘らず、實際に於ては、さしてあがいたり、もがいたりはせなんだ。逆境、これも事實ぢやないか、不幸、それも自然ではないか、人間の果敢ない努力で反抗した所で何になると斯う諦めたやうな態度があつた。所詮、其頃の獨歩の實行家と云ふも、藝術家と緬へ交ぜになつた實行家で、生を欲し死を恐るゝ、實行家ではありながら、一種の運命論者としての實行家であつた。故に聊か沈痛の趣を缺いて居た。

如何に飛んだり跳ねたりした所で、人は到底此大自然の寰外に脱する事は出來ないではないか、人が人として生きる事を考へたと何の價值がある、此大自然の一點として人間を考へるでなければ空論である。と云ふのが渠の運命觀の大要である。渠の集に『運命』があり、作に『運命論者』があると云ふ事は、自畫自讚の最も適當なるものと思はれる。

さてまた渠の運命觀と渠の所謂大自然とは、一が他を豫表し、他が一を含んで居る。渠の佐伯時代の自然觀、遡つては山口時代の、その少年の頃の自然觀は、極めてナイーヴな、山と、水と、空の色と、總て目に見ゆる自然を美しとし、もしくは悲しとする自然觀に過ぎなかつたが、齡既に半生、内部生活

の轉機は外界に注ぐ渠の眼をも鋭からしめた。即ち眼に見える自然の外の自然を見た。人間の内にも自然の力の存するを見た。而して如何に自我の小にして自然の廣大無邊なるかに泣いた。獨歩が自然を愛しながら運命説を信じたと云ふ事は渠に取つて悲しむ可き矛盾であると同時に自覺すると否とに論なく全人類がわけまへする矛盾ではないか。『空知川の邊』の主人公岡本が、廣漠たる北海の荒野に憧憬れて、さてその空知川の邊に行き着いた時の感想、落木蕭條たる大深林の底から自然の威壓におのゝくくたりこそ、獨歩の自然觀はた運命觀の具象化されたものである。

渠の自然觀も『武藏野』時代には極めて穩やかな、そしてスウキートなものであつたが、『運命』時代にはその凄慘な運命觀と結び付いて、なつかしき自然の奥底に汲めども盡きぬ悲哀を味つた。

かの『武藏野』若くは『空知川の邊』それ等の自然の觀方に於て、自ら度の淺深の違ひは有るが、兎も角もあの頃にあつて、あれだけの新味を出したのは特筆すべき事實であらう。

渠自らも云つて居る如く、自然研究者としては渠は始めワーズワースに學び、中頃ツルゲネフに導かれた。

而して渠が『早稻田文學』に執筆した『自然主義と余』なる文中に渠の自然主義はワーズワースにチユラリズムだと云つて居たが、渠自身の心持は別として、僕から見た渠の文藝上はた思想上の態度は、單に無技巧無修飾を標榜する牧歌的のワーズワースに留まらずして、その上に更に一種凄慘な自然觀

はた運命觀を附加したツルゲネフの行き方ではないかと思ふ。と云ふ意味は勿論、自然人生の觀方に於いて、他の何人よりもツルゲネフに暗示を得る事の多かつたらうと云ふ迄であつて、それが聊かも渠自身の創才を累はすわけではない。

渠自らはまだ大した作もしない頃であつたが、其頃全盛の紅葉山人の『多情多恨』や『不言不語』を讀んで渠一流の罵倒を連發した。其理由は前にも述べた人間を人間として描く場合、それがいかに精細であつても駄目である、人間の懸り所を窮めない作家は到底語るに足らぬと云ふので、またその技巧たつぷりの文章が厭であつたのである。而して渠が我國の古來無數とも云ふべき作家の何人にも敬服せずして、却つてワーズワースに行きツルゲネフを迎へたと云ふ事は、いかに渠が思想上のハイカラ（無論善意の）であつて新奇を好んだか、解る。

恐らく渠程新奇を好み、感覺、直觀の鋭敏を尊んだ者はあるまい。鋭く、鋭く、と云ふのが渠の常に念とした所で、同時に渠の長所であつた。渠は恐ろしく短氣であつた。ぐづぐづするが嫌ひであつた。

渠は常に「驚きたい」と云つて居た。「驚きたい」と云ひ、「感覺を鋭く新しく」保ちたいと云ふ渠が、新を新をと追ひ求めて、西鶴にも行かず近松にも就かず、勿論紅葉露伴をも物としなんだのは道理ある次第ではないか。古臭い日本の諸作家を棄て、ワーズワースやツルゲネフに契合したのは當然ではないか。

渠の自然人生の觀方に於ては、誠にワーズワースやツルゲネフに負ふ所は多いが然し之を表白するに至つては、即ち其文致筆法と云ふものは、渠独自の個性的であると云つて宜しい。そのボツ切れに、打切棒に筆を行ふ所がそれである。此簡勁雋邁にして技巧を無みした粗朴の文章は、固より漢文學の素養あるに依ることではあるが、自ら以てワーズワースとす所以でもあらう。いか様此所だけはかの織細微妙の筆を行ふツルゲネフ張ではない。

さて文章に言ひ及んだ次手に少しく作品の評を試みる。僕の好みを言へば、『女難』『酒中日記』『正直者』である。『女難』の尺八を吹いてる所は除ける。『女難』と『正直者』とは一寸外でも云つた事だが、明治の文壇に於ける最初の肉慾小説であると思ふ。其意は、風葉氏などもずつと前から肉慾は書かれたが、其描寫の態度が違ふ。肉慾と云ふものは汚ないもの、恥づ可きもの、と云ふやうな心地が見える。然るに獨歩は大膽に眞率に、肉の力を認めて之を描いた。勿論挑發的であらう筈がない。人間の内部をめぐる自然力、之れを如何ともすることの出来ない事實だと云ふ程に、嚴肅に、醒めては見ながらも汚ないと排斥する態度はない。然しながら矢張其所には多少のセンチメントが伴つてリグレットするやうな気分もある。

この一種のモラルトーンと云ふものが其作品を或場合には聊か古いとか、ロマンチックだとか思はせもするが、此所がまた渠自身の特色であつて、自然主義などは下らない、自分は自然主義者ではないと云つた所以の一つにもなる。

渠の考へに依れば空想も一つの眞實であつた。『僕が空想する、この空想はまた争ふ可らざる事實ぢやないか。』と常々云つて居た。然し前に云つた半僧生活の日光時代に於て、空想を捏ね廻して作をして居た僕に向つては、事實を書かなければ駄目だ、空想を棄て、事實を書け、と云ふ事を頻りに忠告して呉れた。

これは實に僕が最も感謝せねばならぬ點であつて、僕が今日兎も角も、自家の腹中をぶちまけて、忌憚ない告白をし得るに至つたはこれが爲めである。極端な議論ではあるが同じ空想を取扱ふにしても、空想を空想として取扱はずにこれを眞實として取扱ふ事は實に最も尊ぶべき渠の態度である。従つて其作品がイムプレッシヴでまたパワフルな所以である。

作品評は此所で切つて、更に渠の人物論に戻る。前にも述べた如く、渠は短氣である、疴癢持である、即ち直情徑行の自然兒、眞の正直者であつた。随分と思ひ切つた罵倒もした、喧嘩もした、然し他人に對してはどうであつたか、僕だけには決して皮肉を云つた例がない。自らもそれを矜として居た程に直覺の鋭い、頭腦の明晰な男であつた故、僕等の缺點はすぐ見えた。僕等がくだらぬ事で煩悶して居る事をチャンと知つて居た。然し決して直截に切り込んで來ない。こちらに赤面をさせるやうな事はせず脇へ廻つては解決して呉れたり慰めて呉れたりした。あれ程に自然な赤裸々な人でありながら、またそれ

程に細かく行き届く所があつた。渠の戀——戀の獨歩は亦好箇の研究題目であるが、この事實は既に廣く世間に傳はつて居る筈故に喁々を要すまい。然しながらモウパッサンの生涯が戀故に轉廻した如く渠の生涯の轉廻も戀故であつた。更に渠を苦めたものは事業の失敗である。戀に破れた渠は北海道開拓に失望し、近事書報社、獨歩社の經營に失敗し、自ら適所を知らなんだ誹りは別として、最近十年の渠の生涯は實に事業失敗の歴史であつた。惡戰苦闘の側には窮乏があつた、飢渴があつた。

斯の如くにして、實行家にして藝術家であつた渠は偏へに實行家たらんとして失敗し、失望し、疲勞した。而してなほ「驚きたい」と云つて居た。感覺の常に新ならざるを憂ひた。女、酒、それ等に強い刺戟を求めた。『牛肉と馬鈴薯』に「驚き難き」を嘆じ、『號外』に「號外」を欲し、『疲勞』に「疲勞」を描いた。

僕は渠を悲む『弔辭』に次の一節を入れた。

『君の一生は窮の一字よくこれを盡せり。されど君の計一たび世に傳へらるゝや、知ると知らざると、皆哀悼の意を表し、山村僻地にして猶君の遺書を抱きて泣くものあるに至る。』

「窮」の一字か、「疲勞」の二字か。あゝ斯の如くにして内部の渠は何者となり了したか最後に語るべき渠の逸話がある。獨歩社を解散して渠が芝區櫻田本郷町から大久保へ引移つた後の事、即ち昨年の秋頃と覺える。事業は破れる病氣には罹る窮乏も殆んど其極であつた。或日僕が訪問すると次のやうなことを云つた。

『君、僕がかうやつて米屋や酒屋に拂ひをせぬと云ふのを罪とするかね。然し飢渴と云ふ事を考へて呉れ給へ。一家の飢渴の前には酒屋米屋を借り倒す位の事は何でも無い。』

果然渠は純乎たる藝術家となつて居た。酒屋や米屋は借り倒しても差支はないと云ふ風な言葉は、たとへその酒屋や米屋でなくても、普通の人間、この人生の實行家、奮闘者が聞いたならば、忿怒を發せずには居まい。

けれども翻つて「飢渴」の一語を聞け。單に自ら生きんが爲めに他を踏み倒すとあらば惡魔である、イゴスイトである。自家の境遇を批判して冷然として「飢渴」の宣告を下すに到つては之れを何とか云はう。自家客觀も茲に其頂點を示して居る。恥を知り、人前を憚り、名を思ふ實行家に出來得る事ではない。渠の此態度は人間の色氣を擺却して居る。此自家客觀の態度こそ僕等が云ふ純然たる人生の傍觀者——眞の藝術家的の態度である。

『病苦は彼岸に達する努力である。』

祈らんとして祈り得ざるを泣いた渠は、悶々の果てに此の言をなした。人は以て信を得たりとする。果して然るか。寧ろこれ亦自家客觀の一發現ではあるまいか。

『僕は天成の詩人だ。』

これは渠自らが揚言して憚らぬ一句であつた。詩人は由來主觀的のものである。これを客觀して自ら云つた詩人——藝術家國木田獨歩、明治四十一年六月二十三日午後八時四十分、茅ヶ崎南湖院に逝く。

梅 雨 日 記

六月七日 新に着手すべき『田舎教師』の材料を蒐集する爲め、武州行田町に赴く。此用にて此町に来る、既に五六回なり。馬車鐵道を町の角にて下り、石島嶺山君を訪ふ、始めてなり。青縞商。角帯に眼鏡。家に病人あればとて、二三軒先の行田青年俱樂部の二階に誘はる。田舎教師の主人公の書簡及び遺稿を示さる。予は携へ來りたる日記を示して、當時の交友及び其の狀況を聴く。得るところ多し。今津君來る。共に出て行田の城址を散策す。蘆荻既に深く、蛙聲老いたり、士族屋敷の垣に紅き薔薇一輪咲きたり。星川の水饒くして岸の草に溢る。

當時、わかき人々の群の夜遅くまで歌留多取りたりといふ家を見る。このさびしい處を、わかき人達は夜遅く伴れ立つて歸つたんですな、などと語る。若き娘達の噂の石島君今津君の口にも上るも面白し。今津君は印刷を業とす。純然たる町人肌なれど、言葉に活氣あり。公園を貫きて熊谷街道砥の如く通ず、中學の制服つけたる生徒の歸り來るを見て、『僕等もあゝして通つたものだね』と今津君は石島君に言ふ。予は『田舎教師』の主人公に思をあつむ。

町の病院の角にて二君に別れ、車にて羽生に赴く。三里に近し。養蠶の頃とて、常に似ず町は活氣を帯びたり。戸を悉く明放ちて、柱に、繭買入所といふ紙札を張りたる家を處々に見たり。建福寺の傍、溝に沿ひたる道を行くに、桑刈りたる跡の空しき島を通じて、寺の白き壁見え、細君と秀子(今年八歳)の其處に佇立みて、此方を見るに逢ふ。太田君喜んで迎ふ。秀子『叔父さんが車で來るのを遠くから見居た——』と跡を長く引きて言ふ。夜、少しく酒、肴はやつこ豆腐、鯉のあらひ、鰻鮓。

八日 兩國橋行の六時の急行に乗る。沿道は平々凡々、常に見馴れたるものばかりにて興なし。加須あたりより風呂敷包を枕にして寝る。九時兩國橋着。直ちに博文館編輯局へ出勤。

十八日 雨浙瀝。『田舎教師』の筆を執り始む。『四里の道は長かつた』と書いて、あとはいかにしても筆續かず。一度机を離れて又机に向ふ。予は昔より常に作の冒頭の數行に苦しむの癖あり。近來その癖の甚だ理由なきを知りて、勉めてこれを排したれど、因襲の久しき、未だ全くその習癖を脱する能はず。

フロオベルがモウバツサンに與へたる手簡の中に『予は金曜日にクロッセに歸り、土曜日にはいよいよ『Bouvard et Peuchet』の稿を始めんとす。予が心は其目的の爲めに震ふ。さながら世界漫遊に上らんとする旅客が其前夜に於けるが如くに。』と書きたるを見る。予もまた同じ不安と苦痛と希望とを感じたり。

『田舎教師』は予に取りて全く他人なり。予は小學校の教師をしたることなし。其材料は多く日記、傳聞、踏査等より成る。従つて不安多きだけそれだけ予に取りては新しき試みなり。博文館をやすみて、終日書く。辛うじて二十枚。

二十二日 『田舎教師』四十二枚まで書き上ぐ。此頃夜は大抵十一時頃まで執筆、蚊多きが爲め、蚊遣線香を七八本も煙草盆に立て、辛うじて夜を過す。本町への出勤は例の如し。雨ふりみ降らずみ、鼠色の雲鬱陶し。栗の花白く夕暮の森に見ゆ。

二十三日 故獨歩一周忌、本町を二時に仕舞ひて、石井研堂君、前田木城君と共に赤坂の圓通寺に行く。人々既に多く集る。追悼小集についての相談あり。本堂は薄暗く陰氣にて、香の烟微かに颯る。形のごとき式濟みて、青山墓地に參詣。墓標の前に白き服、バナマ帽、紺紋附の羽織など一團をなして、故人のことを偲べるさまは繪のやうなり。四聯隊前より電車にて木挽町緑屋の小集に連なる。歸途は雨。

二十四日 夙に起きて四枚書く。十時出勤。午後より用事ありて藤村兄を淺草に訪ふ。夜、小石川地誌會。

二十五日 午後五時、蒲原有明氏來訪、久し振りにていろいろなる物語に耽る。近き頃銚子に遊びたりとて其感を語る。予も銚子は好きなり。銚子は東海岸にては第一なるべし。予は卅八年四月に故獨歩と共に遊びたることを語りぬ。愛宕山に置きたる戦時の展望哨のことなども語りぬ。ふと、これ

を一小短篇に書いて數日前より督促を受け居れる『現代』に載せばやと思ふ。庭の椎の樹に雨の脚の長きを見つゝ會心の友と酒を飲む、快甚し。八時過蒲原君歸る。

二十六日 朝夙く起きて机に向ふ。今日は龍土會なれば午までには本町に行きて用を足し、それより鮫洲の川崎屋に赴かざるべからず。六時より十一時まで五時間の間に『寫眞』を書く、氣が氣でなし。漸く書き終りて出勤。讀賣の岡村千秋君に電話をかけて原稿の成りたるを告ぐ。午後一時藤村兄來訪。三時、長谷川天溪、前田木城の二君と鮫洲の川崎屋に赴く。蒲原君岡村君既にあり。湯あみして浴衣かけになれる頃、雨大に至る。海暗し。

肴はアナゴ、エビの金ブラ。久し振にてかなりに酔ふ。赤い顔したる岡村君と橋本邦助君と、向う側に折重りて倒れたるを見つゝ、予もまた意氣地なく寢る。覺むれば、長谷川君、既に會費を集めて會計をなしつゝあり。九時過ぎ雨を衝いて出て鮫洲の停車場に集ふ。東側は木城君唯一人なり。東側の電車先づ来る。一同聲を擧げて送る。

卅日 二十七日、二十八、二十九日、別に事なし。『田舎教師』やゝ進みて八十枚の處に至る。未定稿を佐久良書房に渡す。旅にある柳田國男君より繪端書來る。

七月三日 雨にぬれて出勤。机の上に一枚の葉書あり。土持綱安の字先づ眼を惹く。十數年前にわかれし友今大阪にあり、四五日の中には上京すべしといふ。『すみなれてあればこそあれわたつみの離れ

小島の秋の夕暮』の歌の作者なり。やがて逢はん時の楽しさを思へばそゞろに嬉し。前田木城君は先月二十八日の朝、父の死の電報を得て急に甲州に歸郷せしが、今日午後出勤、辛さに父にわかれしことをかたる。

『文章世界』のべ切漸く近づく。

四日 今日も雨なり。日曜日とて、終日家にありて筆を執る。裏の庭の梧桐に、雨滴落つる音さびし。熊谷と行田と羽生と彌勒に就いて、主人公の追懐あり。かれの一生をいろ／＼に考へ見る。落魄の運命を荷ひし一青年が田舎の墓に埋れ行くあはれさをつくづく思ふ。

予は執筆時間を一日三期に分つ。午前は八時より十一時、午後は一時より四時、夜は七時より十時、常に三時間を以て一期とす。されど毎日日本町に出勤せざるべからざる身は、三期を完全に机に坐ること難し、大抵一期乃至二期なり。而して予はこの一期に八枚乃至十枚の原稿を作るを例とす。昔は十二三枚を書きしことあれど、此頃は筆鈍りて、漸く意の如くならず。三時間にして單に二枚に過ぎざることあり。昨年、新聞に小説をかゝけ始めしより、毎日一回の悪き癖つきたりと覺し。

仙子『ひと夜』の作あり。予の一過讀を求む。概して可なれど、説明的描寫と描寫的説明とにつきて未だ到らざるところあり。少しく語る所ありたり。後半は佳なりと思ふ。

夜、素麵を食ふ。螢一つ、降る雨の中を飛んで庭樹の間に光る。三子腹を病みて熱あり。土持君もは

や上京せしならんと思へど、便なし。

五日 午後二時、博文館にありしに、小僧土持綱安の名刺を持ち來る。直ちに應接間に行きて逢ふ。十數年前の面影依然として其の眉目の間に髣髴たり。其言葉にも變りたるところなし。唯、髪に數莖の白きを見るのみ。『君は變りません』と予の言へば、土持君も『變りませんよ、君だつて』と言ふ。變らずと言へば變らず、變れりと言へば變れるが人の世の習ひなり。變らざる中に多く變れるお互の境遇思想などを思ひぬ。イタリアの作者、ド・アマイテイスが短篇『同窓の友』に、其友は昔の姿にして心は昔の友にあらざる恨を書きたるものあるを想起しぬ。されどなつかしきは其顔、其眉、其言葉なり。せめて、久濶の情を叙したしなど言ひて、忙しき『文章世界』の編輯を木城君に託し、館を退出せんとする時、ゆくりなく藤村兄の來り訪ふに逢ふ。兼ねてたのみ置きし『日記』を携へ來られしなり。下の應接間にて土持君を待たせて、十分ほど談す。土持君を紹介なすとす。『何うです、君は今日はお閑ですか、お閑ならば、あとでまた呼びにやりますよ。』

電車にて例の柳光亭に行く。室は隅田川に臨みて、一錢蒸汽や小傳馬や荷足や橋の上を走る電車の音や濁りたる水の色や、見馴れたる景なれど面白し。『隅田川も久し振ですな』と土持君は柱に凭りて川を見つゝいふ。明治二十三四年頃、今臺灣にある櫻井又一郎君などと小さな荷足を借りて水神の先まで上りたることなどを思ひ出す。三叉附近にもよく行きたり。秋の月夜に、船を蘆荻の中に入れて詩を吟ぜ

しこともありき。綾瀬の橋の袂の一茶店には、其頃一少女ありき。柳田國男君の歌に「春見つる少女は住まずなりにけり橋の袂に家はあれども」といへるは是なり。急雨に逢ひて、其橋桁の下に一二時間を過せしことなどもありき。

共に湯に入る。土持君、予の體格を見て、「非常に肥つたものですな」といふ。其頃、予は顔蒼く、體瘦せ、常に悲哀を口にして止まざりき、浴衣がけになりて語る。快甚し。

藤村兄を呼びにやる。やがて来る。酒酣にして興愈々加はる。歌の話など出る。土持君藤村兄の扇子に例の『あら海』の詠を書く。予にも何か書けといふ。滿洲從軍の時旅情をうたひたる歌を書く。われ等の室の甚だ静かなるに引きかへて、隣の室は三絃の音賑かなり。席に侍せし女、餘り静かなりとて三絃を弾く。近頃大阪より流行し來れるといふ唄を聞く。卑しき調なり。

好い加減に酔ひて、九時頃歸途に就く。電車にて須田町に行き、土持君は京橋の寓に、予は代々木に歸る。

八日 夜、地誌會。雨を衝いて小石川に行く。大日本地誌第九卷の原稿を纏めたしと思ひしも出來ず。これより九月初旬までは暑中休暇とて、此會もこれにて休みとなるべし。九州の寫眞などを集む。山崎君は南清地方に佐藤君は羽後鳥海山に赴くべしといふ。面白き繪葉書あらば送らんなどいはる。十時過ぎ、歸る。雨烈しく降る。

十一日 今日日は日曜なれど『文章世界』校了日なれば、午後より小石川の工場に行く。木城君既にあり。『評論の評論』を校正す。恰も中元の賞與の渡る日とて、二階の廣き室には事務員職工等交る交る出入す。皆なにくく然たり。『室』といふ題にて短篇を書かば面白からんなど木城君と語り合ふ。午後四時、校正終りて歸る。柳田國男氏より端書あり。師松浦辰男先生の大患を報じ來る。君は旅中にそのことを聞きて急ぎ歸り來れるなりとぞ。土持氏より國の土産なりとて芭蕉布一反贈らる。

十二日 午前十時出勤。柳田國男君に電話をかけて先生の容體を聞く。『今日、土持君來る筈ゆゑ君も歸りに寄り給へ』と柳田君言ふ。午後土持君來訪。柳田君宅の會合を約して去る。

退出後、淡路町の風月堂にてカステラ一棹を買ひ、市ヶ谷田町に松浦先生を訪ふ。土持君柳田君及び予、皆十年前に於ける此の師の門下生なり。家こそ新しく築かれたれ、土藏も庭も依然として昔のまゝ也。摩り減したる下駄を穿きて、常に先生を訪ねまつりし時のこと今更に思ひ出さる。今、先生の大患に際して、ゆくりなく三人かく相逢ふも何かの因縁なるべし。先生は聞きしほど衰へてゐます。歌のことども何彼と語りぬ。三十分ほどして辭し、加賀町に柳田君を訪ふ。土持君既にあり。東向の室にて語る。柳田君は旅中腸を病み、辛うじて歸り來りしよし。何となく元氣なき顔色なり。木曾、飛騨、越中、加賀、越前、若狹、丹波、丹後をめぐり、播磨にて師の病を聞き、急ぎ歸り來りたりといふ。旅中の話など興多し。若狹の小濱にては、わがやどれる家に宿し、わが知れる婢と語りりとぞ。夕飯の御馳走に、

なりて、十時近くまで話す。十四日には、三人して師の家を訪ね、何處かにて記念の爲め寫眞を撮らんとしふ約束をなす。梅雨あけて、何となく蒸暑く、梢に蟬の聲を聞く。

十三日 朝、『田舎教師』を三枚書く。百四十三枚目なり。十時頃より数回の下痢、熱もありて氣分あしけれど、用事あれば出勤す。午後發熱甚しく、早退して歸る。柳田氏の許に明日の御同行はむづかしからんといひやる。晩、熱を計るに、三十九度八分あり。發汗劑を服して臥す。流汗淋漓たり。

十四日 幸ひにして熱去りたり。體怠るけれど、減多になき機會なれば、強ひて行く。途中醫師に寄る。柳田君を訪ふに、早出かけたなりといふ。松浦先生を訪ふ。柳田君あり。先生の容體は一昨日よりも更に好し。少時して土持君も來る。先生の枕元にて、歌の話、旅の話などを正午近くまで語る。新築の二階は明るくして、前に番町の土手を見る。梅雨全く霽れて、暑氣頓に加はる。此處を出でて、電車にて三越の三階に行きて寫眞を撮る。此處の寫眞技師長柴田君は日露戦争の時寫眞班として共に滿洲に行きし人なり。久し振にて逢ふ。『君、大分後が兀けたね』などと言ひて笑ふ。

電車にて京橋に行き、風月の二階に洋食を食ふ。室狭く客多く、暑きこと限りなし。始めて大野洒竹君に逢ふ。柳田君の紹介なり。『文學界』時代のことを何彼と語るにつけて根岸のいかほにて會のありしことを思ひ起しぬ。島崎、平田、馬場、戸川、上田などの諸君に逢ひしも其時が初めてなりし。上田君は紅顔の美少年なりき。われ等がさまざまの若き希望を語り合へる傍を汽車はをり／＼地を撼して過ぎ行きぬ。其前年にわれ等は既に土持君とわかれしなり。

日報社の角にて土持君と別れ、中通にて柳田君と別る。土持君はこの十八日に歸國すべしといふ。

花袋文話

描寫論

—

描寫論を始めるに當つて、先づ描寫と記述との區別を説きたいと思ふ。記述をデスクリプションとすれば、描寫はペインティングといふ字が適當して居る。

記述は叙述である。一度頭腦に入つて抽象的になつたものでも、獨斷的になつたものでも、何でも彼でも記して置く。平面的であらうが、立體的であらうが、また作者の主觀が入つて居ようが、主觀と客觀とが混雜して居ようが、そんなことは何うでも好い。

物を記述するといふ心の状態にある人は、實際から物を見て、それが實際に迫るといふやうに——讀者がその文の面から實際をそのまゝに見るといふやうに心懸けて書かうとしては居ない。寧ろ自己の見たり聞いたりのものがある筋に抽象させたり、集中させたりして、そしてそれを傳へるやうにする。語る、話す、傳へるなどといふ状態、さういふ處に留つて居る。

歴史の文章、科學の文章、哲學の文章、それから下つて、吾々が今日新聞雜誌に見るところのもの總ては、皆な記述——デスクリプションの文章である。

記述は平面と立體たるとを問はない。具象的たると抽象的たるとを問はない。意味が分れば好い、筋がよく飲み込めれば好い。語らんと欲するところ、傳へんと欲するところがよく傳へられさへすれば好い。

従つて記述には説明が必要である。寧ろ説明があつても害にならないばかりではなく、それが簡單に筋なり趣意なりを語るのに有效なる場合が多い。

しかし、描寫といふ方から言ふと、それが全く違つて來る。描寫——描くといふことの目的は、趣意を傳へたり、筋を語つたりするのではない。又、事件を傳へるのでもない。眼から頭腦に入つて生々として居る光景をそのまゝに文の面に再現させて見せようとするのである。ある二面種があると假定する。新聞記者はそれを見るなり探訪するなりして、それを自分の頭で判斷して、その一伍一什を記述してそれで満足して居るが、描寫の方では其光景を其まゝに生々と再び現はして見せようとする。

かうであつたと説明せずに、かうであると描いて見せるのである。

梅が咲いて居る。これでは記述であつて描寫ではない。白く梅が見える。かうなると、いくらか描寫の氣が出て來る。吾々の前に咲いて居る梅の狀態が分明と眼の前に見えるやうになつて顯はれて來るやうに心懸けるが描寫の本旨である。

かれは雨戸を閉めた。

雨戸を閉める音が聞えた。

波の音がした。

波の音が聞えた。

何れも後の方が描寫の氣分に近い。

「鱗を書いた魚の形」とか「煙草を勧める女」とか言ふのもさういふ處から來て居るのであらうと思ふ。

寫生と言ふことも、其作者の心懸や氣分に由つて、或は叙述になつたり、或は描寫になつたりする。寫生文といふものは、文の種類で分類されたものであつて、記述、描寫といふやうな氣分から分けられたものではあるまい。寫生さへすれば描寫であるといふ風に考へて居る人があるが、あれは記述と描寫との區別をよく知らない爲めである。

二

小説に物語風のなくなつたのは近代のことであつて、バルザックあたりでも随分長たらしいお話風の

テデアスな記述が多い。それは中心に入つて行けば、ベリ、ゴリオだのユーゼネだのには、いつか記述を離れて描寫に入つて行つたやうなすぐれた處が澤山あるが、それでも、其時分にはまだ作者が自覺して描寫を心がけて居たとは思はれない。記述をしたり、お話をしたりしてゐる中に、いつとなく興が出て、我知らず描寫三昧、状態描寫に入つて行つたといふやうな處がある。ツルゲネエフの「獵夫日記」なども記述と描寫と相半ばして居て、森林を描くにも、後に出たインプレッショニストのやうに、外面的に投り出したやうな描き方をして居ない。作者が記述したり説明したりして居る。

實際——現象に對しての作者の氣分如何。これが描寫と記述とに自づからなる區別をなしてゐることは争ふべからざることである。描寫論は無論、此處等あたりから説いて行かなければならない。

自然主義の運動、繪畫に於けるインプレッショニストの運動——かうした處から段々下つて説かなければならぬ。

現象を明かに映す主觀の心の鏡、その明快透徹なると、その朦朧曖昧なるとに由つて、主觀に映る現象が明かにもなれば、暗くもなる。

作者には、これを縦にしては才分を要し、これを横にしては年齢を要する。其實如何に由つては、無論物を描寫するといふやうな氣分になられないものがいくらかもある。寧ろ普通の大多數はそれに屬してゐる。普通人の心理——さうしたものを此場合研究して見る必要がある。

人間——大多數の人間は生きるが爲めに生きて居る。實行の爲めの實行生活である。利害得失の上に築かれた利害得失である。

人間は必ず理想に捉はれてゐる。戀に於てもさうである。愛に於てもさうである。死に於いてもさうである。富貴名譽に於てもさうである。物質上にも、精神上にも何うかして満足するやうな効果を得たいと思つて居る。

そしてまたこの理想といふものが、少くとも人間改善の方便として必要なものとなつてゐる。進化の理などといふものも此處に置かれてある。どんな人間でも、この理想を全然排除することは出来ない。しかしこの理想に捉はれて居れば居るだけ、知識の道が開けずに居ることも事實である。理想のユートピアに住んでゐる人間は、多くは人間の本體如何といふ知識を缺いたお目出度い人間である。といふ傾向がある。

ごく通俗に碎いて言つて見ても解る、熱中したものは、多く誤つて居る。巴渦の中に居るものには、其真相は解らない。憧憬と知識とは伴はない。

自然主義に排理想、排道德といふことがあつた。勿論、御存じであらうが、これは知識を主とした文學上當然起つて來るべき問題であつて、またこれが文藝上の主義にとゞまらず、實際上の主義となるに及んでは、普通人間實行の状態から、反對運動の起つて來るのも當り前のことである。

排理想、排道德、これを實行の上から言へば、到底絶対に行はるべきことではあるまい。生存を捨ててまでも、吾々は理想を排し、道徳を排することは出来ないものである。實行上に、新しい道徳を提擧し、奮い理想を排却するのはそれは好い。私などもさうした人間でありたいと思つてゐる。しかし生死を賭してまでもといふ段になると大に考へなければならぬ。

近代の文藝に勝利の悲哀といふことがある。又、肉と血の敗北といふことがある。押つめて押つめて行つて見て、そしてそこに悲壯を感ずるといふやうなキャラクターが多くの作の主人公になつて居る。しかしこれは藝術である。實行ではない。

生死を賭しても實行に赴く人は、一種のキャラクターには相違ない。しかしそれは藝術家には遠い。しかし實行は其人の藝術の背景を成してゐる。であるから、私はかう言ひたい。熱烈なる實行家にして、それに捉へられざる忍耐と知識とを有せる人——精神上の火水の争ひをもじつと黙つて見て居るやうな人——

此處に至つて、藝術家の心理の悲痛といふことが起る。

熱烈なる實行の精神を有しながら、それに捉へられざる心の忍耐、苦痛。

三

『描寫は描寫の爲めに貴いのではない——』

これは實際であるが、私は更に問はうと思ふ。

『描寫する氣分にはいかにして到達した？』

普通人の言ふを敢てしない、語るを敢てしない、記するを敢てしない、陋劣卑怯の状態をも、人性隠忍の状態をも、残酷無慘の状態をも猶ほ且つ描寫して憚らないやうな心の状態に何うして到達したか。それを考へて見ることを諸君に勧める。單に『われは藝術家たるが爲め』であらうか。又、『かういふ處を覘つて寫生しなければ變つた作が出来ない』爲めだらうか。それはさういふ作者もあるかも知れない、さういふ藝術家もあるかも知れない。——否さういふ藝術家があるとするれば、さうした記述なり描寫なりに、一種面白い可笑い色彩をつけて描くに違ひない——諸君はこの忌憚なき描寫の陰に作者の悲痛なる主觀の悶えを見なければならぬ譯である。作者の大小緩急の主觀を見なければならぬ譯である。

何を描いても、作者が描寫する氣分になつた處に、少なからざる藝術の意味がある、記述したり、説明したりする中は、まだ其作者の主觀が普通の人々のやうに熱したり覺めたり批判したり断定したりす

る程度にあるのを證明して居るが、それが一度實行に捉へられざる忍耐と知識とを具へて來ると、其處に初めて現象を其まゝに描寫して投つて置かうといふ氣分が出て來るのである。

傍觀的態度といふ言葉は、いろ／＼に誤解されたり、悪用されたりしたが、私はさういふ意味に於ての傍觀的態度でなければならぬと思つてゐる。つまり實行を敢てしない忍耐と知識との間に生れた態度でなければならぬと思ふ。

傍觀的態度は、さういふ風に藝術の境に留めて置いてあるが、これが實行の場合にもある程度まで用ゐられて行く。この態度は改めて言ふと、分析即ちアナリシスといふことになつて行く。

分析といふことは、實際方面に於ては、無意識にはよく用ゐられてゐるが、意識的に餘り極端に用ゐられると、實行の妨害をしたり、實行の熱を失つたりすることが尠くない。意識的分析といふことは、藝術家にして始めて許されることではないかと思はれる位危険なるものである。

冷淡、冷笑、否定——かうした氣分がこの分析といふ態度から、必然の結果として生れて來る。白眼世上を見るといふやうなところも出て來る。

ニイチエの影響を受けた無数の小ニイチエの弊害が、一時獨逸文壇に跋扈したやうに、分析の氣分に到達せず、分析の質を有せざるものが、一時分析の模倣をしたその弊害は、矢張我が文壇にも我が實際社會にも、かなり多くあると思ふ。

分析を好むもの、弊は、無信仰に陥り、懷疑に陥り、不安不定に陥り、空虚に陥り、敗徳に陥る。

『良醫にして始めてメスを取るべし。』

私は常にかう思つてゐる。

パウル・ブルジエの作に『弟子』といふ作がある。それはフランスの青年の分析癖を諷したもので、分析の結果思ひもよらぬ身の破滅に到達することが書かれてある。そして著者は長い序文を書いて、*To young men* と書いて居る。

分析をして、分析に捉はれない人にして、——傍觀的態度を持して、傍觀的態度に捉はれないやうな人にして、始めて分析、傍觀的態度を口にすべしである。

描寫の氣分に達することと、描寫的に物を見る質の有無とは、藝術家の資格を横からと縦からと説いて見た形になつてゐる。描寫にあらずんば、現代的小説の極致に至ることは難い。

四

描寫する氣分に赴くといふことは既にこれを述べた。そしてこの氣分の度数が千から億まである。

其度数は作者の頭腦と修練とにある。頭腦の方は記憶力の健全、觀察力の正確などである。修練の方は現象の顯はれ方に注意して自然のコンボジションを洞察するやうに心がけることである。

記憶力と言ふやうなものは、其人々の箇々の質に由つて、其根本は如何ともすべからざるものであるけれど、注意する度数如何、熱心の度数如何などに由つて、其力を増進することはいくらも出来る。

観察力、これも矢張才分にあるが、物に促はれずに、少しく心を落附けて、其の周囲を見廻すといふ習慣をつけければ、其正確の度を増進させることが出来るものである。

観察力には、経験の豊富といふことが何うしても伴ふものである。経験が無ければ、どうしても物を見るのに、一角から見るといふ形になる。彼方からも此方からも見るといふやうな複雑した観察は何うしても出来ない。それに、一角から見れば、何うしても観察が不正確になり易い。偏より易い。行き届いた観察が出来ない。

しかし経験をしろと言つても、無闇矢鱈に経験をせよといふ譯ではない。世の中には多い経験を積んだ人はいくらもある。苦しい辛い此世では得られないやうな経験を積んだ人も少くはない。しかし普通人に取つてはそのやうな経験が大した利益にならない。大抵は忘れて了つて居る。忘れて了つて同じやうな経験を二度も三度も繰返して居るものさへある。かういふ人に取つては、豊富なる経験も決して豊富とは言へない。私の言ふ豊富なる経験と言ふのは、経験した事件の心理を細かく注意して見て置いたもの、幾箇も重なつたものを言ふのである。

ある事件——どんな事件でも好い、小さくつても大きくつても。その成行をちつと見て居て御覽なさ

い。其處からいろ／＼な無言の教訓が得られるものである。かうなるだらうと想像して居ることが事件の心理的進行につれて、グン／＼變つて行く。吃驚されるほど思ひもかけない方に變つて行く。つまり『行かんと欲する處に行く』といふその行き方が人間の想像では何うしても知ることが出来ないほど、複雑を極め、變化を極め、微細を極めて居る。私などもさういふ時に當つて、いつも人間の小にして自然の大なるを痛感させられる。

處がかういふ微細な心理的経験を幾箇も積んで知つて居ると、その想像も單なる想像ではなく、事實を背景にした想像になつて居るから、中らなくとも遠くない観察をすることが出来るものである。

自然のコンポジションといふことも、小説構成上には、甚だ必要なことである。

或はこの自然のコンポジションといふことが藝術に於て、最も難かしい、最も意味のある深い處かも知れない。

自然のコンポジション。かういふと簡單だが、實際自然のコンポジションといふことを考へると餘程難かしい。自然にコンポジションありや否？これが既に一問題である。自然は外物としては、唯あるだけで、ザインだけで、コンポジションなどといふものはないと言へないこともない。

翻つて自然の一部分たる人間たる自己を考へて見る。自己にコンポジションありや否？これ又一問題である。自己といふ、ある心理を持つた人間が此空間に存在して居るといふだけで、別にコンポジシ

ヨンと言つたやうなものもない。

しかし無いと言へば無いが、あるといへばある。自然の推移、なるやうにしかなつて行かない、逝くものは再び歸つて来ないといふやうなものがある。

自己の無と外物の無と相觸れて、其處に一種の有を生じて来る。

私は私の經驗上、この自然のコンポジションの剪裁如何と、印象描寫の色彩の用ひ方如何と、この二つが一番藝術製作上に必要であると思つて居る。

繪畫上のインプレッショナルイズム。私は餘りその方を詳しくは知らないが、モネの停車場だとか、舟行だとか、ピッツァアの田舎の景色だとかに、さうした著しい傾向が見えるやうに思ふ。

ある場所からある場所までを、ちよきんと切つて、無造作に投り出してある。畫面の上にも何等の剪裁も、何等の統一をも加へて居ない。舟がごたくと並んで通つて居れば、ごたくと通つたまゝにして置く。がらんとしてをれば、がらんとして置く。昔の理想家はこの舟が餘り重なり過ぎる。この家があまり出すぎてゐる。この松は少しぢやまだ。かう言つて、あつちこつちを切つたり、取つたり加へたりして、それを自分の美と思ふ所へ持つて行つて、好いやうに塗抹した。つまり自然のコンポジションではなくつて、自己のコンポジションになつて居る。自己の好んだまゝに自然を修正したり、自然を潤色したりした。インプレッショナルイストには、さうしたところはないうだ。舟が重なつて居れば重なつたままで好い、松が出て居れば出て居るまゝで好い。つまり現象の再現を無條件で試みようとしてゐるのである。

であるから、無條件であるから——インプレッショナルイストの繪畫には、鳥渡見ると、技巧が見えるばかりで、主觀方面、即ち作者の内部の方面は、丸で無いやうに見える。作者は唯、自然の複寫を造つてゐるやうに見える。色彩の濃淡、光線の感じなどにのみ心を注いで居るやうに見える。これが印象派の技巧派と見らるゝ所以である。しかし作者の考では、決してさうではないと思ふ。自然を其まゝに寫さうとした心持が一つ。自己の考へや思想判断などでは到底生々としたものは出来ない。其位の思想、判断程度の人にはいゝかもしれないが、それよりもつと進んだ人、眼の明かな人、頭腦の複雑になつた人には、偏つたものとしか見えないに違ひない。それでは自然を寫すといふことに於いて不満足だから、出来るだけ自分を空うしようとしたことが一つ。主觀を思想や批評見たやうに表面に明かに出さずに、唯作者の持つてゐる總て——人格、技巧、修養、趣味、などを具象的に顯はさうと心懸けたところが一つ。まだその他にもあるかも知れぬが、兎に角かうした作者の内部方面の苦心があると思ふ。

印象派は、だから、繪畫でも、小説でも、そこから受ける感じは、作者の主觀全部が具象的になつて入つて来る感じである。作者に由つて——作者の個人的内容に由つて、其全部の感じが、個々別々で丸

で違つては居るが、自然に對してある成心や判断を持つて居ずに、モネの見た自然ならモネの見た自然、シスレーの見た自然ならシスレーの見た自然、ゴッタルの見た現象ならゴッタルの見た現象と言つたやうに、動かすべからざるものになつてゐることは一樣である。この主観方面を考へて見ることは肝腎である。

主観と言ふと、人はすぐ思想とか判断力とかに持つて行きたがる。しかし主観にも無数の度数がある。ピンからキリまでであるのである。青年時代の主観もある。中年時代の主観もある。老年時代の主観もある。これは縦から見た主観の度数である。経験の多い人の主観もある。経験の少ない人の主観もある。経験をしたり學問をしたりしても更に大きな影響を受けない人の主観もある。これは横から見た主観の度数である。だから作品を見て、其作家の主観如何を點檢するやうになる批評家及讀者は一步を進めた批評家及び讀者であると私はいつも思つてゐる。

この人の作品に顯はれた主観は、何の位の程度の主観であるか、この作者の作品に顯はれた主観は、何の位の主観であるか。批評家及び讀者は、先づ第一にさういふところを見なければならぬ。主観が思想や判断になつてゐるか、それとも作者の總てから出て來る感じになつてゐるか、これを見分けなければならぬ。そしてまたその感じの無数の度数を點檢して見なければならぬ。更に詳しく言へば、批評家及讀者も自然に似た心を持つて作品に向はなければならぬのである。

これは今日の文壇に例を取つて見ても直ぐ分る。昔の作家は落ちを考へた。序破急などといふことを考へた。今の作家でも思想を得、構圖を得て、これに肉をつけたやうな作をする人がいくらもある。さういふ人は現象から生々としたものを捉へて來たのではなくて、思ひ付きから得て來て作をするのである。主義、主張の方便に藝術品を遣ふのと、いくらも違はないことになる。淺薄ならざらんと欲するも得んやである。

人によると、ゾラのルーゴンマツカールの計畫——あれを大規模だとか何とか言つて賞する人があるが、私などはあの計畫を賞めようとは思はない。むしろその細かい處に奇姿横生と言つたやうなところがあるのを取る。ゾラにその細かい處がなくつて、あの大規模だけだつたら、決して人を動かさしはしまと思ふ。

フランスのあの自然派の中で、ドオデエなどの貶されるのもさういふ處である。かれは長い作を書くやうになつてから、識者の間に段々聲價が落ちて來た。普通では、ナボツブだとか、チャツクだとか、フロモンリスリーだとかを書いて、ポピュラアノベリストになつたのであるが、全體に一種の趣向があり、構圖があり、場當りがあるので、何處かかう通俗小説と言ふやうな臭氣が出て來た。文章の旨いといふことより外には、金體に藝術的といふ感じが少なくなつて來た。

處が、かれの長篇の中に、Kings in exile といふのがある。これはゴッタルにヂデケートしてある。

フロオベルが死に、ツルゲネフが死に、段々其群が凋落して、後には兄のゴンクールがドオデエと非常に仲が好くなつた。かれはドオデエの家族ともよく往來した。かれはドオデエの別墅で死んだ。これを見ても、その交情のいかに濃かであつたかが解る。私が思ふに、それで、ドオデエはそのKings in exile. をゴンクールにデヂケートした、それもあらうが、その外にゴンクールの手法の感化を大變に受けたといふ意味もあらうと思ふ。

Kings in exile はドオデエの他の長篇に比べては、見方描方が非常にインプレッシブである。餘程ゴンクールの手法に似たところがある。あの大きな通俗的材料が藝術品の色を帯びて、かれの長篇中にカヤいてゐるのは注意すべきことだ。

フロオベルがその複雑した性格と類ひ稀な勇しい藝術觀とを抱いて、其の不遇文人の群中に長者の趣を呈してゐたことは、誰も知つてゐることである。サランボアのやうな濃厚なる方面と、センチメンタルエヂュケーションのやうな平淡なる方面と、行く所として可ならざるなきかれの才能と努力とは、實に驚嘆に値する。ゴンクール兄弟が、フロオベルと稍々趣を異にして、この群の中に居たことを此處に少し言つて見たい。

ゴンクールは飽くまで人生派であると共に藝術派であつた。矢張フロオベルのやうにロマンチック、リアリストであつたが、フロオベルのロマンチックの方面を内容まで持つて行つたのと違つて、かれは手法描法にそれを持つて行つて、内容にはつとめてさういふ傾向を避けようとした形跡がある。ゴンクールの作には、内容にはロマンチックといふやうなところは少しもない。ロマンチックのことでもロマンチックに見て居ない。

かれの書いた作は、多くは心理小説である。病的小説である。かれの作中には屹度精神に異狀を呈したやうな人物が出て来る。ゼルミニイ・ラセルトウ然り、シスター、ヒロメーヌ然り、ルネ・モウプラン然り、ラ・フォスタン然り、もしこれが現今の露西亞の作家であれば、グンゲン内部まで入つて行つて、其病的心理を解剖し盡して見なければ止まないやうな材料である。つまり實感を以て人を動かせば、どのやうにも動かすことが出来る材料である。それをかれはつとめて冷靜に、つとめて平氣に描き出した。作者が作中の人物と一緒になつてゐるやうな處は少しもない。また作中人物の心理を想像して、無理に取つてつけたやうな描寫を遣つたやうな處は何の頁にも見えない。いかにもノートにノートを築き上げて、その中から必要なことだけを省略してボツ／＼と印象的に並べたといふやうな處がある。つまりかれは實感的効果の多い材料をつとめて殺して書いてゐるのである。

であるから、かれの作品から受ける印象は、作者が判断したり、考へたりするより來る感じではなく、かれの持つてゐる總べてを透してあらはれて來る人生の姿である。漠然として居るだけそれだけ、種々

の問題を其中に包んで居る。

私はこのフランスの作家の描法を、露西亞の作家の描法に比べて見て、いろいろなことを考へさせられた。其の差違が殆ど兩極とも言はるべきほど離れて居るのを先づ第一に考へた。露西亞の作家は、何も彼も書かうとした。何んなに混雜して居ても構はない、何んなに密細なことも構はない、作者が離れやうが即かうが、そんなことを顧みて居る暇がないといふ風に見えた。ゴンチャロフの『コンモン、ストーリー』を読んで見ても解る。また此人の感化を受けたといふ二葉亭の『浮雲』を見てもわかる。『浮雲』の作者の書いたものと、『春』や『家』の作者の書いたものを比べて見てもわかる。同じ心理描寫を心がけて居ても、その藝術的などころと實感的などころとは夥しい差違である。一は内面から外面に行き、一は外面から内面を透して見るといふ趣があるばかりではない、全體の調子に於て、心持に於て、觀方に於て既に全く根本を異にして居る。トルストイ、ドストイフスキー皆んなさうしたゴンチャロフの脈を引いて、そしてそれよりも一層熱烈な人生派に進んで居る。同じ病的な人物を取扱つてゐながら、『罪と罰』と『ゼルミニイ、ラセルトウ』との差違を見たならば、人はその描法のかくまで違つてゐるのを驚かないものはあるまい。

フランスの作家の群の中で、ゾラが何うかするとロシアの作家のやうな心理描寫を遣ることがある。かれの作に、『テレス、ラカン』といふのがある。初期の作で、かれの出世作と言つても好い位の作である。

その出た時には、褒貶共に盛で、一面では其暗面描寫のすぐれてゐるのを認められると共に、一面ではその不道德の書であることを烈しく非難された。此作がロシアの作家の遣るのと少々似たやうな心理描寫を遣つて居た。全體の調子がペインテングといふよりも、デスクリップチーフで、グン／＼太い線で、遠慮せず書いて行つた處がある。しかしこれでも、『罪と罰』と比べて見ると、まだ餘程藝術的などころがある。『罪と罰』を読んでもると、次第に暗い人生の巴渦の中に引込まれるやうな氣がするが、ゾラの方は、矢張暗黒な人生を藝術的に見せられたといふやうな氣がする。その結末などは、ことにさう思はれる。

五

人生派と藝術派といふ言葉を此頃よく耳にする。開いた心と押へた心。それで少々此の二つの態度を區別することが出来ると思ふ。勿論此處に言ふ藝術派はデレタチズムを指して言ふのではない。自然人生を前に置いて、そして其の現象を離れて見るといふやうな作家の群を指して言ふのである。今の明治文壇で言つて見れば、泡鳴君の態度と藤村君の態度と言つたやうな違ひである。

ロシアには、開いた心の作家が多い。ロシアでは、ナチュラリズムはゴーゴリあたりから出發して、自然に發達したと言つて居る。フランスのナチュラリズムなどは丸で系統を異にしてゐると言はれてゐる

る。實際さうだ。フロオベルのやうな押へた心の作家は殆どない。ゴンチャロフなどは比較的客觀的の要素を備へた作家だが、それでも決してフランス流の藝術派ではない。チエホフが稍々離れた技巧を備へてゐるが、これとて、偶々かれの經た時代が消極沈滞の時代であつて、實際上には、手も足も出なかつたところから出て來た『離れ方』であつて、藝術上の主張から來た『離れ方』でないのは、モウバツサンの作品と比べて見ても、よく解る。

トルストイの『藝術論』は主としてフランスの藝術を評したものである。贅澤、無意義、虚偽などといふ字で、かれはフランス風の藝術と藝術家とを批評してゐる。人生派たるトルストイの立場からは、藝術派たるフランスの作家の群の心持が解らなかつたと言はれても仕方がない。むしろ自己告白の作家、實感を唯一の内容とした大作家には、フロオベルのやうな藝術萬能の心持が解らう筈はなかつたのである。『モウバツサン論』の中にある作品に對する道德論も矢張さうした人生派の立場が出て來るので、かれは『女の一生』から『ベラアミ』『ピエル、エ、ジアン』と段々その背景のモラルトオンが低くなつて、段々流行作者の低い列に落ちて行つたと言つてゐるが、私などの考では、『女の一生』よりは『ベラアミ』、『ベラアミ』よりは『ピエル、エ、ジアン』と段々再現の境に近くなつて作者の人生觀、思想などといふことに支配されなくなつてゐると思ふ。モラルトオンなどといふもので背景を塗られてゐるに、もつと廣い意味の自然に近い主觀になつてゐると思ふ。

批評家は『ベラアミ』の陰には作者の人道に對する憤怒の聲が聞かれるやうだと言つた。しかし私は思ふ、さう見るのは、人生派の立場から見た見方であつて、實はあの作の陰に憤怒の聲などを聞かれようとは作者は豫期して居らなかつたのではなからうか。作者は唯冷靜に自然の再現を試みたに止まるのではないだらうか。

再現——描寫と言ふことを完全に行はしむるには、人生派の立場では、まだ本當にその目的に進むことが出來ないと私は思ふ。泡鳴君の『放浪』、あれを近頃讀んだが、あれなどを例にして見ると、一番それがよく解る。人生派に近い泡鳴君は、まだ好悪是非などといふ處を離れて居ない、現象を現象として見るといふ氣分に達して居ない。その證據には作中の人物に對して、作者は恐ろしい判斷の斧を振つてゐる。勇夫婦に對し、氷峰に對し、作者は如何なる權利があつて、かうした判斷を下すことが出來るかと思はれる位である。それは『放浪』の主人公と勇夫婦と氷峰と、皆違つて居るのは異論はない。しかし藝術家の立場として、殊に再現を作品に望む私から見れば、區別差違は認めるが、その間に價值は置きたくない。價值は讀者がその描寫の中から得て行くのに任せて置きたい。それから又『放浪』の作者は、何故勇夫婦や氷峰に向つて揮つた判斷の斧を主人公の身の上に揮はなかつたか？ これを私は考へて微笑した。主人公を主人公と認してゐるのは好いが、作者が主人公の遣つたことを肯定して、あまつさへ其處に意味をつけようとしてゐるのは、餘りに無邪氣でそして滑稽ではあるまいか。

人生派の作者はよく内容のことを云々する。内容、内容とは何ぞやと私は反問したくなる。内容とは作品が持つて居る再現の度数の高低多少、それならば私は異論はない。しかし多くの人のいふ内容はさうではないやうだ。作品の中に含まれたる作者の人生観、思想から来る判断、材料から来る事件の大小、さういふものを指して、内容といつて居るやうである。それならば、私は内容といふことは作品の筋などに一步を進めた位のもので、別に大したものではないと思ふ。

しかしこれは、私が再現——描寫といふ氣分に到達する道順から言つた議論であつて、人生派の藝術に價値を認める認めないとかいふことはおのづから別問題である。

六

トルストイは苦んだ人である。しかしフロオベルの苦しみ方とは丸で別であつた。苦しい時には神をも念じ、無意味と感じた時には藝術をも捨て、押へずにドシ／＼進んで行つて、其處に何んな意義でも好いから生存の意義を発見して行つた人である。垂死の老翁にして猶且つ夫婦喧嘩を遣るやうな即いた人である。であるから、かれはフロオベルのやうに人生を醜惡だなど見て、藝術にかくれるやうな心持を一度でも起したことはない。人生が醜惡と見えた時には、かれはそれを醜惡でないやうにしようとした。人道の賊と見れば、直ちにそれに向つて攻撃した。悪いところはドシ／＼改めて行つた。これが

自分の人間としての務めだと、かれは思つてゐる。かれは藝術家といふよりも人間であるといふ立場に立つて一生を奮闘の中に送つた。

アナリスにアナリスを重ねて、冷かに人生と自然とを見た果てには、何うすることも出来なくなつて、暗い壁に向つて一日ぢつとして居るやうな人になつたフロオベルに比べて見ると、其處に藝術派と人生派の好い對照を認めぬ譯には行かない。

フロオベルが、閨秀作家ジョージ、サンドと往復した手紙が數通ある。フロオベルがアナリスに就いて言つた手紙の返事に、サンドは、『さう言つても同情といふことをさういふ風に排しても、人間には同情といふことがあるぢやありませんか。』とかう言つてゐる。つまり哀憐なき心になることは到底出来なといふことを言つたのである。

『椿姫』のやうな人情小説を書いた小デユマも矢張哀憐なき心になることの出来ない作者の一人であつた。動物學者が一動物を分析するのと人間が同じ血の通つてゐる人間を分析するのでは大變な違ひである。動物學者は一動物を平氣で分析することが出来るが、人間ではさうは行かない。そこに同情に對する議論も起るし、モデル問題も起る。實行と藝術との矛盾衝突も起つて来る。ブルンチエールはナチュラリズムを評して、此處に蔽ふことの出来ない缺陷があると言つて居る。

フロオベルが晩年其の藝術論に捉へられて、足も手も出なくなつて、暗い壁を見詰めて日を暮すやう

になつたといふのも其處から來て居る。

モウパッサンの晩年の作品が段々主觀の色を加へて來て、遂にあつた最期を遂げるに至つたのも其處である。

今の文壇が冷めたい灰色のアナリスに満足することが出来なくなつて、主觀方面に出て行かうとして居るのも、矢張其處から來て居るのである。

私はある友達と此の難かしい境を話し合つたことがあつた。『其處は苦しい辛い場所ですから。』其友達はかう言つて、長大息を吐いた。そしてすぐ言葉を續いで、『何うもさういふ境にまでついて行く人もありませんからな……しかし、私の考では開いた心より押へた心、そこに行つたフロオベルの方がトルストイの行つた道路より大きいのではないでせうか。』

何方が偉いか、何方が大きいか、それは別問題として、兎に角この二つの路があることだけは確かである。無意識のアナリストと意識せるアナリストと。ロシア文學には無意識のアナリストが多い。

私は又他のある友達に此の論をした。と、其友達は、『僕等も分析といふやうな氣分になる事は度々ある。しかし實行上では、このアナリスといふことは好いことぢやないと思ふ。何うも分析する心地はヒュマニチーと相阻格するところがある。不眞面目になつて行くやうな氣がする。』かう言つて私の顔を見た。

私は續いてそれから起る實行と藝術との矛盾を話し、藝術家は普通の人間の樂み苦み考へるところのものとは全く違つた路を行かなければならぬといふことに及び、其處に如何ともすべからざる寂しさ苦しさがあると話すと、其友達は軽く『藝術はいかに貴くとも、さういふ苦しい境に入つてまで、懊惱する必要はあるまい。厭なこと、苦しいこと、不自然なことは、ドシ／＼やめて了つた方が好いぢやないか。』

私はこれが普通の人の心であると思つた。即ち好悪を有し判断を備へた心である。敵を憎み味方を愛し美を好み醜を憎む普通の人の心である。更に詳言すれば、アナリスの加はらない心である。

『藝術あつてのライフではない、ライフあつての藝術である。』これはフロオベルの向う側に立つた少ヂユマなども言つて居る。しかしそれは普通の心であつて、フロオベルのやうな藝術觀に到達しなければ本當のライフを再現させることが出来ないのではあるまいか。いかなるものをも忍び見る冷やかな心、それがあつて、始めてライフが明かに描かれるのではあるまいか。

しかし人生派と藝術派、この二つのものをかういふ風に分けて言はずに、二者の統一と言つたやうなところに一種の調和を見出すことが出来るかも知れない。しかし、これは單なる理想であるかも知れない。

兎に角現象を現象として見る気分、其處から新しい描寫論が出立する。そして始めて再現といふことが言はれる。

事實と想像といふ議論も、この現象を取扱ふ上に於て、非常に注意すべきことであると思ふ。事實其ものに意味を發見して、人生の雜多紛々を唯單に雜多紛々とせず、其處に意味を發見する處に、現象を現象として見る気分がある。

これは平凡なる事實、これは煩瑣なる事實と言はずに、平凡煩瑣の中に意味深い事實を發見するところに、事實といふことが意味を持つて来る。

自然はいかなる形式を以て顯はれて來ても、必ず人の想像することの出來ないオリジナリチーを持つて居る。想像はいかにも自由である。何んなことでも想像が出来る。しかし自然に逢ふと、霜が朝日に逢つたやうに忽ち解けて了ふ。アンドレエフの作品が讀んで居る中は面白いが、跡に深い強い印象の殘らないのはその爲めである。夏目漱石氏の描く人物が深い個性に入らずに、類型の程度に留つて居るのもまたその爲めである。

『門』に出て來るお米と宗助に就いて見ても、二人があゝいふ生活をしてゐるだけは解るが、それ以上に二人のパーソナリチーといふやうなものは出て居ない。あゝいふ一人を自然にあつたものにして考へて見ると、何うしてもあれだけであるとは思はれない。生きたモデルがあつて、作者が十分に其真相を描かうとする心があつたら、決してあれだけではたゞ下らないと私は思ふ。そればかりではない、漱石氏の作には、よく作中人物の心理を揣摩して書いてある。そしてそれが作者の想像した一般的類型的の心理で、作中人物の箇々の心理でないことがよくある。そして氏はさうした心理は描くが、状態描寫（此處から黙つてゐても作中人物の心理が出來るのである）には、甚だ力を注いで居ない。細かい雜多紛々が状態を現はす上に於て、非常に有益であるといふことなどは殆ど考へて居られないやうに私には見える。

作中人物の心理を揣摩して書くことが、創作上、類型に陥り易く、説明に陥り易いので、それで成たけそれを避けて、状態描寫を遣らうとするのである。想像に頼らずに事實に頼らうとするのである。想像と事實との本體論などは、實は何うでも好いのである。

世の中にはよく完全といふことを心がけて進んで行く人がある。結論に達しなければ承知が出來ない人がある。由來結論とか法則とか言ふものの役に立たないことは分り切つて居る話である。私はいつも文壇で度々論じられる『事實と想像』との問題がいつもこのつまらぬ本體論になつてゐるのを馬鹿々々しく思ふ一人である。

何事に由らず、實際界に於ても、藝術界に於ても、結論に達しないまでの間に於て、面白い有益な價値のある気分があるのである。其の細かい空気を知らずに、すぐ結論に持つて行つて、其是非を一舉に決しようとするのは、甚だ淺薄なつまらないことである。『事實と想像』の問題も其細かい處に入つて、今少し深く考へて見たなら、描寫といふ上に於て、非常に利益のあること、思ふ。

描寫に就いては、まだ言はなければならぬことがかなり多い。しかしそれは一々作品の文章、氣分に立入つて論じなければならぬことで、此處では詳しく論ずることが出来ない。しかし現象を現象として見る氣分が分析といふ位置を基礎にして出發して、人生的藝術派と言つたやうなところに進んで行つて、其處に眞の描寫の氣分を出して來るといふことに就いては、一通りは言つた積りである。

文章新語

説明の文章

自分を發足點にして書くといふ場合と、自分を脇に置いて、離して書くといふ場合と、この二つが文章を書く上に明かに區別されて居ると思ふ。

自分を其儘に出すといふ形——それは叙述文でも日記でも記事でも皆さうだ。つまり自分の觀察を中心にして、自分の感情なり思想なりを現はすに都合の好いものをくつつけて選んで書いて行く。

また觀察が少し位偏つて居やうが何うしやうが、感情が誇張されて居やうが何うしやうが、さういふことには構はずにドシ／＼書いて行く。

自己中心の文章——抒情的文章——詩歌のやうな文章——

『あゝわが願』とか、『あゝわが涙』とか、さういふ文字がよく使用されてあつて、作者の感情が生のままに出て來る。客觀化といふことが全く加はらない。

此種の文章は書く人も多いし、書きよくもある。やゝともすると、説明の文章、お話の文章、感嘆の文章になる。

投書などを見て居ると、これが可也に多い。それから日毎に見る新聞紙上などにもこれが多い。書いた人の學問と素養とがそのまま、露骨に解る。

状態描寫

私の經驗に由ると、凡そ物を離して見るといふ氣分になるといふことは、容易なことではない。いつか自分が出て来る。離れたと思ふとすぐ即いてる。

其事を忠實に描いてるつもりで、いつか自分がそれを説明したり叙述したりする形になつて居る。

理窟が出て来る。批評が加はる。思想が文字の上まで現はれて来る。

その状態を描いて居るのではなくて、筆者が説明したり叙述したりする形になつて居る。

お話をするといふのを例に取つて見ると、上乘なお話は、決して話す人の註釋や解釋が加はつて居ない。唯見たまゝ聞いたまゝお話をする。處が下手なお話はそれとは反對に、其處に説明をつけたり解釋をつけたりする。そしていつまでも聞く人のイリュージョンを破つて了ふ。

筆を執つて書かなければならないのは、其事柄ではなくつて、その状態だ。

例へて見れば、日毎に新聞の三面に出る記事、あれを読めばその事件の筋道だけは解る。其理由も解る。時に由ると其中心の思想までも判断することが出来る。しかし状態は解らない。何ういふ男や女が居て、何ういふ事情の下に、何ういふ時日の經過の後に、さうした悲劇が起つたかといふことは説明や記事では容易に解らない。苟も筆を執る以上は、凡そさうした状態といふ状態を讀者の眼前に歴々と再現させて見せる位の覺悟がなくてはいけないと私は思ふ。

状態は描いて見せなければ、出て来ない。描くには、筆者の頭にその状態が分明と映つて居なければ出来ない。

口では言へないことをも筆で見せる。描いて見せる。此處に細かい文章の苦心も價值もあるのである。

印象的描寫

『長い叙述よりは短い描寫』と私はいつもかう思つて、筆を執る。

何んな文章や小説を読んで見ても、生々としていつまでも頭に残つて居るのは、矢張描かれた箇處である。理窟でもなければ思想でもない。

描かれたものは常に具象的である。常に斬新である。描かれたものはそれ自身の價值を常に語つて居

る。

此頃唱道されて居る新傾向の俳句といふものは、その意味に於て甚だ面白いと思つて私は見て居る。難解に過ぎるやうなところはあつたが、あれは描くといふ上から來た自然の結果で、それを見る眼を持つた讀者には別に不思議にも難解にも思はれまい。

印象的といふところを深くねらつて入つて行つたのが私は好きだ。

私は昔の和歌や俳句を讀んで見る度にいつもさう思ふが、理窟や思想や譬喩などを用ゐることを喜ぶものは多くは拙い作者で、すぐれた作者になればなるほど、描寫したものが必ず多い。蕪村の句などをよむと殊に其感が深い。

今の和歌は、その點に於て十分發展して行かなければならない餘地がある。

物を見てフレッシュな感を起すといふことは、其作者の眼なり心なりが、描くといふ氣分に達した時の状態である。

少くとも私一個人に取つては、さうである。分明と物が見える、その物は、必ずフレッシュに感じられたものである。馴らされない、汚されない、厭きられないものである。

筆を執るものは、描くといふ氣分を貴ばなければならない。

昔は小説は物語風のものが多かつた。説明的のものが多かつた。ツルゲネエフの作にさへさうした嫌

らない處が随分ある。一考すべきだと思ふ。

離れた氣分と情調

紀行文でも、さういふ風にして書いて見たい。

連絡などはどうでも好い。筋なども何うでも好い。其の通つて行つた處の土地のある感じ——地方的色彩の伴つた細かい感じをほつ／＼書いて見たい。或は海の一部、或は旅館の半時間、或は橋の上の十分、或は路傍の茶屋と言つたやうに——

西鶴の文章は、味つて見ると、餘程さうした處がある。簡短にして細微、散漫にして整然たる處がある。現象の複雑から來る複雑、それが殊に及び難い。

描くといふ氣分になることの貴ぶべきを私は前に言つた。文章を書くものは先づさうした離れた氣分を修養することが、一番肝心である。

物に頓着しない心と巴渦に捉へられない心と、さうした處から、この氣分の新しい泉は滾々として湧き出て來る。

情緒とか情調とかいふことが此頃はよく言はれる。

情調を説くは好い。しかし情調に執るのは、情調を作品に有効に現はし得る路ではない。情調は作

品の背景を成すに於て始めて意味がある。

情調を説明で出さうとして居る筆者がかなりある。後戻りであると私は思ふ。情調は消化されたものでなければならぬ。殊に藝術に於ては――

ノートと寫生

私は文章を書く上に常にノートに寫生して置くといふ方ではないが、しかし時には細かい寫生を遣つて置くこともある。それが外面の寫生ばかりではなく心理の發展する状態なども書いて置く。けれども細かい處に入つて行くと、單に寫生では駄目になつて来る。仕方がないからさういふ時は一種の符號見たいなものを記しつけて置いて記憶に便にする。

丁度畫家がノートに人の顔の輪廓やら表情やらを鳥渡書いて置くやうに、會話の一句やら態度の千變萬化などと言ふものに注意を拂ふ。癖なども其人物を活躍せしめる程度に於て覺えて置く。

物が見えるとか、周圍が解るとかよく言ふが、これは即ち觀照的になつた形で、筆を執る者には是非ともこの特質がなければならぬ。それが無ければ修養を積んで、それを得るやうにしなければならぬ。

ノートに寫生して置くことは、面それに手頼る處から、忘れる時機を早めるやうなことがないとも

限らない。『僕はノートなどを持つた例がない。ノートに書いて置くと、屹度其細かい空氣を忘れて了ふからねえ。忘れて了つては、ノートにいくら詳しく書いてあつたつて、何の感興も起さない。』かういふ人がよくある。私も初めはさういふ風であつた。感興といふことを非常に重んじた。實際、感興でなくては書けなかつた。しかし感興では細かい處に入つて行けないといふことが段々解つて來た。抒情的には好いが、描寫的には感興は餘り效のないものであるといふことも解つて來た。

私はそれからノートを用ゐた。

私のノートは旅で用ゐるのと、平生使ふのと二通りある。旅のは小さい手帳で、それに鉛筆で書く。山の色だとか、旅館のつくりだとか、途中で逢つた女の顔の印象だとか、さういふものが無數に書いてある。そしてそれに圈點だの爪點だのをつけてある。平生使ふのは、半ば日記半ば控帳と言つたやうなもので、思ひついたことを亂雑に書いて置く。他人には解らないが、その亂雑の中に自分はある統一をつけて置くやうにする。

すぐ文章になる材と、三年も四年も持つて居て、それが段々纏つて來る材と、持つて居て終には腐つて了ふ材とがある。筆を執り始める氣分になるまでが、中々大變である。

それから書始めが難かしい。これは誰でも經驗する處だらうと思ふが、力を注がうと思へば思ふほど、初めの一行二行が氣になつて書けない。五枚も十枚もむだにして了つてまだ書けない。時には何んなに

力を盡しても其の半枚が満足に書けない時がある。つまり集中力が十分に働いて来ないためであらうと思ふ。

しかし此頃では、私は餘りその最初の一行を氣にしなくなつた。寧ろ氣にしないやうな癖をつけた。初めが旨く書けなければ好い作が出来ないといふやうな理由のないことが、段々解つて來た。私は唯だ充實を圖ることをつとめた。

『筋』

文章の全體のコンポジションに注意すると共に、局部々々の充實をも十分に圖らなければならぬのは言ふまでもない。

私に言はせると、全體のコンポジションより或は局部々々の充實の方が一層大切であるかも知れない。局部の充實が完全に行はれると、全體の感じは、自然と出て來る。

コンポジションといふことは、自然のコンポジションでなければならぬ。筆者の描いたやうな痕跡が見えると、多くは興味索然となつて了ふ。『實際にある筋』それに注意して見ると、餘程、眞のコンポジションといふことが解つて來ると思ふ。

けれど一方から言ふと、この『實際にある筋』が初學者には容易に見えなくもありつかめなくもある

のであらう。『それが解れば占めたものだけれど、それが解らないから、かうして苦心して居るのだ。』かういふ人が多いであらう。道理なことである。

『筋』が分見と見えるやうになるには、第一周圍を見る眼を養なければならぬ。次に細かいものに注意を拂ふ習慣をつけなければならない。自分の興味で物を見る悪い癖をやめて仕舞はなければならない。殊に一番肝要なのは、物に對する批判力である。

すぐれた作品は、必ず筋が線をなしてくつきりと透つて居る。そしてその線の上に立派な自然のコンポジションが見えて居る。

『筋』の上に絶えず注意を拂ふことが必要である。

文章と對話

文章を書くのと、話をするのとは似て居る處がある。始めは多くは凝滞して、旨く出て來ないが、一たび糸口を得ると、それからスラ／＼と出て行く。

始めは句と句との組合せなどが順序よく出て來ない。始めに出て有效な句が後に出たり中頃に出たりする。それが糸口を得ると、そんなことはなくなるばかりではなく、後にはそれを顧みて居る暇がないといふ風になつて行く。

しかしこの興に乗じて、筆を走らしたり、口を滑らしたりすることは、餘り好いことではない。興を抑へて、よく物を考へて、周圍を見廻して、そして筆を執るなり口を利くなりしななければならぬ。開いて放てば、背景が兎角空虚になり勝である。抑ゆる心、其處に充實した背景が出来て来る。しつかりした背景の無い文章は、饒舌なる言葉と共に人を動かすことが難い。

句と句との組合せ方、言葉と言葉との組合せ方などは殊に心を用ゐて考へて見なければならぬ。組合せ方如何に由つて、意味が軽くもなれば、重くもなる。流暢な會話が耳には快く感じても、考へて見ると存外内容が乏しいのと同じく、輕快な文章は、兎角文章の量が内容の量よりも多くなり勝である。才子の文はまことの文章でないと言はれるのもその爲めである。

それから調子といふことも、文章を書くには必要である。しかし、この調子はその人自身の總てから出て來た調子でなければならぬ。色、音響、姿勢——それら總てそのまゝに出て來た調子でなければならぬ。此境は難かしい境ではあるが、邪路に入らなければ、容易に達し得らるゝ境でもある。

新しき紀行文

紀行文は今少し發達すべき運命を有つてゐる。今日まであつたもの、今行はれてゐるもの、其以外に今少し特色のあるものが出て好い。

描寫一方で紀行文を書くといふことは、しかし出来ないことだ。紀行文と小説とは、其本來に於て、既に約束が違つてゐる。旅を記するの文は、何うしても叙述の筆を用ゐなければならぬ。

無論、一人の人が天然の萬物と人間の生活を見て歩くのであるから、其人の眼に映つた感想なり、叙述なり、寫生なりで好いが、その眼に映り方如何によつて、其の内容が複雑にもなり、單純にもなる。

旅行をする人は、直覺が鋭敏であると共に、旅をする地方其ものの知識に富んでなければならぬ。知識がなければ、豫めその知識を豊富にして置かなければならぬ。其地方の沿革古蹟は勿論、現今に於ける其地方の生活状態、産業、地形、さうしたものを詳しく研究して行けば行くだけの利益は必ずある。普通の人は只單に其處を通つて行くばかりであるが、さういふ風に研究して行つた人には、其地方の印象が必ず分明と映つて來る。直覺から來る現象の尊ぶべきは勿論だが、理解から來る印象は、其印象の輪廓を益々鮮かならしむるものである。

若い人達の旅行は直覺の印象を重んずる旅行が多い。眼に映り、頭に残つたものだけで満足する。時には、地方の生活状態などは却つてその直覺を損するものだと思ふことすらある。しかし、旅は矢張知識に富んだものの旅が面白い。

知識に富まないものは、一度行つて分るところが三度行つても解らないといふやうなことがある。旅行は一面遊樂であるから、さういふことは何うでも好いといふ人もあらうが、しかし矢張それでは面白

くないものだ。研究心があつて始めて、旅は興味が複雑して来る。

紀行文は長い連續を要する。一箇所の詳しい描寫よりは、長い連續の下に出来て来る一種の空氣が讀者の興味になる。乙羽君の『千山萬水』は紀行文としては、さう大してすぐれたものではないが、長い旅で、そして細かい處をチョイ／＼と書いてゐるので、全體としての感じが面白い。

紀行文集を旅の鞆に入れて行く人は、この自分の前に旅行した人の足跡を見て喜ぶといふやうな處があるのである。前人の宿つた旅籠屋などをわざわざ／＼捜して泊る氣になるものである。かういふ實際方面から言つても、紀行文は小説などのやうに描寫を重んじてばかり居られないといふことが解る。だから昔の人は旅行記にわざと面白い滑稽談を入れて書いた。篁村翁の『旅行記』などは、食物と洒落と失敗とを書いたやうなものが多い。硯友社の人々の書いた『旅行記』にもさうしたものが多數を占めてゐる。旅行者の洒落と失敗と、其土地の奇なる風俗の紹介と、さういふもので成立つてゐる。毎年夏になつて、新聞に載る旅行記もすべて紹介的の記事が多い。

で、紀行文は今一段の進歩をして、新しい紀行文が出来て来なければならぬと思ふが、では、何ういふ風に書いたらと言ふと、一問題である。

長い連續を要するから、印象されたところだけを選んで書くといふ譯には行かない。と言つて長い連續を書くと、何うしても單調になり易い。昔のやうに交通が不便で、鬼が居たり蛇が居たりする時代な

ら話の種は多くあらうが、今では何んな山の中でも、大抵の人は行つて知つて居る。従つて昔に比べる一層その連續が單調になり易いといふことになる。

西洋の旅行記は、學者の地理的旅行記と、文學者の文學的旅行記と二種類ある。彼方で旅行記と言へば、重に學者の地理旅行記か、探検者の探検旅行記かを指してゐる。モウバツサンの『水の上』のやうなものは旅行記と言つて居ない。其の學者の旅行記は、文章も旨く、學術的知識にも富んでゐるが、しかしわれ等の要求するやうな旅行記ではない。

直覺的印象と理解的印象との好い鹽梅に調和されて、實際のロオカルがその句と句との間に、そして批評と感興とに富んだやうなものが出来たなら、さぞすぐれた旅行記が出来たであらうと思ふが、單なる理想に過ぎないかも知れない。

つまり新しい紀行文は地圖の精確と繪畫の妙味とを持つたものでなくてはならない。

文章の調子

如何なる人の文章の經歷の中にも、一度は絢爛な調子の好い文體を好んだ時期があるに相違ない。そして何時とはなく其れが厭になつて、まるで反對な文體を愛するやうになつて来る。此事は其人其人によつて時期の長い短いはあるが、誰しも同一轍を踏んで居るらしい。

絢爛な調子の好い文章を、文に老いた人の眼から評して、彼は幼稚なるが故にあつた文章を書くのだと言ふのを聞いた事がある。此れは異議の挿めない評言で、幼稚だといふ意味は取去る事が出来ないに相違ない。しかし其れと同時に、如何に文に老いた人であつても、感情の激越した時に作つた文章は、矢張り絢爛な調子の好いものとなつて来る傾向がある。弔文などを讀んで見た時に、彼の人が斯うした文體を書くだらうかと、其人の平常に比較して寧ろ異様に感じるやうな事は往々ある事である。

絢爛と平淡とは暫く措いて、文章の調子の好い悪いといふ事は、必ずしも其人の趣味の幼稚と老熟といふ事とは一致して居ないらしい。好い調子を要求すると否とは寧ろ他の原因からのやうである。

我々が單に自分の感情を語るのみで、其の感情が他に如何に響くであらう、又如何に傳へやうといふ事に注意を拂はない場合には、其の文章は必ず調子の好いものとなつて来る。即ち相手といふ條件を取り去つて、手放しに呑氣に物を言ふ場合には、我々の感情は自然に調子を要求して来る。弔文などに於て見る調子の好い文章といふのは斯うした心理から作られるものでは無からうか。

が我々は何時までも此の調子の好い文章に甘んじては居られなくなる。其れは自分の作る文章は別として、他人の作つた其種の文章を讀んで居る中に、我々はさうした文章の我々に與ふる効果の案外に小さなものであるのに心附いて来る。其れは我々の心持は何時も躍つては居ない。否寧ろ平靜な場合が多い。さうした場合に他人の躍つた心持の文章を見ると、其れが自分の心持とは一致せず、文章だけ前へとつ

とと走つて行つてしまつて此方の心持は後へ残されてしまふ事を感じる。所謂上すべりのした文章といふ感じを與へられずには居られない。さうした經驗はやがて自身自身の文章を顧みさせる。今迄唯一の文體だと信じて居た調子の好い文章の案外にも駄目なものだと心附いた時には、我々は失望を感じ、續いては如何なる文體で書けば好いのかと迷ひ出して、一しきりは茫然としてしまふのが普通のやうである。

斯うした場合に、文章といふものは唯自分獨りのものでは無い、必ず相手がある。自分の心持の調子の出たとしても、其の調子が相手の胸へも響くものでなければ何の甲斐も無い。文章の優れたものといふのは、自分の心持の調子と相手の心持の調子とつくり合ふもの、即ち呼吸の合つたものである。文章の標準は其所にあると、斯う早く心附いた者は幸福である。

即ち文章は、自分獨りのものであつたのが、新たに相手といふものが加はつて来て、双方のものとなつて来たといふ事によつて、一段の進歩を加へるのである。そして此の相手が次第に明瞭になる事によつて益々進歩の度を加へる。そして相手が明瞭に感じられながら、其れが邪魔とならずに恰も相手の無いもののやうに自由自在に書ける事になつて、恐くは文章の頂點といふのであらう。文章の進歩の路はこの一路に繋つて居るやうである。

調子といふものには我々は乗りやすいものである。又實際我々は或る時或る調子の高い物を讀んだり

聞いたたりして、其れでなくては感じられないやうな快さを感じる。例せば淨瑠璃のさはりである。我々は上手の語るさはりを聞く時には、まるで音楽を聞いて居るやうな気分になつて、其中に言はれて居る意味などは二の次として、先づ其の調子に酔はされてしまふ。併し此所に注意しなくてはならない事がある。如何に聴衆を酔はせるを以て能事のやうにして居る義太夫でも、決して初めからさはりは用ゐない。其前に必ず地味な部分があつて、調子の高いものがあつて差支の無い場合となつて漸く惜しむやうにさはりを用ゐて居る。如何に有效なさはりであつても、初めから終ひまで此れであつたならば、其の效果の無いのみか寧ろ倦怠を感じるであらう。

調子の多過ぎる文章と共に厭なのは、國文學者漢文學者の作つた文章の中の或る物である。彼等はあゝでも無い、斯うでも無いと凝つた揚句に、唯自分のみの文章を書き出す。何所までも自分の趣味を満足させるのを旨として文章の二條件の一つである所の相手といふものを、殆ど閑却したかのやうなものを書く。其人の修養を思つては當然優れた文章でなくてはならないやうな感がして迎へ讀んで、失望に次ぐに反感を以てするのは斯うした種類の文章である。

筆者と相手との呼吸の一致、文章は其處まで進むべきものであらう。

自然の描寫

ツルゲネエフの自然描寫は餘程情を景に託したところがある。人間を自然の中の一部と言つたやうにせずに、自然と人間とを離して見たやうな處がある。

情迫つて景を叙し、景迫つて情生ずと言つた風だ。自然を描くといふよりも自然を假りて人間の心持を叙するといふ傾向がある。

従つて天然と言ふものが、時には運命説的になつたり、時には憧憬の情のシンボルになつたりする。流石に形式的の剪裁ではないが、思想上の見方からは、餘程さうした剪裁が施してある。

自然の中の人間——草や木や鳥や獸や、さういふものゝ中にゐる人間、かういふ心持で、ツルゲネエフは自然を取扱つては居ない。此處が印象派の自然描寫とは趣を異にしてゐるところである。

印象派の自然描寫は自然と人間とを離して居ない。人間を自然の一部として見て、ある時は草や木と同じやうに人間を見ることを憚らない。従つて自然が自然として出て来る。人間が見た自然といふよりも、まことの自然に近い自然が出て来る。

人間の好悪で見た自然でないから、即いてもゐないし離れても居ない。あるがまゝに自然が出て来る。一つの花が特に他の花に比べて美しいと思ふ心ではなくて、この花はかういふ特色を持つてゐる。こ

の花はかういふ他の特色を持つてゐる。つまり自然の中にあるものにかういふ風に區別は認めるが、自己の選擇上の價値を加へたくないといふ處から印象的の氣分が起つて來るのである。

知識の無い昔にあつては、人間に取つて自然は無關心無關係の状態にあつた。そして天然の盲目的威力に對すると、唯恐れ戰いて居た。其處に迷信、信仰、神などといふことが言はれた。しかし知識が加はつて來るのに従つて、天然は段々人間に近くなつて來た。今では人間は自分は自然の一部分で、草や木や鳥や獸と同じやうに生活してゐると思つて來た。自然の描寫法も變つて來ない譯には行かない。

山、川、海、草、木——これ皆な人間と同じ存在である。唯、存在してゐるばかりである。各其の意味を以て存在してゐるばかりである。藝術が善惡の藝術、美醜の藝術である時代ならばいざ知らず、今日の時代では、自然描寫も情を景に託する位の程度には留まつて居られないと思ふ。

手紙の雰圍氣

手紙は雙方の心を打開いた形になるので、それで書くのが難かしい。文の面から互の心持を捜すといふ様な微妙な感覺が常に其上に動いて居る。會話は自由で、そしてすぐ消えて了ふものであるが、手紙はさうは行かない。いつまでも残つて居る。いつまでも證券として保存され得る。

手紙からは、先づ第一に先方の氣分を考へて見なければならぬ。何の位の程度の氣分と思慮と考へてこの手紙を書いたかといふことを考へて見る必要がある。そして其氣分を取卷いた雰圍氣の中に先方を見出し、また自分をも見出すのである。

だから、簡單に考へる人に取つては、手紙位簡單なものはないし、複雑に考へる人に取つては、手紙位複雑なものはない。手紙には一小自然を成して居るやうなところがある。

手紙を読めば、情偽のある手紙にしる何しろ、大抵其人の氣分と性質とは解るものである。手紙には、其人の心が言葉の調子の中に何處となく必ず現はれて來るものである。この意味から手紙は大切なものだと思ふ。

それだから注意して書く、と言ふよりもそれだから誠實を以て、全心を以て手紙を書かなければならないと思ふ。先方の手紙の文の面の陰にある雰圍氣を細かに判斷して、そして自己の誠實を披瀝したところが、まことの意味の手紙に成立つ。

誠實、全心。これに打勝つ術策はない。何んな術策でも誠實と全心から來る自然の姿に打勝ち得るものはない。むしろ最上の術策は自然の姿の上に成り立つたものでなくてはならない。

古人も手紙といふものは、餘程注意したものらしい。『新安書簡』などを讀んでも、それがよく分る。禮儀と誠實、さうした處に常に立場を置いて居る。

青年時代には手紙の遣り取りをよくするものだが、中年から老年になると段々それが少くなつて、後

には用向だけの手紙の往復になる。これはいろいろな理由もあらうが、互の手紙の陰の雰圍氣が段々複雑になつて、容易に手紙が書けなくなるのもその一理由であらうと思ふ。

雰圍氣といふことは面白いことだ。

日記の種類

『日記には自己の経験した如何なることを書くことが出来るだらうか。日記にはまだ虚飾がありはしないだらうか。』かういふ話を私はある友人としたことがあつた。

『何うも、僕などは、まだ幾らか虚飾の心持が其中に交つてゐるやうだ。』其友人はかう言つて笑つた。

獨歩の『欺かざるの記』には、かなり自分の心が書いてある。随分思ひ切つても書いてある。しかしまだ虚飾がないとは言へない。それに、全然誤つて居ることをわざと筆を舞はして、自分の好いやうに辯護して書いてあるところなどもある。

一茶の『日記』は随分思ひ切つて書いてあるもの、一つだ。しかし、あれでも虚飾がないとは言へない。一步を譲つて、虚飾でないとしても面白がつて居るやうなところがないとは言はれない。×××の印をつけたところなどは、多少俳諧師としてのユーモアを偲ぶに足るが、しかしこれとて一種の好奇心と言へば言へる。

『人間といふものは一人で居ても、虚飾といふ心を忘るゝことが出来ないものだからねえ。』かう其友人が言つた。

従つて『日記』の陰の雰圍氣と言ふものも亦面白い。『日記』に顯はれた其人の人物は、大抵正面的で、側面的でない。卽ち居て離れて居ない。空中に浮き出して居ない。だから、作者が『日記』を材料にして其人物を描かうとする場合には、全然其の『日記』を信用することは出来ない。その感想と情緒とは殊に信用することが出来ない。

だから、『日記』は事實を書いて置く方が好い。かう思つたとか、あゝ思つたといふことよりも、かういふことをした、あゝいふことをしたといふ行爲を書いて置く方が『日記』といふものゝ本來の性質に叶つてゐる。自己の後年の追懐の爲めにする上から言つてもその方が便利だ。『十千萬堂日録』は流石に紅葉山人だけあつて、事實が多い。そこからいろいろな場景と情緒とを想像せしむるに足る事實と行爲とを記したものがない。それに引かへて『欺かざるの記』は前半は感想と情緒とが多く、いつも同じことを繰返し繰返し書いてあるのでちき倦きて了ふばかりか、印象が一つも分明と浮んで來ない。『若い人の日記』と言つたやうなところがある。

新しき情緒

新らしい情緒と言ふことが言はれる。非常に好いことだと思ふ。新しい人は飽まで其情緒を新たにし、其の憧憬を新たにし、その内容を新たにしなければならぬ。

新しき學問、新しき知識、新しき要求、さういふ所から、新しい心が生れて来る。自然は常に同じことを繰返すのではあるが、また常に新しき表現を以て人に臨み世に臨むものである。

情緒は青年に盛んにして、中年老年の境には割合に少ないものである。青年時代は理解せんと欲する念よりも、吸収せんとする情に熱する。いかなるものも生々として見えるものである。それに、経験が乏しく、理解が十分でないから、想像力も豊富に、好奇心も熱烈である。理解によつて、イリウジョンを破られるやうなことが少い。

今の情緒は往年のセンチメンタリズムとは餘程趣を異にしてゐる。往年のセンチメンタリズムは單なる憧憬の情緒で、その背景も單なる理想と言ふもので塗られてあつた。消極的で、そして小さな判断力に縛せられてあつた。靈肉の一致の上に生れた情緒と言つたやうなものは殆どなかつた。

情緒は重に感情の部分であつて、知覺の部分ではない。しかし知覺の感情に蔽はるゝ青年時代にあつては、情緒は殆どその全部である。

青年時代に新しい情緒を抱くことの出来る作者は、尠くとも有望な作者である。ナチュラリズムはこの情緒、憧憬などといふところから反對に知的に出て行つたものであるから、情緒を生命にする作者には、入つて行き難い境でもあり、入るのを恐れる境でもある。けれど一度『自然の真相』に面して立つやうな機會に遭遇する時には、情緒を豊富に有した作者は、一層深い見方をする事が出来ると思ふ。フロオベルのロマンチック、リアリストなどといふ例も此處に引くことが出来ると思ふ。

中年、老年に至るまで、主觀一方、情緒一方で立つて行く作者もないが、年齢の分けかたから言つて、人間は何うしても一度は、『自然の真相』にぶつかつて見なければならぬ時代が来るものであるから、その來た時には思ひ切つて、自己を組の上に置いて、ヂツとしてメスを取られるのを甘んじなければならぬ。

青年の心持の凋落。かういふことは誰も感ぜずに居るものはあるまい。理想の敗滅、イリウジョンの敗滅、それから起る悲哀を味はずに一生を送ることの出来るやうな藝術家は多くあるまい。青年時代の考から云ふと、この『自然』に對した形は、自然に向つての屈服、物質に向つての敗北のやうに思はれるけれど、此境に至つて、始めて自己と自然との深い神祕な關係を知ることが出来るのである。此處に靈肉の一致したるまことの境があるのである。

今の文壇に情緒を唱へる聲がかなり高く聞える。自己の感じを感じたまゝに出さうとする作者も多い。

そして其の情緒なり、その感じなりに新しい姿と心を持つてゐるものも尠くない。しかしこれは其人達の準備時代であることを忘れてはならぬ。今日思ふ心を開いて見せるのは、他日それを押へる階梯であることを考へて見なければならぬ。新しい情緒、新しい憧憬、それに淫せず、すぐそれを驅使し得た人に、意味ある深い新しい時代が開けて來ること、思ふ。

情緒が其人々の背景になり、其作品のほひとなるやうな時代が待たれる。

新傾向の俳句

新傾向の俳句は飽まで描寫で行かうとする運動であるらしい。説明的、斷定的になることを第一に嫌ふ。それから作者の心地で物に對しての解釋をつけることを嫌ふ。あはれとか悲しいとかいふ主觀的感情を加へることを絶対に避ける。

梅 一輪 一輪 づつ の 暖かさ 嵐 雪

此れには餘程作者の感じた主觀が入つてゐて、一輪、一輪づつに暖くなつて行くといふ處に手柄を認められて居るのであるが、其處に却つて作者の小さい解釋見たいなものが附いて居て面白くない。何だか自然を拵へたやうな氣がする。

梅 咲いて 湯殿の 崩れ直しけり 利 牛

これなども梅が咲いたが爲めに、湯殿の崩れを直すといふ作者の趣味から來たやうな處に小主觀的のいや味がある。湯殿の崩れを直すやうなことをしない人から見れば、この作者の趣味嗜好が甚だ低いと言はれるやうなことになる。これは内容のことが、内容の是非でなしに、自然に對する見方から言つて見ても、梅が咲いたから崩れを直すといふ風にせずに、梅が咲いた、其處の主人が湯殿の崩れを直してるといふ風に見れば其處に描寫——新傾向の味はひが出て來る。作者は主觀の解決を加へずに作者が自然からさういふものを見たと言ふ風になる。従つて大きな解決のついてゐない自然が陰に無限に現れて來るといふことになる。いかやうにも其處から味が出て來る。

春もやゝ景色とゝのふ月と梅 芭 焦

これも矢張主觀の厭味がある。『景色とゝのふ』といふ處に加へないでも好い作者の考へが加はつてゐる。『景色とゝのふ』と斷らずに、月と梅の状態を描いて、春色漸く闌ならんとする心地を讀者に知らせるやうにするのが描寫の本意である。これでは説明になつて了ふ。作者が無理にその見たところを讀者に強ひるといふ形になる。

月させどよくく暗き椿かな 乙 二

このよくくが矢張作者の考になつてゐる。よくくなどといふ字をつかはずに、もつと具象的に描いて見る苦心がなければならぬ。

春の水とところづくに見ゆる也

鬼貫

『見ゆる也』と言つたところに、矢張作者の考がある。

で、昔の句からかういふものを拾つて見ると、いくらでもある。その半ばはさういふ種類であるといつても好い位である。蕪村あたりになると、餘程かういふところを脱してゐるけれども、それでも主觀の句がかなりある。

折釘に烏帽子かけたり春の宵

蕪村

春の宵に烏帽子を取合せたところが、矢張趣味といふやうな境を脱却してゐない。前の數首から比べると、それでも餘程平面的、描寫的になつてはゐるが、それでもまだ俳諧の面白味といふやうなものに捉はれてゐる。

初午やもの種賣に日の當る

同

一三の句はいかにも描寫式で好いが、初午やと言つた初五文字が矢張季題趣味に捉へられてゐる。

明治の子規あたりの句にも、まだ矢張さうした處がある。眼に映つたものを、すぐ頭なり心なりに取り入れて了ふ。兎角感じをまとめたがる。剪裁——小さい剪裁を施したがる。中心點を求めたがる。描寫といふ意味が根本から徹底してゐない。

よべ梅と見しは雪にほの赤き杏なりし

此處にかういふ句があるとす。『よべ梅と見しは』がいけない。『よべ見し梅は』とすれば、よほど描寫になつて來る。それに、雪にほの赤きがいけない。雪にほの赤きといふ所が説明になつてゐる。

蜺歩るく砂日に澄んで水淺し

かういふ句を作つた人があつた。これで一通りは聞えてゐる。しかし『水淺し』が説明的氣分になつてゐる。『淺き水』としたら何うだらうと言つた。さうすれば、説明でなく、描寫になつて來る。『水淺し』と作者から説明してきかせられずに、成ほど淺い水なのだといふ感じが素直に讀者の頭に入つて來る。

男海女海背合せ松を行く汐干

青倫といふ人の句である。博多の天の中道を描いたのである。いかにも描寫三昧に入つた好い句だ。天の中道の春の感じを此位に言ひ得たのは尠いと思ふ。其の實景を知らない人には面白味が解らないやうなところにスペシアルなリアリティーがあるのである。

それから近頃見た句の中に、

小春寺に行人語り合へり鶴の事

といふのがあつた。昔なら、小春日に鶴を取合せたことは、舊套に墮したことであつて、甚だつまらない着想でもあり作意でもあるのだが、此句には何處となく一種の新味がある。何故かと思つて、其の理由を考へて見ると、矢張『あつたこと』といふことが其原因を爲してゐる。何んなに古い取合せでも、

あつたこと、即ち作者が眼で見たことには、何處かに新しいものがあるものである。自然は幾度くりかへしても決して舊くならないものである。必ず何等かの新しい表現を以て顯はれて來るものである。此句なども作者が小春の日に寺に行つて、行人の鶴のことを話し合つて居たのを見た處から出て來た表現の新しい味があるのである。

つまり、新傾向の俳句は、餘ほど眼を重んじてゐる。眼から入つて來る最初の現象を細かく再現しようとするやうなことが際立つて眼に附く。

現象——生々した現象を重んじてゐるので、頭腦や心でこね廻したり何かしないところに新味がある。解釋の自由といふことが其の特色である。

それから難解といふことも、今では新傾向の特色の一つになつてゐるやうである。成程、讀んで見ると、わざと難解を銜つたと思はれるやうなものもをり／＼見あたる。難解は無論新傾向の俳句がその描寫を本にしたところから起つて來るのであるから差支はないと思ふが、しかしその難解は理由ある難解でなければ駄目である。わざと奇を好んで難解にするのは邪道である。

それから、近頃は、この新傾向の俳句を、新しい主觀、新しい情緒といふ方面に持つて行く人があるが、これはその根本の意義に於て違つて居はしないかと思ふ。

模倣と創意

模倣といふことは、若い人には止むを得ないことかも知れないが、餘り好いことではないと思ふ。模倣は皮相に留つて居ることが多い。

若い人達が古今の作品を讀んで、それに感心したといふことは、自分の其時の學識と年齢と經驗との程度に由つて感じたことであつて、決して其の作家の作品の價値の全部に觸れたものでない場合が多い。従つて感心して居るだけならば、修養の補足になつて好いが、それを模倣するといふ段になると、兎角虎を描いて猫に類するたぐひになつて了ふ。

模倣を遣つて、かなりに旨い文章を書く人は、雑誌の投書家などにも随分多く見當る。年が若くつてよくもかう旨く書けると思はれるやうな人が随分ある。しかし自己の特色を持つて居ずに、模倣のみでやつてゐる人はその型がすぐ出來て、瞬く間に生々としたところがなくなつて了ふ。模倣には創意のやうな自由と複雑とを望むことが出來ない。

苟くも文章を作る人は、だから、模倣などを遣つてゐては駄目である。飽迄自分の特色を發揮し、自己の持つて居るものをドシ／＼出すやうにしなければならぬ。

しかしこの自己の持つてゐるものを出すといふことは、中々難かしいことである。第一自己の持つて

あるといふものが果して如何なるものであるか、それが解らない。それが臆ろけながらも好いから解つて来るやうになるには、餘程の修練が必要である。水と火との戦ひのやうな暗闘黙闘をも経なければならぬ。自己の内部の動搖をも経験して見なければならぬ。

自己の特色を出し得れば、大抵な人は讀者を點頭させるやうな文章をつくること出来るのであるが、多くは、いろく、銜氣や虚飾やがそれをさまたける。時には、學問や經驗が却つてそれを礙けるやうになることさへある。

文章を書くには、誠意が肝心だ。これは昔の人もよく言つた。誠意は、つまりまごころとか眞面目とか言つたやうなものである。一たび筆を執つて紙に向つた以上、何ごとをも捨て、自己の本心を披瀝するやうにしなければならぬ。そこから自己が開けて来る。

それにつけても、模倣は無益な努力である。模倣だつて、本當にやらうとするのには随分骨の折れるものである。それは、初心の中は、古今の作品から其文字の遣ひ方や、文章の書き方を習ふのは好いが、少しく筆が立つやうになつたならば、極力自己の創意を尊んで、それに向つて、勇ましく進んで行かなければならぬ。

文字の選擇と辭句の排列

新しい文章を作らうとするには、觀方感じ方を新しくしなければならぬのは言ふまでもないが、文字の選擇に就いても大に心を用るなければならぬ。

文字は遣ひ方如何に由つて、新しくもなれば舊くもなる。文字は作者の心持にしつくり合つた字を用ゐた時に於て、始めて光彩を放つて来る。

しかし文字にも抽象的になつたものと、具象的に生々した姿を保つて居るものとの別がある。抽象的になつた文字とは、曾て一度巧に用ゐられて、それが人の喝采を博し、その模倣者が澤山出來て、遂に平凡になつて了つた者が多い。例を擧げて見れば、『月に叢雲花に風』などといふ文句は、其の最初に用ゐられた當時にあつては頗る面白い比喻でもあり警句でもあつたに相違ないが、今日ではそれが言ひ古されて、何の感興をも惹かぬことになつた。其他漢字の持つて居る面白味なども、漢文のすたれた今日では、何の意味をも持つて來ないといふことになる。『巍然』とか『屹然』とか書くよりも、今の人もすぐ飲込める言葉を以て言ひ顯はす方が讀者を動かすことも出来るし生々した感じをも與へることが出来る。だから新しい文章を書かうとするには、現代に行はれてゐる活語を注意して使ふやうにしなければならぬ。文字の面から、讀者は新しいとか舊いとかいふ感じを起すものである。

次は辭句と辭句との組合せを注意することが肝心だ。多くは辭句と辭句との組合せの上に、其の文章の巧拙が顯はれて來るもので、其處に其作者が何の位の技倆を持つてゐるかといふことが判せられるものである。下手な人が書くと、辭句と辭句との間に何等の含蓄も背景もないが、上手な人になると、其處に無限の色彩やら含蓄やらが出て來て、讀者はその辭句と辭句の間に言ふに言はれぬ味を味ふことが出来るものである。昔、昌平齋あたりで、漢文の學生が名文の誦讀につとめたのも、さういふ辭句の組合せ方を名文の中から得ようとした修練法である。それからフロオベルが自作の文章を聲を擧げて朗讀したといふのも、その辭句の組合せ方に苦心した一例である。紅葉山人などもこれには随分骨を折つたらしい。

そしてこの組合せ方に、其人の文章の生命が懸つて居るのであるから、これが型にはまらぬやうに、自由に、複雑に、生々した姿を帯びさせるやうにしなければならぬ。そしてこの組合せの方法は、自然を主として、その渾圓無礙の境に達する外に術はない。要するに修練である。

觸れるさういふこと

文章を文章として學んだ弊であらうが、今の投書家は多くは文章の活用といふことを知らぬ。文章とは娛樂に書くもの、玩弄的に書くものと心得て居るらしい。

投書を調べながら、何時も其嘆の出ぬことは無いので、眞摯なるもの、誠實なるもの、熱烈なるもの——思ひが衷心に溢れて、何うしても書かずに居られなくなつて書いたといふやうなのがない。

日記や書簡文は、其性質の第一義として、純然たる活用的のものでなくてはならぬ。であるのに、投書家諸君はこれを書くのにさへ色彩や空想や虚飾を多くして、其事實を忠實に描いて居るものが乏しい。諸君は凝つて、骨折つて書きさへすれば、それで上手な文章が出來ると思つて居るであらうが、これは抑々間違の初めで、書くべきことが頭腦に分明と映つて居りもせぬのに、いくら骨を折つて、汗水たらして筆を捻くり回したつて駄目である。否、さういふ人に限つて、外形ばかり色彩をこね回して、内には何物の無いつまらぬ文章が出来る。

寫生を鼓吹した爲め、寫生的文章は随分澤山に集るが、此の寫生的文章でさへ虚偽が多い、虚飾が多い、色彩が多い、今一步進んで、一種舊式の型に支配されて居る。何うも實際に觸れて居ない。

だから、かういふ風に文章を術と心得て居る人は、型にはまつた文章を書かせると相應に書けるが、一度實際に觸れさせると——人を訪問して其話を書くとか、洪水を視察して其實況を書くとか、または實際の物象、人物、事件等を書くとかすると、筆がすつかり萎靡して了つて、活氣も無く精彩もなく、全く其目的を達し得ずに了る。これでは文章を書く甲斐が無い。

また、これとは反對に、かういふ人があつた。手紙を書かせると、いかにも旨い。その表情といひ、

實況といひ、心持といひ、すつかり出て居る。であるのに普通の文章を書かせる、整然として立派に出来て居るだけそれだけ感情も境も出て居ない。何うも不思議だ、君は書簡や日記を書いてはあの位上手であるのに、文章となると何うしてあゝ下手なのだらう。これは屹度文章として社衿を着たやうな氣持になつて書くからだらう。何うだ、君、書簡や日記を書くつもりで書いて見給へと言つた。けれど何うも其氣にはなれね相だ。

實際に觸れる——言ふのは實に容易である。けれどこれが中々難かしいと見える、實際のことを眼に見て居るのだから、何も難かしいことはなさうなものだ。けれど實際と筆とをすつかり一致させるといふことは容易のことでは無いのだ。

この實際に觸れるに就いての經驗を少し話して見やう。實際に觸れる——誰でも實際にすぐ觸れ得ると思ふ。いや、吾々は既にかうして實際に存在して居る一員である、觸れるも觸れぬも無ぢやないか。かう言ふ人がある。けれど此處に言ふ『觸れる』といふのはさういふ茫漠たる意味ではない。今少し細かい複雑した意味があるのだ。即ち存在して居るばかりでなく、はた又實際の一員として實際に觸れて居るばかりでなく、更に實際といふもの、存在といふ意味、實際の一員と言ふ意味に觸れることを言ふのだ。詳しく云へば、吾々が客觀的の態度を以て、實際を見て、これはかうあれはあゝと批判的の立場に此身を置くのを言ふのだ。實際の巴渦の中から離れてそして綿密に其の巴渦を見るといふ態度であ

る。諸君の文章を書く態度はまだ實際の巴渦の中に居て、そして其巴渦をこね廻して居るやうなところがある。巴渦の中に居て巴渦のことを深く細かく知らうと言ふのは困難なことである。これは實際に觸れて居るのでなく、實際其ものの中に入つて居るといふだけである。

苟も文章を書くといふ人は——文章を術として玩んで居るものでない限りは、少くともこの客觀的の『觸れかた』を研究しなければならぬ。此の男はかういふ性質、この女はかういふ性質、又此事件はかういふ心理的傾向といふことを分明と頭腦に入れて、そしてそれを充分に大膽に發表しなければならぬ。さうかと言つて、この客觀的といふことにも餘程難かしいことがある。吾々は曾てかういふことを言つた、『文を書く態度は即かず離れず』である。いかに客觀的が好いと言つて、作者が其實際を餘り離れ過ぎて觀察すると、其結果として、矢張不自然に陥る。餘り觸れ過ぎて却つて觸れぬやうなことになる。つて了ふ。かういふ態度にある人の文章は、何だか冷かで、輕佻で、厭な不愉快な氣がするものだ。

この『觸れかた』の如何に因つて、其人の文章の上手下手が極まる。否、これを押し廣めて、その『觸れかた』如何が創作の力と言ふことが出来ると思ふ。

この『觸れかた』を養ふに、何が一番必要かと言ふに、それは知識である。かういふ客觀的態度を重んじなかつた時代の文藝には、感情が詩文を作る上の第一の要素として重く視られてあつたが、今は知識が却つて感情の上位に立つこととなつた。感情も知識の加はつた感情でなければ役に立たないことに